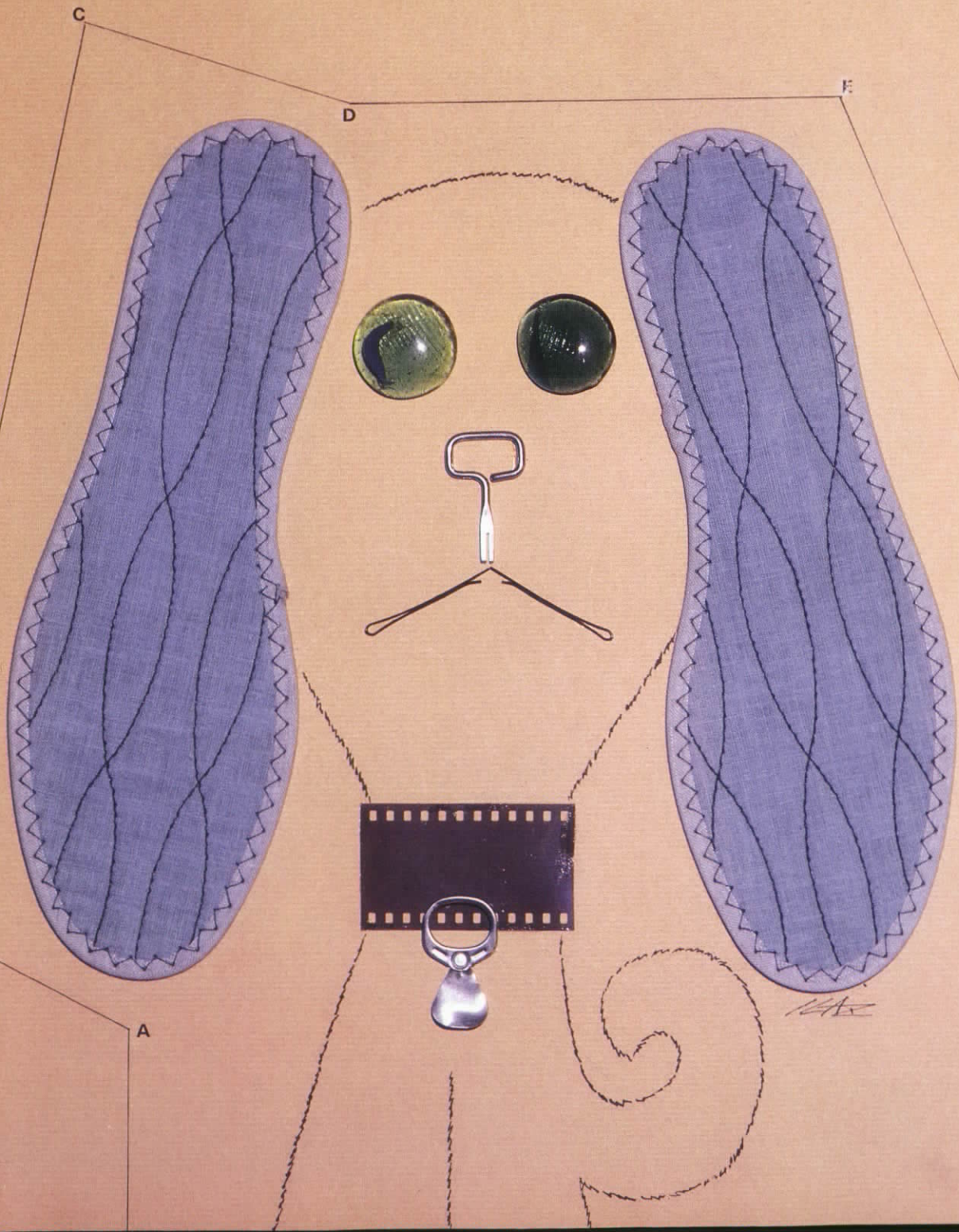
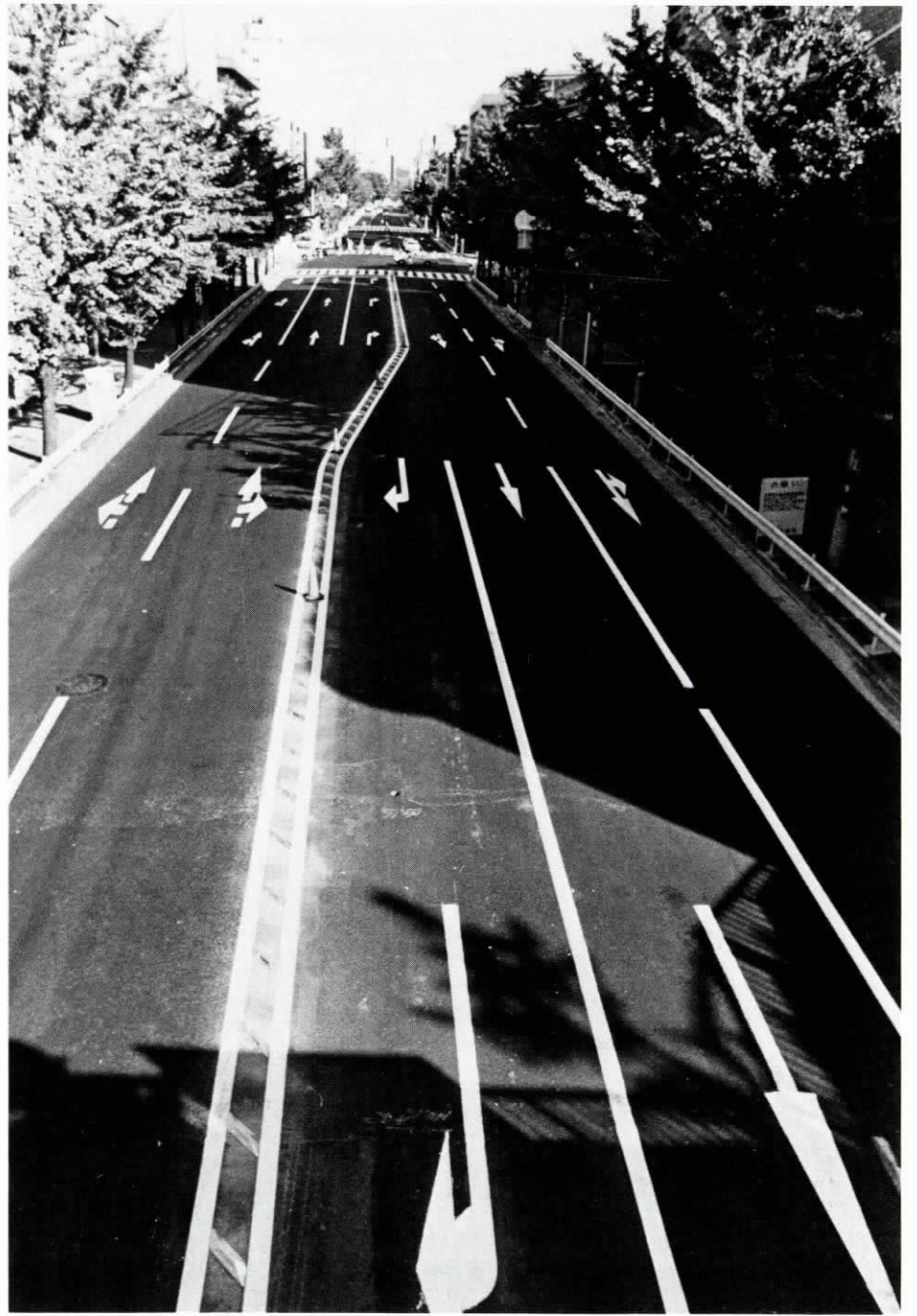


21世紀フォーラム

第14号

特集 座右の「もの」





2	中国断想篠原三代平	21世紀「フォーラム」	神崎宣武20年ぶりの高校野球	4
3	日・西独の労働意識滝田実		山城祥二筑波の水車	5

部会メンバーアンケート回答	44
座右のスタイル ■ 舛田忠雄	43
梅棹忠夫 佐々木高明	38
対談 / 玩物 / 創志	
堀 淳一	35
特集 座右の「もの」	
座右への依存 ■ 木田宏	34
吉田光邦	30
掛硯と帳箱から	
鎌倉彫りの手鏡 ■ 〇三山田	29
佐々木信也 宮本千晴	24
対談 / 『もの』に馴む	

特別
対談

国際摩擦と日本の進路

大来佐武郎 6
中村 貢

先進国病は日本に起こるか	11
ヨルダン戦争の光と影	笠井章弘 14
次の石油危機を引き起こすもの	奥山晃希 16
新エネルギーと法制度	政策科学研究所 18
用語でみるうごき	20

48 インタビュー ● おじゃまします
茅 誠司さん

50 私の近況
鈴木義司
伏見康治
青空うれし

フォーラムスフォーラム

2001年文庫

吉原幸子全詩 / 文化の翻訳	52
部会活動報告	53
第8回加藤秀俊部会報告	54
21世紀フォーラム部会メンバー	56

中国断想

篠原三代平 成蹊大学経済学部教授 大来佐武郎部会

中国とは、何と魅力的な国であろう。

だが、ときには人に大きな幻滅感を与えた国でもあった。たとえば、狭い国土、しかも、高々河川の長さ三百キロぐらいの日本で、三全総などとりくんできた人にとっては、広大そのもので、河川の長さ三千キロを超えると、ランド・プランニングを構想してみるには限らない魅力があるに違いない。

他方、かつて文化大革命という壮大な実験を礼賛していた評論家は、いったん政権がひっくりかえったあとは、大きな幻滅を感じとったことであろう。文化大革命に限りなく魅かれるものを感じていた人たちは反転して、中国の大きな動揺に困惑し、かつ判断にとまどうことになる。中国とは権力闘争の国であり、三千年来の歴史の本質はちつとも変わっていない、といった一歩退いて警戒の眼でこれを見る人も当然出て来よう、魅力は幻滅と警戒とに反転してしまうわけだ。

しかし、中国がいつまでも権力闘争のサイクルから脱し切ることができなければ、これは中国の悲劇である。アジアの中進国がかなり工業化に成功し、低開発国が中進国を追い上げる兆しも見受け

る中で、中国が依然として停滞のままだとすると、これは中国社会主義にとって、誠に由々しい問題だといわねばならない。中国は内に文革の経済的悪影響が残り、外に資本主義の隣国のより急速な発展をみる状況では、権力闘争に明け暮れているわけにはいかなくなる。中国を愛する者の立場からは速やかにこのような状況からの逸脱を要望したいのだが、私は「傾向」としても、権力闘争の弁証法からの

離脱は必須とみる。趙紫陽の下に行われた一連の改革、副総理十三名を二名に減らし、さらに行政機構をかつてみられない規模で簡素化し、効率化するという企図は、それが空前であるだけに、日本ではこれをクールに観察し、反動来を警戒する人もあるようだ。たしかに、これは中国にとっては、困難で、かつてない改革であるにちがいない。しかし、ソ連の例に徴すると、政治エリートの若返りは、

将来の中国の命運を左右する重大な課題といわねばならない。

しかも、一九八三年のマルクス死後百年を前にして、一世紀に及ぶ社会主義の実験から明白になったことは、たんなる「集権体制」の社会主義は人間性に反するだけでなく、結局ダイナミズムの喪失を来すということだった。したがって、中国の社会主義的実験の成否は、いかに社会主義体制を維持しながら、内に「市場原理」による活力を導入し、活力と秩序、進歩と安定を同時に達成しうるかにかかるといえよう。そうすることによって、搾取のない、公平で、しかも年々ハイがふくらむ活力ある経済社会が建設させねばならない。

「市場原理」といえば、これを対外的に活用するうえで、一九九七年には新界の租借期限が切れるので、香港の処理が重大だ。このさい、もし、香港がもつ資本主義的ダイナミズムを否定する政治的措置がとられると、香港資本は台湾やシンガポールに逃げよう。これは対外的市

場原理の否定であり、輸出の二二%が香港経由だという中国経済の成長に大きな打撃を与えざるをえない。

他方、国内的にみた場合でも、過去十年間天然繊維製品と化学繊維製品の価格比が殆んど一定だが、こういった価格体系の下では、一般に化学繊維の方の技術進歩が相対的に高いのが普通だから、必然的に相対的利潤高↓過剰生産↓在庫過剰の傾向が化学繊維工業に発生せざるをえない。マルクス経済学の言葉でいえば、これは「価値法則」が貫徹されていないということだ。対内的市場原理の滲透いかに観察すると、こういった矛盾が依然として残存し、適正な資源配分の達成が阻害されていることは否定できない。

一方、こういった市場原理の有効な運用は重要だ。他方において、社会主義体制と市場調節の整合を可能にする行政組織、企業組織、企業組織の改善もまた、中国の将来の発展のためには、きわめて重要な目標とならざるをえない。中国の健全な発展はこんご二十年、三十年にわたるアジアの安定のための基礎条件でもある。私の中国訪問はわずか二回にすぎないが、その都度、日本が中国の発展のために何をすべきかと思ひめぐらさざるをえないものがある。

日・西独の労働意識

滝田 実 アジア社会問題研究所理事長 大来佐武郎部会

三十余年間、各国の労働組合とつき合ってきた経験から、俗に「先進国病」といわれている国々が、労働運動のあり方に深いかかり合いがあるように感じられていたので、日本も、やがてそうした病気にかかりはしないか、一度、先進国病と労働組合の関連について突っ込んだ検討をしてみたいと考えていた。

そこで、昨年（一九八一年）の六月から、気心の合った研究者と話し合い、この問題に取り組んでみた。

私が昭和二十三年にセンセン同盟の会長に就任するとき、ある財界の大物が、「きみ、こんにちのイギリスをダメにしたのは労働組合だよ、そんな仕事に熱中するのはよしたまえ」といわれたことがある。「いや、それならば、国をダメにしない労働運動に一生を賭けよう」と、会社での昇進の道を絶ち、政界にも出ず、この道を進んできただけに、その後のイキ

リス、フランス、イタリア、そしてアメリカの現状を見るにつけ、やはり、先進国病と労働組合の関係を探究してみたいと考えてのことであつた。

それで、世界の優等生といわれてきた日本と西ドイツを比較し、なぜ、西ドイツが急速に状況が悪くなったのか、それには労働問題に原因がありはしないのか、その観点から、両国を調査比較し、「先進国病は日本に起こるか」をテーマに、新しい技術革新時代と労働関係に焦点をほつて、日・西独合せて約四千人を対象に労働者の意識調査を行なつた。

もともと、歴史や文化、価値観の異なる国を比較する場合、それが良いとか悪いとかは単純に結論づけることはできない。が、実際に意識調査を行なつて比較してみると、予想以上に大きな相違点があることが明らかになつた。

若干の例示をすると、

日本と西ドイツの労働者は、勤勉で仕事熱心であることは同じであるが、「誰のために」となると、まず、その出発点に大きな差があつた。いま勤めている会社を愛する姿勢には変わりはないのであるが、

「会社が利益を上げることが、あなたの利益にもつながりますか」との問いに対し、

日本は八〇%の者が、「そうだ」と答え、西ドイツでは、「利益にならない」と答え、西ドイツでは、正反対であつた。

この答えは、その他の調査項目を含めて解析すると、西ドイツでは労働者と使用者（会社）の間に、明確に、階級的対立観があり、日本の労使には企業の一休観があることが浮きほりになつた。

次に、

技術革新によるさまざまな変化のなかであつて、「あなたの生活を守ってくれる

のは？」の問いに、

日本は「労・使」と答えた者が六二%で、西ドイツは「労働組合」と答えた者が八〇%だつた。つまり、新時代で頼りになるのは「労・使」か「労働組合」か、に分かれる。ここにも、企業の一休観と信頼度について大きな差がある。このことは、会社は信用できない」と見るか、それとも、労働組合は頼りにならぬ」と見るか、議論の余地はある。

技術革新や生産性向上についても、日本と西ドイツでは、賛否が正反対であつたが、特に西ドイツでは、上層部は肯定的でも、下部の職場では反対なのである。ヤマ猫ストの原因はそこにあることがわかつた。

しかし、両国とも新技術導入時代を迎えて失業の不安が強い。そして、遠からず日本にも先進国病が起こる徴候は見えはじめている。

研究報告を発表してまだ十日間であるが、各方面からの関心は大きく、アメリカからの問合せがあつたのには、あまりの早さに驚いているくらいである。

（注・なお、同調査報告の一部を本号記事「先進国病は日本に起こるか」において紹介してあります）

20年ぶりの高校野球

神崎宣武

近畿日本ツーリスト(株)日本観光文化研究所
事務局長 加藤秀俊 部会

過日、久しぶりに高校野球を見た。

この夏は母校の調子がよいらしい、という友人の誘いがあった。郷里の球場に足を運んだのであるが、高校野球を生で見るのは実に二十年ぶりのことであった。球場に行くまでは、軽い興奮と感激を伴っていた。

球場の中は、時代が変わった、としか思えないほどである。球児たちの帽子やユニフォームは、メッシュでまことに格好がよい。補欠選手まで全員がおそろいである。そして、スタンドには、プラスチックを中心とした応援団が陣どり、チャールが乱舞する。地区予選でそのようなのである。私などは、一度として、そうした晴やかな状況で試合を行ったことはない。多少、ひがみたくもなる。

そこで、じじくさいことをいいたくないのだが、どうにも気障りなことが二つあった。その一つは、選手の脚力の弱さである。

いわゆる、足が速いとか遅いとかではない。足のバネが問題なのだ。地面を叩く力、ベースを蹴る力、そうしたキック力が全般的に弱すぎる。だから、すぐに足がもつれて、つんのめる。ヘッドスライディングといえは聞こえがよいが、その何割かは失態をカモフラージュするものではないか、と疑いたくもなる。

それに、ベースの蹴り方がまずいので、塁間の最短距離が走れない。私はテレビで高校野球を見て、セカンドランナーがワンヒットでホームインできない例が多いのを、かねがね不思議に思っていた。ランナーの足が遅いといつても、外野手の肩たつて未熟なのである。いま、その謎が解けた。三塁を廻るのに、大きな力一歩を描くからである。幼児が走るが如くスピードをゆるめ、しかも右手をグルグルまわさなくては曲がれない。ベースを強く蹴って、瞬時に直角ターンができないのである。なるほど、これではホームインはかなわない。

ムインはかなわない。

かくいう私であるが、私も高校時代は野球に熱中した。といつても二線級の投手でたいした記録を残しているわけではないが、それでも、そんなにまずい走塁をした覚えはない。走る時は前傾姿勢、足を前に上げて強く地面を叩くこと、ベースを廻る時は右足を強く蹴り体を左に倒して直角に曲がること、と教えられてそれなりに厳しい訓練もした。

後でそのことを親しい医師に話したら、それはこのごろの子供が、平らなところを靴で歩いて育ったせいではないか、という所見を得た。扁平足が多く足腰が軟弱な子供が増えた、という。それで、さもありなん、と合点がいった。

しかし、そうであるならば、また矯正の方法もあるのではないか。地方の町では、探す気になれば砂利道や砂浜もまだあるはずだ。もう少し真剣に、基礎体力を養うべきではないだろうか。次に、もう一つ気に障るのは、過剰な応援ぶりである。特に、あのコンバットマーチ。なぜ、ああものべつまくなしにコンバットマーチでなくてはならないのか。ものには間というものがあろうものを。

観客が一体となって選手の士気を鼓舞することは、まことに結構である。が、スポーツは、ただ興奮して観るだけでは

つまらない。特に、野球はそうではないかと思う。グラウンド上には、心理的な駆け引きがさまざまある。それを観察するのがおもしろい。また、たまには、観客席からも敵の作戦を予知して野次で攪乱させる妙味さえある。

ところが、コンバットマーチのおかげで、そうした観察や野次をはさむ余地がなくなっているのである。両軍のベンチにはメガホンが備えられているが、それもマーチの演奏中は、用をなさないことが多い。そこで、ベンチから伝令が出て、試合が中断する。野次もかき消される。掛け合いて続かない。単発の味気のない野次のみが発せられる。やがて、それにも被れて、試合の後半になるとベンチも観客席も極端に口数が減る。球場から会話が消えて、残るは、機械的にくり返すマーチと手拍子と掛け声だけ。これでは、かえって選手に情性を植えつけかねない。この現象は、またプロ野球でも同じである。

これでよいのだろうか。もっと別に野球を楽しむ方法があるはずだが。そして、野球自体も、もっとダイナミックでおもしろいゲームであるはずだが――観戦後、私は妙に醒めてしまった。

筑波の水車

山城祥一 山城組組頭・筑波大学講師Ⅱ国際交流研究部会

今、私は勤務の関係で筑波研究学園都市で過ごす時間が多い。実はこの筑波という土地は、食文化果つるところで、食へものだけは口クなものがないのが私の不満のタネだった。ところが最近になってその考えを覆すようなものをすこしばかり発見した。なかでも最大の事件はこの間本誌のアンケートにも記したように、水車でそばをひく粉屋さんを発見したことだ。

現在の筑波は、実に不思議な様相を呈している。見るからに索漠たる原野の中に立派な近代的建造物が立ち並び、先端技術による研究施設と研究者とを連結させた日本でも他に例を見ないテクノポリスとともにうつつそうたる屋敷林の中に極端に古い世界を今なお維持した農村地帯が共存している。

先述の粉屋さんは、農村地帯の奥深く、筑波山の中腹にある。先方の迷惑になつても困るので、所在地その他は名を秘す

が、筑波の峰から流れる水で水車を回し、伝統的な方法でゆつくりと時間をかけてそば粉ひきを行なっている。もともとは江戸時代末期に農家が副業として始めたことなのだが、現在はもう数えるほどしか残っていない。これはまことに生産性の悪い仕事で、一日フルに水車を稼働させてもひけるのはたつた二〇キログラムだという。そして、近郷の人々は、このそば粉を少しづつ買つては自分でそばを打ち、食へている。大量生産の食品のストリード消費に慣らされた我々には、ちよつと想像を絶する手間のかけように見える。

この、もともとの筑波の地域社会には、少し他とは違つた特徴がある。それは、独特の価値観をもち、それを容易にはゆるがせにしないことだ。この地は昔から、さまざまな支配者が入れ替わり、分割、統合を繰り返してきたのだが、一歩村に入れば、そうした政治的変動には

殆んど影響を被らず、何百年も変わらぬ世界がそのまま今日に至っている。そして、一皮むけば、近代化の波を軽々とはねのけている部分をたくさん見つけることができる。

そうした状態は、一見、古く、不便で、たとえは非衛生的というイメージなどが似合いそうだ。進歩発展とは無縁で、現代日本で支配的な価値観からすれば、いかにセシスの悪そうな世界に見える。道を歩く地元の人々も、村夫子然たる風情で、どう見ても「野暮なオッサン」ではない。ところが、そうした人々の住んでいるのは、樺、杉、竹などのいろいろな樹木と茅葺きの家として形成された、最高に美しい屋敷なのだ。そして、その「人為的な自然」の中に生きるライフスタイルの快適さはたとえようもない。夏、屋敷林に囲まれた家の中で、戸を開けひろげて昼寝する心地良さなどは、我が国で味わえる最高の境地のひとつといえよう。閉め切つた部屋の中でエアコンを回すのではなく、樹木や家のつくりなどを巧みに統合することによって、自然が快適さを運んでくる。ところが、一方でこちらはんの囲りにハ工がたかり、ハ工とり紙が健闘している、という状況もある。要するに価値の基準が新参入の都会者とは全く違うわけだが、この違いを承知した上でよくよく見てみれば、そこはおそ

ろしく洗練された美しい世界であることがわかる。そこに住む人々の美意識は、そのまわりによくごく最高の文化人自身認める学者、研究者たちが、実質的にはるかに及ばぬほど水準の高いものなのだ。そのように磨きぬかれた感受性と、それを支えるソフト・テクノロジの中て賢沢三昧の生活を送つてきた人々のもつ需要が、明治維新から戦争、戦後の高度経済成長など、幾多の変化をもはねつけ、ついに今日まで水車によるそば粉の生産体制を支えきつてしまつたことは、注目してよいのではないだろうか。ところが、新住民たちは全くそのことを知らない。水車でひいたそば粉でなければ満足できない人々の目に、製粉機で作つたそば粉ならまだしも、そば以外の混ぜものがたくさん入つた当世風のそばを平然と食へている先生方の姿はどんな風に映つてい

るのだろうか。この水車でひいた新鮮なそば粉を使い、つなぎには山芋と卵のみ、小麦粉はもとより、水の一滴も入れず、大の男が力をこめて打つたそばは目がくらむほど美味しい、そして、ちよつとした小娘に食べさせても驚嘆して「なぜこんないいものか」と消え、ニセモノが出回っているのか」ということになる。皆さん、このそばの話、どう考えますか？

国際摩擦と日本の進路

大来佐武郎部会Ⅱ

内外政策研究会会長／外務省顧問／国際大学学長

大来佐武郎

茅誠司部会

大来佐武郎部会Ⅱ

朝日イブニングニュース社代表取締役社長

中村 貢

レーガン流をどう評価するか？

中村 このところ国際摩擦が続発し、世界

政局に憂慮の聲が高まっている。なかでも、対ソ、対欧、対日強硬姿勢、高金利など、レーガン政権のやり方が問題で、レーガンそのものがイシューとすらいわれている。大来さんは最近ヨーロッパからお帰りになったばかりですが、あららではレーガン流のやり方をどう見ているのか、大西洋同盟の最大の危機といわれている米欧関係はどうなるのか……といったあたりからお話しいただきたいと思

います。

大来 そうですね。つまり、レーガン政策

自身から起こっている問題と、アメリカの政策の問題と両方あるわけで、また、レーガン問題は、大統領が言っていることとやっていることは少し区別する必要もあるんですが、高金利問題に対する批判が相当強いのは事実です。これはヨーロッパ、日本だけでなく、米国内でもかなり議論が出ているようです。「今の米国の政策は、金を扱っている人間を

儲けさせて、物を扱っている人間を痛めつける政策だ。これでは米産業は良くならない。

われわれも非常に心配している」と、ストックホルムでのアスペン関係の会議で、米国のあるメーカーの社長が語っていました。

また、ECは二千万以上の失業者を抱えながらも、これ以上米国の金利差を開くわけにはいかないので、強力な景気刺激策がとれない。日本の場合にはドル強円弱で輸出しやすく輸入しにくいいため、貿易摩擦を必要以上に拡大している。最近では不況で輸出が振わないという状況もあるが、世界景気が上向けば、

また日本の輸出が相当に伸びるという問題も

ある。それから第三世界の借金国では金利払いが大変で、ブラジルのデルフィンネット総済相に会ったとき、年間五十億ドル余分に払わねばとこぼしていた。韓国も十億ドルは余計にかかるという話を聞いています。ですから、米国の高金利については、米国内、欧州日本、第三世界と、相当に不満が蓄積している。

一方、レーガン政権というのは、大統領を囲む非常に強固なグループがあって、中まですなかなかに意見が届かないと嘆いている米国の

専門家もいる。国内での意見は聞えないから、外国から大声で言って欲しいという他方本願の話も出たりしました。

中村 欧州と米国との関係は、これまで危機的状況に見舞われても、何とかしのいでいた。ところがレーガンのやり方はこれまでの大統領のそれとたいそう違う。大西洋同盟に基本的なヒビを入れてもいいのか……と欧州では心配しているようだが。

大来 結局はあまり極端なことにはならない、という感じを僕は持っていますね。今度就任したシュルツ國務長官には何度も会ってませんが、割合に話し合いを重んずる人です。これまでレーガン側近とヘイゲとの対立でございましたし、米国の対外政策の本筋が読めないこともありました。シュルツになって、その点はもう少し統一された見方が出てくると思えます。

中村 政権の交代があったにしても、わずか三年のうちに外務大臣が四人もという状況は……。

大来 日本と同じですね(笑)。

中村 やめ方は日本より悪い(笑)。ソ連のグロムイコは二十五年もやっています。国柄が違うというものの、米国外交にもっと継続性と一貫性を求めたいですね。ヘイゲの解任もいびり出しといわれますが、カーターの時

のパンスト同一パターンだ。國務長官がホワイトハウスからいびり出されることの繰り返しでは困ります。外交をめぐるホワイトハウスと國務省の制度的な緊張関係を改めないかぎりよくならない。チーム・プレーヤーとして知られるシュルツの就任は好ましいが、カリフォルニア組で固めたホワイトハウス内部に外交戦略家がない。カリフォルニア以来のレーガン側近のクラークが国家安全保障担当の特別補佐官をしているが、荷が重そう。やはりキッシンジャー・タイプの外交戦略家が君側に欲しいと思います。

大来 欧州あたりでも、どうも今の米外交政策はインテレクチュアル・リーダーシップを欠いているとの批判はある。やはり、もう少し世界を納得させられるような行き方が見まじいと思います。しかし、東西関係について、レーガン大統領の言葉は非常に激しいが、

中村 話を日米関係に移しますが、野村総研の佐伯さんがおっしゃるには、米欧は今後別々の道を歩むかもしれないが、日米はおそらく相当長い間、同じ方向を歩むだろうと。日米関係で問題なのは方向ではなくて速度だということわけです。そのあたりどんなにお感じですか。

やっていることは慎重だということがある。また、「制度的緊張関係」というか、政府の現在の外交問題のリーダーシップについての現在の米国の制度については、『タイム』などにも出ていますが、米国内でもある程度考え出しているようですね。

中村 そう、選挙と政権交代による政治外交の空白を少しでも埋めるため、正副大統領候補が決定した段階で閣僚候補の名前を公表し、選挙に臨むべきだという学者もいますね。米国の政治制度は、米国が世界の政治責任を負わなくてもよかった大昔の時代のものだから、現状にそぐわないのは事実なんです。欧州もよくそれをいう。

大来 一国の長い歴史背景のあることを、すぐ変えてほしいと言っても簡単なものじゃない(笑)。日本の政治も外から見ればいろいろ注文もあるだろうけど、簡単ではないですね。

大来 方向の程度にもよりますね。たとえば対ソ関係ならば、日本よりも、米英の方向が一致していると思う。しかし、共通する面としては、やはりデモクラシーというか、言論の自由な選挙制度など、まあ欠点はあるかもしれないが他のシステムよりはましだという気持が、かなりの日本人にあると思う。そ

うした意味では方向は同じ、また企業を中心にした経済運営も大きな筋では合っていると思います。が、具体的にソ連の脅威をどう見るかということでは、やはり相当ズレがあるのではないのでしょうか。

中村 日米の摩擦ですが、日本は企業も政治も意思決定がボトムアップ型で時間がかかり、いつも米国をイライラさせる。一方、米国は大統領を中心にパッとトップダウンで政策を展開し、日本は驚かされたり、肩すかしを喰わされる。日米間のパーセプションギャップはこれから先も消えないと思うんです。

大来 そう、日本の官僚制度は慣性的な面が強いが継続性がある。米国は大統領と共に主な官僚が替わるので政策はやり易いが継続性に欠ける。一長一短あるわけですね。市場開放問題で米国人はよく、なぜ日本政府はもっとドラマチックなことをやらないのか、それでなければ印象に残らないじゃないか、と言いますが、日本では制度的になかなかドラマチックなことは出来ない。しかし、五年十年を振り返ってみれば自由化にしても相当なことをしている。そのあたりを認識してくれ

てもいいじゃないか、とよく言うんですが、なかなか、「そうか」と言はないので困っている(笑)。

中村 そのあたりが、佐伯さんのいう速度

制度の差が生み出す日米摩擦



の問題になるんでしょね。

大来 日本にだって選挙はあるし、選挙民の意向を無視して政治家が動くわけにはいかない。その点は米国と同じではないか——とよく米国人に言うんですが、そこらの議論になると、米国人は選挙民のことを忘れてしまう(笑い)。

中村 なるほど(笑い)。

大来 今年になってからも、関税前倒しで貿易障壁を少しでも減らすとか、オンプズマン制度を作って苦情処理の道を開くとか、一つ一つやっている。また一番文句の種になっている牛肉とオレンジですが、現在、米国の

牛肉輸出の六割を日本が買っている。オレンジにしても四割は買っているわけです。日本は世界最大の農産物輸入国でして、米国農産物

アメリカ株式会社の反攻作戦？

大来 専門家の話によると、コンピュータ分野では日本のハードはかなり強いが、ソフトではまだまだ水を開けられてるようですね。小判鮫というのは、IBMと同じシステムで使えるという意味ですか？

中村 ええ、互換機を作ってIBMのマーケットをいただいて商売することでしょうが、それはあながち悪いこととは思えない。写真

輸出の最大の顧客なんです。どうも、こうした現実が米国の広い層に十分に知られていない感じがする。日本が農業市場を閉鎖して何も買わないような言い方がされているので

中村 日米摩擦はしかし、これまでの鉄鋼自動車といった基幹産業から、先端技術産業へと発展しましたね。英国の経済誌『ザ・エコノミスト』が日本の先端技術の特集を組み、二十世紀のテクノロジーの王者アメリカは日本の挑戦を受けて、王座から転落せざるを得ないだろうという主旨を述べている。皮肉にも、そこへIBM産業スパイ事件です。本当に日本が『ザ・エコノミスト』が、イノベイティブ・ジャパンというほど進んでいるのか、IBM追従の小判ザメ商法から脱却できない状態なのか、世間は迷っています。

のフィルムでもテープレコーダーのテープでも互換性があるからマーケットがひろまった。問題は互換性路線だけではなく、創造性のあ

大来 従来、日本の技術は改善、改良といったことであって、創造的な点では弱くと言われてきたんですが、しかし、改良も積み重ねていくと創造的な面も出てくるわけですね。

日本はだんだんその段階に近づきつつあるのではないでしょうか。しかし、何から何まで日本がトップというわけにもいかないし、凹凸があればこそ国際交流も促進されるわけだし……。まあ、日本の社会は創造的な面で個人の能力が最大限に発揮される形にはなっていない。チームワークも企業という単位で行なわれていて、それが改良、向上といった面では有効に働いた。一長一短あるのではないのでしょうかね。

中村 そうですね。ジェットエンジンにしてコンピュターにして、英国の発明開発によるもので、米国の創造的イノベーションの産物はない。ただ日本には「和」を尊ぶ精神がありますね。「和」には一種の逃げやごまかしの側面がある。イノベーションやクリエイションは闘い取らなければ実現しない。「和」ばかり尊んでみると、イノベイティブ・ジャパンにはなりにくいのではないかと。

大来 そうですね。あちこちに足を引っ張られて、個人の創造的能力をフルに発揮させられない(笑い)。しかし、チームワークは相対的に強い。これは問題の性質にもよるのです。経済的にみると、創造的な技術は割合に人類共通の財産になってしまっているのが、応用面では商業的財産になる。以前、ある米国の学者に言われたんですが、日本はそうし

た人類共通の資産である基礎科学知識を商業的に応用して非常な成果を上げている。しかし日本も経済大国になったのだから、もっと税金を基礎科学研究の分野に回し、世界に提供することを考えてもよいのではないかと。

これはちょっと形が変わったフリーライド論ですね。僕らも日本が直接商業的な成果をあげない研究にもっと努力する必要があると思う。それがまた、創造的なものに通じるかもしれない。三年ほど前、日本貿易を中心にしたジョーンズ報告書が出ましたね。あれによると、鉄鋼も、コンシューマー・エレクトロニクスも、ついには自動車も米国は日本

に負け、残るのは農産物とハイテクノロジ。そのいわば米国産業の心臓部であるハイテクノロジにチャレンジされたことで、米国は相当に神経を使っている。

中村 「日本株式会社」に対する「アメリ

人類社会は確実に向上している

中村 東西関係に参りましょうか。レーガンの乱暴なやり方も問題ですが、ソビエト自体の行方も心配ですね。これも『ザ・エコノミスト』ですか、三年ほど前に、ソビエトのシステムは今世紀末までもたないのではないかと、しかし、その壊れ方が問題で、その時が

カ株式会社」の反攻作戦の開始だという人もありますね。

大来 そう(笑い)。ですから、これからもいろいろな形で問題は起こるのではないでしょうか。

西側にとって非常に危険である。むしろソビエトのシステムが壊れないようにすることが西側の利益だと書いていた。それが米欧の対ソビエト観の違いですね。太陽と北風じゃないが、欧州は太陽を、レーガンは北風をよしとする姿勢が続き、それが米欧摩擦になり、日米摩擦にも波及し、国際政局はつねにギクシャクといった状態が続くでしょう。

大来 この前、スイスでシンポジウムがありましたね。ジームス・レストンが演説したんです。その中で、とにかく三千年間、大きな戦争はない。人間社会全体の生活水準もかなり上がっている。米ソ関係もそう簡単には戦争するわけにはいかない。ある意味では、人類の歴史で非常にいい時期ではないか(笑い)。ということをちょっと言っておりました。現在生きている社会の危機が目につくのは当然ですが、日本だって、第二次大戦前から戦中にかけての危機の状態と今の状態は雲泥の差ですよ。まあ、人間というのはい

つも危機を口にしていないと安心できない……(笑い)。楽観ばかりもしてられないのかも知れませんが、大きな方向としては、核を使うような大きな戦争は事実問題としてなかなかできない。経済にしても、不況もあり後戻りもあり、成長の速度が落ちたにしても、全体としては前進し、成長している。まあ、問題はありますが、世の中、そう悪い方向に向いているとも言えない……。

中村 そうですね。それからさき、国際秩序がどう再構築されてゆくかです。戦後の国際秩序は、大戦の勝者の米英ソが作り上げた、政治は国連、経済はIMF、ガットでというシステムであったのですが、三十数年、その機能の衰えを、いろいろな彌縫策でカバーしてきた。戦中に作られた国際秩序を平時に再構築するのは至難のわざです。ですから半身不随の国連を補ういろんな周辺システムも続けないといけないと思います。たとえば先進国サミットも年に一回、あんな政治ショーは無意味という声が、日本政府の中にすらありますが、日本を代表してサミットに出席された大来さんのご感想はいかがですか。

大来 僕は大平さんが亡くなられてのピンチヒッターとして、政府を代表して出席したわけです。外相としてはもともと出ることになっていたんですが……。まあ、やはり世界



● 大来佐武郎

の情勢からみて、ああしたものが必要ではないかという感じはします。第一回のランブイエ会議以前に、さきほどのジエームス・レストンの「これまでも首脳会議はたくさんある。なぜ新しく設ける必要があるのか」という質問に対し、発想者のジスカールデスタンが「一つだけ違うことがある。それは今回は日本を含めることだ」と述べていたのが記憶に残っていますね。

中村 あの時、ランブイエのお城に首脳たちがこもり、腹を割って話し合うということでしたが、回を追うにしたがい、官僚たちの書いた脚本にしたがって舞台が進行し、首脳たちはまるで道化役……。そうでないサミットにしたかったのが、七カ国の開催地を一巡して、ふりだしのフランスへもどる第三ラウンドに入ったミッテランの腹ではなかったんですか。

大来 それはベニスの時にもサッチャーが言っていましたね。エネルギーの消費目標とかの細々したものを首脳宣言に入れるのはどうだろうかと。カーターは、自分がエンジニア出身のせいかもしれないが、具体的な内容を持った声明であることがむしろ望ましいと思うとかで、まあ、他の首脳も、あってもいいのではないかということになったんですが、官僚の作文を鵜呑みにするのでは意味がない

といった議論は出てきましたね。特にトルドーが、この次カナダでやる時は、なるべくサッチャーの言った点を考慮していくと発言していました。やっぱり現代は組織の社会でして、積み上げた官僚の準備を無視した意見交換では、まとまりがつかないという問題があるんです。しかし、今回のベルサイユを見ていても、その官僚たちが作った原案を相当変えて

日本の役割は国際社会の建設者

中村 来年のサミットは米国ですね。レーガンが中心ですから、従来とは相当に違った感じのものになりそうですね。

大来 そうですね。ある程度の準備は官僚がやらなくては無理ですが、その用意したものを首脳たちが変える部分も必要だと思う。ただ、サミットが大きなお祭りになってしまっただけになってはいけません。首脳たちも毎回その点を発言しています。まあ、両方持ち寄った形が続くと思いますが、今の世界情勢では、やはりプラスの面がある。他の首脳たちはよく会っていますが、日本なんか特にアイトレットしてますから……。

中村 なるほどね。さらに長期的に考えると、国連のあり方など、もう少しどうにかありませんかね。安保理の構成を現在の十五カ国から二十五カ国にするとか、常任理事国を

いる。レーガンが帰国してから、一方的に別のことを言い出して、これじゃ何のために会議を開いたか判らんということになったんですが、そうしたプロセスがあったことは欧州なり日本なりの意思表示ではあるわけですから、まああしたものの存在価値を一応は考えていい。

日本の役割は国際社会の建設者

増やして地域代表も入れ、しかも全会一致方式じゃなく多数決方式にするとか、少なくとも国連が生まれたときに考えられたような国際平和の維持に役立つものにならないかと思うんです。また、日本や西独といった国が常任理事国になれないか。憲章改正、五大国のもつ拒否権などを考えると、とても難しいとは思いますが……。

大来 まあ、安保理のメンバーを増やすなら、世界全体に対する影響力、また南北の関係からいっても、日本、西ドイツ、インド、ブラジルあたりを一緒に考えるべきでしょうね。あのビートル（拒否権）というのが問題なので、私も専門ではないのですが、三分の二マジョリティーとか四分の三マジョリティーという方法はないのですかね。とにかく世界各国の相互依存関係が強まるなかで、ます

ますコミュニケーションが必要になり、集団的に物事を決めていかななくてはならない。いつまでも、第二次大戦の遺産を受け継いだ形というのは、やはり相当に無理がある。

中村 ええ、ですから、二十一世紀までになんとか国連が現代風に修理か再構築されることを望みたいです。

大来 まあ、国際社会における日本を考えますと、軍事大国になるのは避けねばならない。日本にとっても世界にとっても望ましい姿は、やはり軍事以外の建設的、生産的な面での役割を果たすことでしょうね。先日、ワシントンのプレスクラブの演説でも述べたんですが、日本は途上国援助の面で世界最大の寄与をするんだという方向に努力すべきだと思います。これは非現実的な数字ではありません。今の鈴木さんの援助五年倍増をもう一度やれば、米国を追い越して世界最大になる。世界の食糧増産とかエネルギー開発とか、あるいは森林減少などの環境の破壊防止といった面で、日本はユニークな役割を果たすべきではないかと思えます。

先進国病は日本に起こるか

「先進国病は日本に起こるか——日本と西ドイツの比較を通じて」と題する共同研究報告が、アジア社会問題研究所（滝田実理事長）から発表された。この種の研究はわが国では初めてのものであるだけに、早くも内外で反響を呼んでいる。そこで本誌では、同報告書の中から、両国労働者の意識を端的に示した第二篇の「技術革新と職業に対する日・西独労働者の意識に関する調査」の要旨を紹介することとした。なお、本報告書は、第一篇の「先進国病の理論的分解」と合わせて構成されている。

編集部

本報告は、「いわゆる先進国病研究プロジェクト」として、アジア社会問題研究所を実施主体とし、滝田実氏のほか舟橋尚道（法政大学教授）、千石保（日本青少年研究所長）、前島巖（東海大学教授）、入江奎爾（学生援護会経営企画室長）、大曾根寛（東京都立大学大学院）の各氏が参加して実施された。そして、この共同研究は、資本主義先進国の優等生といわれてきた日本と西ドイツを取り上げ、経済問題の中でもとくに労働問題に焦点をあて、比較検討しながら、両国が抱える問題状況を明らかにしようとしたところが特色である。

第二篇の「技術革新と職業に対する日・西独労働者の意識に関する調査」は、文字通り技術革新に対する日本と西独労働者の意識ないし態度を浮き彫りにするものであり、合わせて、これと関連する企業意識、仕事意識についても両国労働者の差異を明らかにしている。その調査項目は、つぎの六つである。

- 一、技術革新に対する意識
- 二、マイコン利用機器導入に対する意識
- 三、技術革新と職業訓練
- 四、技術革新と労働者の生活

技術革新 日本は「歓迎」、西独は？

一、技術革新意識
技術革新に対する日本・西独労働者の意識は、「技術革新は会社で働いているあなたにとって、利益をもたらす方が多いか。それとも不利益をもたらす方が多いか」という設問に対し、日本では「利益になる」と考えるものが八割と圧倒的に多い。総じて技術革新に積極的な意識をもっている。これに対して西ドイツでは、「利益になる」と考えるものが三一・六%にすぎない。しかも二十代後半以上では、ほぼ二・三割だけ。職種別では技術職が比較的高く、事務職、肉体労働で低くな

- 五、企業に対する意識
- 六、仕事に対する意識

本調査は、アンケート方式を主体とし、これを補足して訪問調査も行なわれている。調査対象は、技術革新が最も進んでいる産業の労働者で、日本側は自動車産業の一社二工場と電機産業の一社三工場、西独側は自動車産業一社一工場と機械産業一社一工場。アンケートの配布枚数は、日本・西独とも各二千枚の計四千枚。有効回収率は五五・六%である。なお、アンケート実施は、一九八一年十一月から一九八二年二月までの期間。訪問調査は、一九八一年十月から十一月が西独で、一九八二年三月には日本でそれぞれ行なわれている。

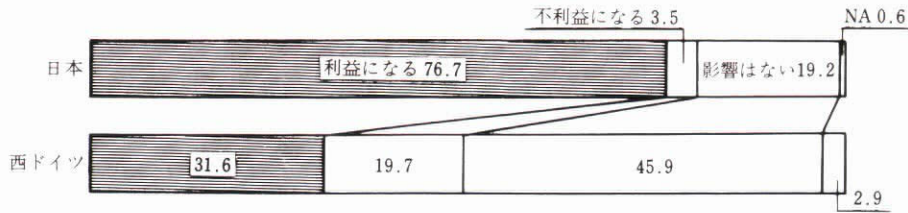
ついている。逆に、「不利益になる」と考えるものは、西ドイツで一九・七%に止まっているが、「自分にとって影響はない」とするものが四五・九%あり、日本の一九・二%よりもかなり高いのが特徴である。それも、事務職、肉体労働に多い。

二、マイコン利用機器導入の賛否
ここでいうマイコン利用機器とは、産業用ロボット、NC機器などマイクロ・コンピュータを利用した自動化・省力化機器を総称したものである。

「マイコン利用機器を事業所に導入することについて、どう考えるか」の設問に対する賛否は、日本では「賛成」が七九・

図1 技術革新に対する意識

〔総計・日・西独比較〕(単位・%)



二%、西独では「賛成」三四・二%で、「反対」が四八・八%もあるが目立っている。

この「賛成」の理由では、日本は「近代的な労働環境になるから」が五〇・五%であるのに対し、西独では「仕事がいさしくなるから」五一・八%と、仕事に対する意識の違いをはつきりとみせている。また、「反対」の理由としては、日本・西独ともに「失業者が出るから」が七〇%以上を占めており、雇用不安が主たる動機となっている。

三、マイコン利用機器導入に対する意識の背景

技術革新意識からマイコン利用機器の導入の賛否をみた場合、日本・西独いずれも技術革新に積極的なものは導入にも肯定的で、消極的なものは否定的であるところが、生産性意識、企業利益意識から導入の賛否をみると異なってくる。西独では、生産性向上、企業利益向上に積極的であると導入に賛成。逆に、消極的な層では導入に反対である。これに対し日本では、生産性・企業利益意識にかかわらず導入に賛成が多い。つまり、日本では「生産性向上あるいは企業利益に積極的だから」マイコン利用機器導入に賛成と考えるだけでなく、マイコン利用機器導入は技術革新の進展と把える信頼と積極性が一般的傾向となっている。

四、技術革新と職業訓練

技術革新の激しい今日、これまでの職業教育は充分であったかどうか。否定的

なものが日本八七・八%、西独六八・四%と多数を占めている。

したがって、「マイコン利用機器の操作等についても訓練を受けたか」の設問にも、否定的回答が多く、全対象者のうち日本は五一・四%、西独では六七・二%が「受けていない」と答えている。なお、西ドイツは制度的にエリートは別として、伝統的に職能が中心の教育制度。職能所有権意識が強く、既得権意識が根強い。

五、技術革新と労働者の生活

「あなたの会社の労使協議制は、技術革新にどのような影響を与えているか」の設問では、日本・西独ともに「促進する」が四割前後を占めるが、「抑制する」が日本が二・一%に対し、西独は一五・〇%と比較的高い。また、「技術革新が職種の転換をもたらしたか」では、日本・西独

ともに大部分が「技術革新によって職種を変えたわけではない」と答えている。現在までのところ、技術革新の職種転換へのインパクトは小さかったようだ。

さらに、経済問題については、日本・西独とも「自国の経済に問題がある」と考えている。その原因となると意見が分かかれ、日本の八八・六%が「政府」に原因があるとし、西独では五三・六%が、「経営者」に、三四・三%が「政府」に原因があるとしている。そして、このように問題が多い経済情勢の中で技術革新をすすめるとき、「あなたの生活を守ってくれるのは何か」では、日本は「企業と組合」が六二・三%、西独では「組合」が八〇・三%と、それぞれ特徴を示している。

労使一体・企業依存型の日本 西独は労使対立的・独立型

一、企業と労働者

「生産性を上げることは、労働者にとつてよいことか」の賛否を求めた結果は、日本の労働者の八七・二%が「はい」と答え、西独では七二・八%が「いいえ」とし、「はい」は全体の約五分の一にすぎなかった。そして、生産性を上げた結果として、「会社が利益を上げることが労働者の利益につながるか」では、日本では九三・五%が「はい」と答えたのに対し、西独では「はい」は二四・三%。大多数の七三・五%は「いいえ」である。つま

り、日本の労働者は会社がよくなることは「自分の利益につながる」と歓迎しているのに対し、西独労働者は十人のうち七人以上が「不利益になる」と考えている。大きな相違点である。

こうしたことから、「働く意義のなかで、大切なものはどれか」を問うと、日本は①賃金が上がること(六一・八%)、②労働時間の短縮、③自分の決定範囲が多くなること、の順。西独では、①労働時間の短縮(四七・三%)、①賃金が上がること、③自分の決定範囲が多くなること、

図3 働くことに対する意識

〔総計日・西独比較：私はいつも一生懸命働いていないとおちつかない(賛否)〕 (単位・%)

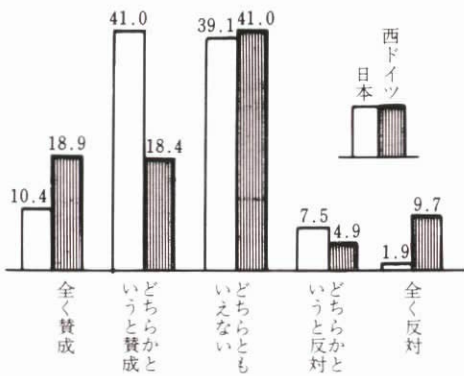
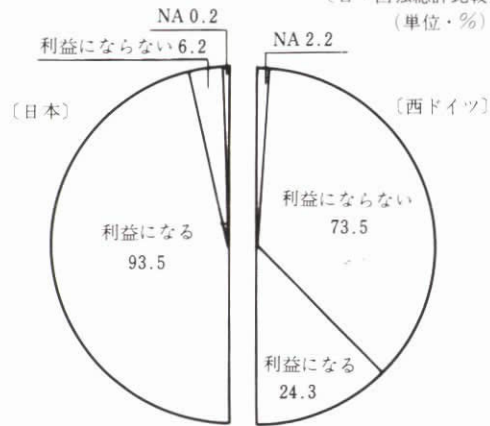


図2 会社が利益を上げることは労働者の利益になるか

〔日・西独総計比較〕 (単位・%)



の順である。

日本の労働者は、労使一体観・企業同化で、親和的。新技術の導入にも柔軟。西独労働者は、会社と個人とは別の存在で、個人生活をなによりも大切にしている。立的・独立的な意識を持っている。

二、「働くこと」に対する意識

「私はいつも一生懸命働いていないと落着かない」とするものが、日本では過半数を占め、西独でも三七・三%となっている。なかでも、日本の労働者の働きぶりは徹底的にやるもので、「いわれた仕事だけをやる」ことに、六三・六%が「反対」。西独は「反対」四三・二%、「賛成」二五・三%である。そして、日本の労働者は、「他の人も一生懸命働かないとイライラする」と六三・八%が肯定しているほど。いずれも団塊の世代にきわだっている。この日本の労働者を働きにかりたてているものは、「結局、熱心に仕事すると、優遇される」という会社に対する信頼と依存意識である。

一方、西独労働者の勤勉性は、会社に対する奉仕の意味はなく、限定された仕事に対する一応の責任を果たすことで、義務は履行されたと考えている。

三、「会社」に対する考え方

「上司は、会社内の情報を教えてくれるか」の設問では、日本では「教えてくれる」のが高いのに対し、西独ではまったく教えていない。これは職種別でも明らかで、西独では労働者と会社とは独立した存在であるから、上司は情報を伝達す

る必要はないと労働者は考えている。また、「上司は人間としてではなく、数字のように扱う」ことに対する賛否では、日本は過半数が「反対」、「賛成」は八・二%なのに対し、西独は「反対」ないしは「どちらか」というと反対「合わせて四四・四%」「どちらともいえない」が三四・二%で最も多い。

転職については、日本・西独ともに「転職したくない」層が圧倒的。ただ、日本の労働者は、会社への同化を通じて会社と一体となることで愛着を生んでいるのに対し、西独労働者は、会社を愛することと、仕事を愛することの二つの意識を別のものとして併せ持っていると思われる。

最後に、「もし遺産でもころがり込んで、働く必要がなくなったらどうするか」の設問に対し、日本の労働者は約六割の人が「それでも働く」と答え、西独労働者は四割以上の人が「働かない」に賛同している。

以上の調査報告は、ここ数年の日本と西独を比較する場合、意識の相違が根底にあることが明瞭になった。が、先進国病が発生し、悪化するかどうかは、経済成長が高ければ表面化されないが、純化・マイナスになれば、日本でも雇用問題を中心に、先進病が起りうることを暗示している。

レバノン戦争の光と影

(財)政策科学研究所理事長
21世紀フォーラム事務局長

笠井章弘

▼レバノン終戦の状況

八月二十一日、パレスチナ解放機構（PLO）ゲリラの第一陣約四百人は、レバノンのベイルート港からキプロスのラルナカに向かつて出港した。

ここに勃発以来二カ月半にわたったイスラエルとレバノンとの戦争は、一応の終結を見たわけである。両者の調停はハビブ米中東特使の手でおこなわれ、およそ次のごときものであった。

その一、まず国際監視軍のフランス軍先遣隊三百五十人が、ベイルート港に展開して、PLOゲリラの退去を監視する。

その二、退去は八月二十一日に開始され、五日間にわたって負傷者を含む二千五百人から三千人のゲリラがチャーター船に乗って海路キプロスのラルナカ港に向かう。同船はアメリカ、イタリア両国の艦艇により護衛される。このグループはキプロスからさらに空路ヨルダン、イラク、エジプトに向かう。手術の必要な負傷者はギリシアに送られる。

その三、退去開始五日目から七日目のあいだに、残りの国際監視軍の全兵力が、レバノン政府軍と共に東西ベイルートの境界線「グリーンライン」沿いに展開する。アメリカ軍は国立博物館周辺など中部に八百人展開し、イタリア軍は市南部から国際空港に至る地域に五百三十二人展開される。

その四、退去開始七日目から十四日目

までに、アラファト議長らPLO幹部を含む残りのゲリラが、バスで陸路ダマスカスに行き、その後受入先のアラブ諸国に向かう。

以上が、今回のレバノン戦争の終結の様相である。

今回のレバノン戦争の特色は何か。アラブとイスラエルとの戦争としては第四次中東戦争につぐもので、その意味から第五次中東戦争と呼べないこともない。

また、アラブとイスラエルの戦争においてアラブ国家の首都（レバノンのベイルート）が、イスラエル軍の侵襲という新たな状況を利用してPLOとシリア軍の全面撤退を実現させ、親イスラエル、親アメリカの路線による「新生レバノン」建設に向かうものと推察される。

▼奇妙な「傍観者」

ルート）が包囲・占領されたのは、今回が初めてである。

さらに、一九四八年の第一次中東戦争（イスラエル独立戦争）を除き、今回の戦争が最長の時間（約二カ月半）を要した。

第一次から第四次までの中東戦争におけるアラブ側の軍事的な主役は、主にエジプトであった。しかし今回の主役はPLOゲリラとシリア軍であった。そしてレバノン自身は自国で戦争が展開されたにもかかわらず、まことに奇妙なことに国としては初めから終りまで公式的立場は「傍観者」で通したことである。

この奇妙な態度のレバノンは、今何を考えているのか。

戦略を展開していくか、そこが問題である。今のところ即断はできないが、九月おこなわれるアラブ首脳会議が、PLOの今後をうらなう最初の試金石となる。

さて、イスラエルはPLOのレバノン退去とシリア軍のレバノン撤退を実現させた。これは今回のレバノン戦争におけるイスラエルの最大の成果である。しかし、イスラエルは次の手を着々と打っている。それは親イスラエル政権をレバノンに樹立することである。これはレバノンの右派キリスト教勢力を中心にレバノン新秩序の確立ということであり、それが実現されたとき、イスラエルにとってカイロ・エルサレム・ベイルート（エジ



プト・イスラエル・レバノン」という政治的・軍事的路線の形成が可能となるわ

▼イスラエル優位の秘密

さて、今回のレバノン戦争におけるイスラエルの優位は、何によって獲得されたか。レバノン侵攻におけるイスラエル軍の圧倒的強さの秘密とは一体何か。イスラエル軍は、ソ連製の最新兵器を装備したシリア軍に一方的に勝ちまくった。いうまでもなくPLOの兵器などは全く問題にできなかった。

たとえば、ソ連製の地对空ミサイルSAM6、SAM7などに守られたシリアの防空陣地は、イスラエル軍によって簡単に撃破されまいだろうと、軍事専門家は予想した。しかしながら、この予想はいとも簡単に打ち破られてしまった。

イスラエルの打った手は、なかなか興味深いものがある。まず無人偵察機を飛ばして、ソ連製ミサイルSAMの周波数

けだ。これがイスラエルのレバノン戦争の狙いであったということができよう。

をしらべあげ、その上でF4ファントム戦闘機が対電波攻勢をかけて相手のミサイルをめぐらして、そののち攻撃にかかるというものだ。そのため、イスラエル空軍はシリア空軍の三分の一の約八十機以上を撃墜してしまった。

▼戦争終結における米・ソの影

シリアのアサド大統領は、イスラエル軍がシリアに侵攻して以来、極秘のうちにソ連を訪問したといわれる。そこで何が語られたか。ここに一つの推測がある。それはシリアがソ連経由でアメリカとイスラエルに対し、シリアの不戦の意思とその見返りとしてのベカー平原（レバノン領）の併合を認めさせたという情報である。これを裏付けるがごとく、シリア軍が現在にいたるまでベカー平原を占し

たままであるが、これに對しどこからも非難の声が上っていない。まことに不可思議なことといわざるをえない。また、ソ連のグルムイコ外相は七月五日、カドゥミPLO政治局長に対し、外交努力以上の（軍事・経済援助）支援をPLOに對しておこなわない旨を表明した。七月六日、レーガン米大統領は、PLOのベイルート撤退と平和維持のため、米軍を派遣することを基本的に合意したこと

また、ソ連が誇るT72戦車をイスラエル国産のメカルバ戦車が多数撃破した。メカルバ戦車は、ソ連製T72を徹底的に研究してその弱点をさぐり出し、そこを攻撃できるように設計されているといわれる。

この兵器における優位性が、イスラエル軍をして短い期間に、軍事専門家の予想をくつがえして、勝利にみちびいたものとおもわれる。

を明らかにした。

時を同じくした米・ソ連首脳はレバノン戦争に対する意思表示は、レバノン戦争の終結が七月初めの段階で、枠組みが決められたものといっている。

しかし、西ベイルートからPLOが退去後も、北部レバノンにはPLO三千、ベカー平原にはシリア軍が残存している。レバノン危機の次の段階は今年の十月から来年二月にかけて起こりうる、という不吉な情報も流れていることも、忘れてはならない。

レバノン終戦を契機として、パレスチナ問題を中心とする中東和平問題は、九月初旬に予定されているアラブ首脳会議を頂点に、新しい展開が予想される。

（八月三十日）

次の石油危機を 引き起こすもの

七月の初めに、国際エネルギー・エコノミスト協会は、ケンブリッジで会議を開催し、会議の終りに、出席した世界のエネルギー・エコノミストにユニークな世論調査を行った。質問は、「次のオイルショックを引き起こすものは、何か」であり、解答は、次の通りであった。(フイナンシャルタイムズ七月八日号)

① 石油価格上昇要因となるもの
サウジアラビアでの革命 二二%

アラブ・イスラエル戦争との関係

六月六日、イスラエルは、レバノン南部に侵攻し、PLOはノバノン市西部に追いつめられた。イスラエルの要求は、ベイルート西部に立てこもる七千人のパレスチナ・ゲリラの武装解除と、PLOのレバノン退去である。イスラエルの侵攻作戦は軍事的にスムーズに行われたが、この成功を支えたものは、イスラエルの読み通り、シリアを除いてアラブ陣営のうちの一カ国もPLOのために血を流さうとした国がなかった事実である。今度

イラン・イラク戦争との関係

六月十日、イラク革命評議会は、イラン・イラク戦争を終結させる方針で、イラン内の全占領地から二週間以内に完全撤退すると発表し、その後撤退した。一方、イランは、軍をイラク国境に集結していたが、七月十三日、イラクに逆に進攻開始し、バスラ地区支配をめざした。イラン進攻の意味するものは、①ペルシ

中東での戦争 一三%
中東からの一時的石油供給中断一五%
ガルフへのソ連の侵略 九%
原子力発電所の重大事故 九%
② 石油価格下落要因となるもの
オペックの崩壊 九%
オペック域外での大油田発見 二%
③ その他 二二%
合計一〇〇%
中東が危機の最大の原因となっている

の戦いは、アラブ陣営における「建前」と「本音」の違いを暴露した。この結果、サウジとの関係で次の三点が重要である。①国内的には、支配層と民衆間に分裂の恐れがある。民衆はPLOを助けようとの気持をもっており、何もしない支配層への不信感をもった。一方、アラブでなくペルシヤであるにもかかわらず、レバノンに義勇軍を派遣したホメイニとイラン革命の魅力が、少なからず民衆に影響を与えたであろう。

ヤ対アラブの民族戦争、②サダムフセイン政権の打倒、③賠償金(千五百億ドル)要求交渉の有利な機会を得ること等である。現在のところイラクの防戦が成功し、圧倒的なイランの勝利はむずかしいと思われる。この戦争とサウジとの関係で重要なことは、次の四点である。

点は当然と思われるが、サウジアラビアでの革命が二二%と高いのが目立っている。サウジアラビア(以下サウジ)で革命が起るか否かを論ずるのは、むずかしいので、ここでは、中東政治と石油問題の中でサウジの置かれている立場を、①アラブ・イスラエル戦争、②イラン・イラク戦争、③オペックとの関係、から考えてみたい。

アラブ・イスラエル戦争との関係

②サウジの米国に対する発言力低下(米国を通じイスラエルを抑制する)に伴う、サウジの対外的リーダーシップ低下(オペックにおいて)
③今回の事件で、エジプトがなければアラブは軍事的に無力であることがはっきりしたため、エジプトとサウジの復交が促進され、エジプトのアラブ復帰実現の見込が強い。

イラン・イラク戦争との関係

①イラン・イラク戦争は、宗教戦争(シリア派対スンニ派)、民族戦争(ペルシヤ対アラブ)の性格を持ち、イラン対アラブの戦いは長期的に続くと思われる。
②サウジおよび湾岸諸国は、イラクに二百五十―三百億ドルの無利子融資を行い、テコ入れを行ってきた。サウジは、その責任上、イラクの代わりに賠償金をイ

オペックとの関係

ランに支払わざるを得ないであろう。
③湾岸アラブ協力理事会（AGCC）の
本当の目的は、治安問題（パレスチナ弾
圧とシリア派への防衛）であるが、イラ

ン・イラク戦争に対し軍事力の欠如を露
呈した。
④この戦争におけるイランの優勢は、オ
ペック内部におけるイランのサウジに対

する発言力を増大させ、イランの増産要
求と賠償金問題が連動するようになった。
石油問題に中東政治がからんできた。

七月十日、ウィーンでのオペック臨時
総会は、三月十九日から二十日、ウィー
ンでの臨時総会で決めた三点（①マーカ
ー原油三四ドル体制の維持、②マーカ
ー原油とアフリカ原油とのデيفاレンシ
ヤルを一・五〇ドルとする。③生産調整
を行い、オペックの全生産量を一七五〇
万バレル／日（以下BD）とし、各国別
の生産上限量を決める。）のうち、マーカ
ー原油三四ドル体制のみ残して、デيفا
レンシヤル、生産調整は意見の一致を
みず、各国の自由任せられる形で閉会
した。この臨時総会に、サウジのヤマニ
大臣が欠席した上、サウジとイランの意
見が対立し、最後まで妥協がならなかつ
たのが原因である。日本の新聞は一勢に
「オペック決裂—分裂崩壊の危機」という
トーンで大騒ぎしたが、当事者のイラン
のガレジ石油大臣は、「これは、途中の出
来事であり、進行中のゲームの一部であ
る。」と述べており（MEES七月十九日）
これから予断は許さないが、まだまだ先
のある話である。サウジとの関係で論点
を整理すると、次のようになる。

調整について、イラン、リビアの要求が
受け入れられずに会議は終わった。イランは
二五〇万BDの割当量の内増分（一三〇
万BD）はサウジの枠内から公式に削減
されるべきであると主張し、リビアも一
二〇万BDの割り当てを要求し、増分四
五万BDはサウジから削減されるべきと
主張した。サウジの主張は、生産水準に
関し、オペックのフレームワークの中で
討議することに反対しており（生産量の
決定は国家主権に属す）、サウジはすでに
生産量を自主的に落して、オペックには
十分協力しているという。（一七五〇万B
Dのうち、サウジは七一五万BDであり、
イラン、リビアの主張を入れて削減する
と、五四〇万BDとなる）イランの生産
割り当てについての考え方は、サウジ五
〇〇万BD、イラン三〇〇万BD、イラ
ク二〇〇万BD、合計一〇〇〇万BDで
あり、オペックの生産量が過去最大の三
三〇〇万BDから一七〇〇万BDの半分
になったので、この三方国のシェアも
過去の最大生産量の半分とする、という
理窟である。イランは、また、生産割り
当ての基準として人口、埋蔵量、財政的
必要性、歴史的シェアと国内消費量（最
重要）を上げている。

サウジの生産量をオペック内部の枠組
みに組み入れて値上げを容易にしようと
いう動きと、米国、アラムコの協力を得
ながら生産量決定にフリーハンドをもち、
オペックのリーダーたらんとするサウジ
との、オペック内部抗争は激化している。
②デيفاレンシヤルについては、サ
ウジはアフリカ原油を一・五〇ドル値上
げして、アラビアンライトとの値差を、
三ドルに広げることが要求したが、湾岸
諸国以外、賛成を得られなかった。（これ
は元々虫のよい要求）
以上、サウジのかかえる問題点を列記
した。従来サウジは親米路線であり、サ
ウジのアラブ・オペック内での力の源泉
は、米国への発言力であった。米国の中
東政策は混乱しており、イスラエルを抑え
えられない米国への不信感がサウジには
強まっている。今後、親米路線に対しサ
ウジ民衆の不満が強くなれば、王制に影
響がでてくるであろうし、逆に民衆の動
きに指導層が迎合すれば、米国離れがで
て石油生産量にも影響がでてくるであろ
う。次のオイルショックを防ぐのは、米
国とサウジの中東全般にわたる協力関係
の再構築である。

新エネルギーと法制度

●政策科学研究所

長期エネルギー需給見通しが、総合エネルギー調査会需給部会より去る四月二十一日に発表されたが、そのなかで新エネルギー関連は昭和五十五年実績より、昭和六十五年で二倍の伸びを見込んでいる。新エネルギー関連は様々な技術、資源を利用するが、一部実用化されているものの、長期的技術開発を必要とする。しかし、技術開発が実用化段階に入って、社会的制約、普及手段等を論じるのでは、社会システム自体が複雑、多岐に渡っているため、問題解決に多く時間を要することになる。したがって、事前に新エネルギーの利用技術を想定し、社会が受容するための要件を分析しておくことが必要である。社会的受容のなかで、法制度面に着目し、新エネルギーを普及させるという観点から、阻害要因、促進要因について検討してみたい。ここでは、実用化され、価格がある水準以下になれば爆発的に市場性を獲得する可能性があり、社会への影響波及が高い太陽光発電について、阻害及び促進の各要因に分類し、普及に当たっての問題点、対象法令等について述べることにしよう。

●阻害要因●

太陽光発電の実用形態により予想が困難な部分もあるが、関連する重要な規制法上の問題点をまとめると表1のようになる。

このなかで、特に重要な項目である電気事業法と電源開発促進法について示す。

(1) 太陽光発電と電気事業法

現行の電気事業法は、一般電気事業者として電力九社（ならびに沖繩電力）により、全国津々浦々に電力が供給されるという、大規模集中型電力供給体制を前提に運用されている。これに対し、太陽光発電においては、各戸、各事業所に太陽電池を設置し、発電を行い、電力系統と連係する場合には、余剰電力を電力会社に売電し、不足電力を電力会社から購入するというような小規模分散型発電

太陽光発電に準用するには実態からみて不相当と思われる、太陽電池パネルやシステムの標準化を図った段階で要求される規則にとどめるべきであろう。

であり、かつ発電・電力消費相互乗入型という予想されなかった事態が発生する可能性がある。具体的には系統連係での逆流、電圧変動、高周波、保安上の問題といった技術内問題があり、また、既存の電力系統が太陽光発電に対してバックアップ体制をとるといふ、電力系統が予備的位置を占めることを意味しかねない。太陽光発電を電力系統と連係する場合の法的问题点の第一は、当該発電設備が「自家用電気工作物」として、電気事業法の自家発に関する規制が適用されることである。自家発に該当するとの見解に立ってば、工事計画の認可・届出（法七〇、七一条）、使用前検査（法七四一条一項による四三、四四条準用）、使用開始届（法七三条）、立入検査（法一〇七条二項）、技術基準の適合（法七四一条一項による四八条以下準用）、保安規程の作成（法七四一条三項による五二条準用）、主任技術者の選任（法七二条、施行規則七七条）といった規則が適用される。この規則をそのまま太陽光発電に準用する場合には、

第二の問題点は、太陽光発電ならびに制御の事業主体をどのように構成するかという点である。その第一の方式は、太陽光発電をも一体として「一般電気事業」の枠内にとらえ、電力九社が各戸、各事業所を借りて発電を行っているに過ぎないとするものである。第二の方式は、太陽光発電を受け持つ「卸電気事業者」を想定し、卸電気事業者がいったん電力会社に売電し、それを各戸が消費するとするものである。第三の方式は、太陽光発電はあくまでも「自家発電」で、一般電気事業者との電力系統の有無を問わないとするものである。この方式は各戸が自家発を行う方式と、地域が自家発を行う方式とに分けられる。これら三方式は現行の電気事業法の枠組を前提とした分類ではないので、法の枠を外せば全く別の方式が考えられるかもしれない。基本的には事業主体の在り方は、①地域分散型の発電方式において、従来の九電力体制における大規模集中型発電を太陽光発電の補完として位置付けるのか、②電力系統と連係するとき負荷調整・監視制御の責任分担をどのようにするのか、といった問題点が生じる。

○…該当

◎…特に重要な項目

表1 問題点および関連法令

	問題点および関係法令	供給	設置時	利用時	取替廃棄
1	規格化の促進	工業標準化法	○	○	○
2	既存設備等との接続	電気事業法	○	○	
		建築基準法	○	○	
3	周囲環境保全上の問題	(日照権)	○	○	
		騒音規制法	○	○	○
		自然環境保全法	○	○	
		急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律	○	○	
4	施工者の資格	電気工事士	○	○	
5	システムおよび機器に内在する問題	電気事業法	◎	◎	○
		電源開発促進法	◎		
		消防法	○	○	○
6	廃棄物問題	廃棄物処理法	○	○	○
7	製造物責任および消費者保護		○	○	○

表2 普及促進策

促進策		供給時	設置時	利用時	取替時
1	政府調達(買上げ)				
2	公的施設・高層建物等への設置義務づけ				
3	公的施設への設置補助				
4	個人住宅等への設置補助・利子補給 低利融資・債務保証				
5	税制上の措置 所得税額控除 固定資産税減免 特別償却 物品税減免				
6	性能評価試験装置設置				
7	価格差補償				

も電気事業者が予備電力的な位置付となり、しかも事故時に備えて常に一定の発送・配施設を維持しなければならない状況に置かれることである。これは一般電気事業の「電気料金体系」、「供給責任」の見直しはもちろん、国民経済的な諸影響を含めた総合的な判断が必要となることを指摘しておかなければならない。

(2) 太陽光発電と電源開発促進法

電源開発促進法における電源開発基本計画の対象に、新エネルギーは含まれていない(法二条)。これは太陽光発電が個別の出力で小規模なものであっても、日本あるいは一定の地域の総出力が大きくなれば、太陽光発電の発電量を無視した電源開発基本計画は、無意味なものになりかねない。したがって、将来の問題としては、同法二条の改正が必要になる可能性も否定できない。

●促進要因●

太陽光発電の普及に関して、最も問題となるのは太陽電池およびシステムの高価格にあり、現在世界各国で低コスト(五十〜百円/WP)の太陽電池を目指して研究開発が進められている。普及促進においてこの価格問題が最もネックと考えられ、促進策としても価格への対処策が主なものとなり、これをまとめると表2のようになる。簡単に説明を加えると、上記のようにインシヤルコストが高く普及が困難なので、政府調達や設置の義務付け等の施策により需要を底上げするこ

とが望まれる。これは地域または建物の規模を限って設置を義務付ける方式(建築基準法とリンクさせる手法等)や、エネルギーの使用の合理化に関する法律(省エネルギー法)一四条の「建築主の判断の基準となるべき事項」の告示と太陽エネルギー利用促進をワンセットにする手法等により、行政指導によって普及を図る方式が考えられる。また、公的施設への設置のためには(自治体への国庫負担金・補助金算定時を含めて)、建設費の積算の基盤に太陽電池が加えられることが必要である。そのため閣議了解事項にするとか「X%太陽エネルギー支出」といったスローガンによるキャンペーンも望まれる。この外、普及の当初においては独立電源ないし特殊電源として、過疎・離島・灯台・無線・信号等を積極的に用いることが必要であろう。

●おわりに●

以上太陽光発電を普及させるという観点から法制度における阻害及び促進に係る要因を検討してみたが、いまだ技術的に様々な問題を含みつつ研究開発が進められている分野であるため、法制度的に限定しにくい。しかし、ここで論じた問題は何時の日か必ず論じられるものであり、今後様々な観点より充分なる討議が行われることを期待するものである。

(義村利秋)

●日本の潜在力を高く買えば中成長も可能？

中成長＝四パーセントの「中成長」で二十一世紀に臨む。経済審議会長期展望委員会の最終報告「二〇〇〇年の日本」がこの発表、これをたたき台に新経五カ年計画作りがスタートし、今後二十年間の経済運営の目標は四パーセントの線で調整が進められそう。現行の七カ年計画では、当初五・七パーセントを目標としたが、その後の経済情勢の変化で五・一に下げた。五十一―五十四年度は五パーセントを確保したものの、五十五年度の実績成長率は二・七、五十六年度は一・七という厳しい数字にとどまった。これからみると、中成長の達成は、容易なことではなさそう。高齢化社会への対応、国際化の進展、経済社会の成熟という流れから目をそらす、なお

●まだまだムダな働きが多い日本の労働生産性

労働生産性＝働かすきると「悪名」の高い日本人も、国際比較をしてみれば、まだまだ非能率的、という結果がでた。日本生産性本部が発表した「労働生産性の国際比較調査」によると、伸び率では欧米先進国を抜いているものの、絶対水準はかなり低い。まず世界最高はアメリカで日本の一・五七倍、次いでベルギー・四三、フランス・四一、西ドイツ・三七、それというのも、農業の生産性でアメリカが四・二倍と群を抜いているため、西ドイツでも日本の一・六三倍、フランス・二二、イギリス・四九、ベルギー・五三と大きな差がついている。ただ製造業に限れば、アメリカは一・〇七倍、ベルギー・〇四で、日本はほぼ同水準に並んで

●『四全総』……目玉は地域の産業おこし？

四全総＝六十一年度を初年度とする第四次の全国総合開発計画の作成が本決まりになった。本格的な高齢化社会を迎える二十一世紀への橋渡しとしての十五年計画になる。三全総を洗い直した結果、人口・産業構造などで想定と現実と大きなズレのあることがわかり、新計画への移行が必要と認められたからだ。ただ、三全総が打ち出した定住構想はそのまま受け継ぐことになりそう。五十二年度から十年間を期間とする三全総は、昭和六十年の人口を一億二千万、実質成長率平均六パーセントを前提としてスタートした。大規模な開発計画はとらない、自然・生活・生産の調和のとれた定住圏を全国で百―二百展開する、大都市への人口・産業の集中を抑えて北海道、東北・九州などの振興を図る、などが基本計画だった。しかし、現実との狂いが大きくなったため、専門委で見直しの作業が進められていた。これによると、出生率の低下は予想以上で、高齢化の足取りは意外に早いことがわかった。生産環境の面では、大都市と地方都市間の格差の傾向はあまり、公害・水不足・防災など大都市構造のひずみは心配されていたほどには拡大しなかったことが確かめられた。ただ、東京圏への中核管理機能の集中が一段と加速しているのに比例し、大阪圏、名古屋圏の比重低下がはなはだしい事実が明らかになった。一方、地方産業へのテコ入れは足踏み状態で、地域の主体性を生かした産業おこし」が四全総の課題にあげられそう。

●頭脳流入？ 工業技術院が外人学者受け入れ

頭脳流入＝昔前まで、豊かで開かれた研究体制に魅せられ、すぐれた研究者が欧米先進国へ数多く流出していた。このままでは、日本の将来はどうなる、と憂える識者の声も、もともとは置えたものだ。しかし、いまや逆に頭脳流入の時代を迎えようとしている、日本の科学技術が一流の水準に達し、貿易摩擦も続出するとあつては、当然の成り行きかも知れない。最先端技術についての国際協力構想は花ざかりで、原子力・宇宙・エネルギー、電子計算機・半導体・遺伝子工学の分野での研究者の交流計画が動きだしている。すでに実現しているのが流動研究システムで、米国人三人、ポランド人一人が参加している。通産省工業技術院は、宋年度から外国人研究者を受け入れる方針を固めた。とのあえず、アメリカ、フランスなどの大学・研究所から電子工学・生物工学・新素材分野の専門家十人程度を受け入れ、全国九カ所の研究所、七カ所の試験所で働いてもらう。国家公務員法にふれる問題が残るが、法改正や特別立法などの措置を研究し、正職員として採用する方向をさくづけている。先端技術への門戸開放という要請にこたえ、同時に、日本の立ち遅れている分野での水準の向上、また閉ざされた研究体制への刺激という意味で、二二二鳥にも三鳥にも効果期待される。ただ、この政策転換、亡命者や難民には冷たく、一般の労働者の入国は締め出すという厳しい入国管理体制と、どう折り合いをつけるかが問題だ。

● 21世紀には一兆円規模？ 新宇宙産業構想

宇宙産業ビジョン——二十一世紀には、宇宙産業を一兆円規模の大型産業に育てる構想を、通産省が打ち出している。ロケットや人工衛星の打ち上げ、人工衛星を利用した通信・放送・観測・宇宙工場などの研究・開発・生産体制を確立しようというもの。現在、日本の宇宙関連企業は約七十社。いずれも副業として取り組んでおり、年間一千億円の規模。航空機工業の三七パーセントにすぎず、大部分が官需にとどまっている。宇宙技術は、将来の生活・工業にとって大きな位置を占める。これは確実で、同時にその先端技術の波及効果も大きいと期待されている。一方、軍事目的の優先などで、海外からの技術導入が次第にむずかしくなる傾向は避けられず、自前の技

● 新宇宙産業構想

術確立への要請が強まっている。宇宙開発委員会も、さる五十二年度に策定された宇宙開発大綱の見直しを検討している。目下開発中のハイロケットの開発時期を繰り上げ、能力の向上を図る。また、自主技術の確立をめざすとともに、外国との提携を加えた弾力的な運用も考慮に入れる方針だ。さらに、電電公社は、一四トンの大型実用通信衛星を、米のスペースシャトルで打ち上げる構想を持ち出し、国産ロケット開発に水をさす動きにでた。大綱の見直しは、これへの対応として国産技術の向上、外国技術との共存の方向をめざしたものだ。通産省は国産の資源探査衛星を六十二年度末まで打ち上げる計画も示しており、宇宙産業は新しい展開を迎える。

● 必要性はやはり高い？

第二東海道新幹線——東京・大阪・名古屋圏の人口を合計すると、全国の四五パーセントを越す。従ってこの二都とこれを結び東海道は、他の地域と比べて格別の重みを持っている。このため、東海道新幹線が完成してすぐにも、やがて第三新幹線が必要になる、といわれていた。中部山岳地方を貫き、東京—大阪を直線的に結ぶのが、その未来図だった。最近では、高木国鉄総裁が、「中央新幹線は「ニアモーターカー」との発言をしている。運輸経済研究センターがまとめた「二十一世紀へ向けての交通施設整備の展望」でも、第三新幹線の必要性を強調している。現新幹線の交通量は、西暦二〇〇〇年には小田原—熱海で一日平均二十七万八千人と、現在の二倍

● 第二東海道新幹線

近くになり、限界輸送力の二千万九千人を越すという理由からだ。「展望」は、二十一世紀へ向けて、日本の社会は人口・産業の地方分散・都市化が進むとの前提にたち、七十五年度の交通需要を予測している。五十九年度に比べ、旅客は航空で三・五—三・八倍、自動車は一・四—一・五倍伸び、鉄道は一・一倍、貨物でも、鉄道はほぼ横ばい、とみている。そして、高齢化の進む社会では新しい資本蓄積がむずかしく考え、今後二—三十年に交通を含めた社会資本の充実を望んでいる。新幹線網の拡充、高速低公害の「ニアモーターカー」の実現などを含め、四十万都市百七十を日帰り行動圏とする交通網の整備がその目標だ。

● 超電動磁石——わが国で次々と成果発表！

超電動磁石——零下二五〇度を下回る超低温下では金属などの電気抵抗がゼロになる。この現象を応用すると、少ない電力でも大きな磁石がつくれる。この超電動磁石は、「ニアモーターカー」・超電動発電機・エネルギー貯蔵・大型加速器・核融合装置など、最先端の技術に活用できるものだけに、研究開発が急がれており、日本でも次々と注目すべき成果が発表されている。五月に神戸で開かれた国際会議では、三菱電機と富士電機が共同開発した三万キロワットの超電動発電機が公表された。超電動磁石を回転子に使うこの発電機は、大きさが従来の発電機に比べ三分の一から二分の一にまとまっている。この方式で百

● 森林破壊に緑の地球防衛基金

緑の地球防衛基金——「森林破壊は核戦争に次ぐ人類の不安材料だ」との考えから、超党派の国会議員で組織する自然保護議員連盟を中心に、地球上の緑を守るための基金が設立された。緑の危機の告げる報告はわれわれの恐怖をかきたてるのに十分だ。アジアの森林は毎年五百ヘクタールずつ減っている。これは日本の中国・四国地方を合わせた広さで、日本の森林面積の五分の一に当たる。アジアの途上国ではエネルギー消費の三五パーセントを新によっている。減少する森林の七〇パーセントは東南アジアの熱帯雨林である。木材需要の七〇パーセントを輸入に頼っている日本はその最大の加害者である。焼畑や乱開発で、毎分十八ヘクタールの割合で森林が失な

われており、この調子でいくと、二〇〇〇年には砂漠が二〇パーセントも拡大する。サハラ周辺諸国では、三千万の砂漠被災者が飢餓線上にある。十九世紀初頭、地球は三十五億ヘクタールの熱帯樹林に覆われていたが、いまは二十五億ヘクタールに減っている。また、緑の地球防衛基金は、地球上の緑を保護し、また森林に依存して生息する諸動物が完全に繁栄することを目的とする財団法人で、法人一般からとりあえず十億円を募金する。この資金をもとに、熱帯林の資源管理の研究と技術開発、砂漠の緑化に関する研究、環境保護についての国際シンポジウム、国連大学での関連講座を開くための運営費の寄付などの活動をすすめることになる。

●自然・文化財を守る市民運動に援助制度が

ナショナル・トラスト美しい自然や貴重な田舎などの文化財を市民が共同で買いつけて開発の荒波から守ろうというナショナル・トラストが、日本でも発足をめざしている。環境保全国民信託法ともいうべきこの制度は、イギリスで一九〇七年に制定され、法人がスタートした。現在、九十万人の会員が持ち寄った資金で、歴史建造物、古・庭園古・史跡、古城、遺跡、森林、四百マイルの海岸線を買い取り保存している。政府は一切、財政援助しないが、トラストに資産を譲渡した人には税制面で優遇措置をとっている。日本では昭和二十九年、鎌倉市民が鶴ヶ岡八幡宮裏山の宅造計画を、山林の買い取りによって防いだのがこの運動のはりだった。最近で

●乳幼児の奇病にやっとわが国でも本格対策

川崎病に急に高熱を出し、目・舌・口びるは赤くはれ、体中に発疹が現われる。セロ歳から五歳未満の乳幼児を襲つこの川崎病は、熱の下つた後も心臓障害の後遺症を残し、百人に一人の割合で突然死を招くという恐い病気である。昭和二十七年に日赤医療センターの川崎富作・小児科部長が初めて学会に報告し、この名がつけられた。当初は、全国で百人にも満たない珍しい病気だったが、年々増え続け、今年は一万人を越すのではないかといい大流行となった。しかし、密連鎖説・ウイルス説・タニ説などが平行線をたどり、原因については決め手がない。そこで日本心臓財団が、川崎病原因究明委員会を発足させて研究費集めのための国民カンパを呼びかけ、

は、北海道釧路市で、知床国立公園内の土地百十ヘクタールを買い取り、開発の手から守る運動が大きな反響を呼んで募金目標額を突破、計画を拡大している例がある。このほか、和歌山県田辺市の天神崎で海岸地を守る運動がはじまっており、北海道苫小牧のウナイ湖でパートナーシップクラブを確保する動きもある。岡山県では郷土文化財団が一万人の会員を集め、本格的活動に入ろうとしている。環境庁長官の私的諮問機関としての研究会がいよいよ発足し、ここで日本の実情に合った制度づくりをめざす。税制を含めた財政面や維持管理の方法をさぐることになるが、あくまで幅広い住民の力をどう生かせるかに、事の成否がカかっているといえそうだ。

これまで小児科の臨床医に限られていた研究陣に、疫学・病理学・ウイルス学などを加え、幅広い分野で取り組むことを決めた。これに対応する形で厚生省も重い腰をあげ、年間四百万円だった研究助成金を一千万円に増額した。今後、同省の川崎病突然死予防研究班と財団の委員会が密接に連絡をとりながら、究明にあたる。カワサキ・ディジーズは欧米・東南アジアでも発症が相次ぎ、アメリカは一億円の国費をつぎ込んでいてという。医学の発達した現代でも難病・奇病は残っている。いや、発生する、発見されるといつていいかも知れない。かつて恐怖のマトだった小児マヒが抑え込まれたように、謎の川崎病も早くケリをつけて欲しいものだ。

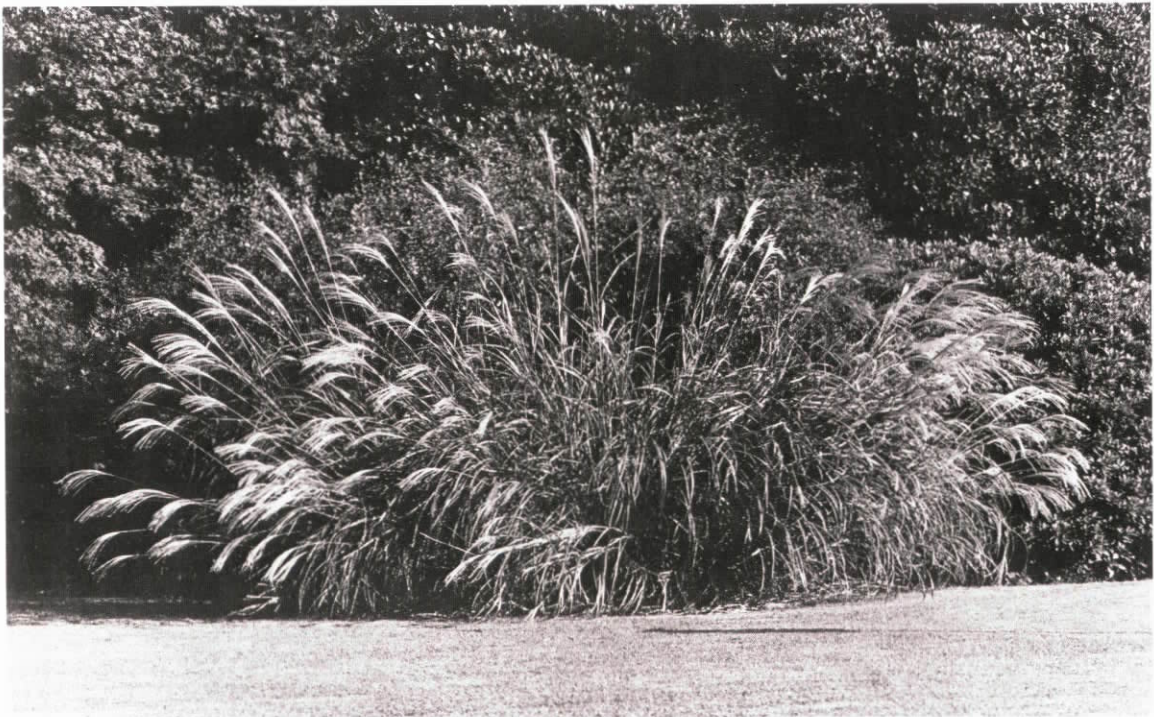
●“住みよい東京”を目指す青写真は出来たが

マイタウン東京三世代住宅・ベア住宅が完備し、下水道は二〇〇パーセントの普及、運動場やピクニック林・ふるさと村の整備、道路は整つて車はスイスイ走り、河川には清流がサラサラ。二十一世紀の東京はこう変つている一その青写真が、鈴木都知事に吞みされた。このマイタウン東京計画の基礎になるのは、次のような数字だ。二十年後の東京の人口は千九百九十七万人で、現在の水準とあまりかわらないが、六十五歳以上の高齢者は一倍近い百五十一万人に達する。都民一人当たりの所得は年平均八パーセントの動で伸び、又目で八百五十万円(三・三倍)になる。さて、政治の中枢であるとともに経済・文化の中心としての機能もあわせついまの東京は

●レオワード着なくては運動出来ないの？

エアロビクスレオワード姿の女性が速いテンポのリズムに乗って踊る。エアロビクス・ダンスが、深夜テレビに登場、男どもに思われ、おなじみを与えている。エアロビクスは「有酸素」という意味。適度の運動によって酸素を豊富に取り入れ、心臓や肺の機能を高め、脂肪分を燃焼させ、健康を保ち体力を増強するといつもの。一、三十年前にアメリカで生まれた理論だが、最近になりその効用が見直されて大流行、早速日本にも入つて来て、娘さんから主婦層にいたるまで、人気は高まる一方だ。省エネ・省資源の時代、身体もまた、といつことで、運動不足症は先進国共通の悩み。日本でこそ病気扱いされていないが、欧米では肥満や心臓疾患の増加と運動不足との関係が、疫学的に明らかになっている。二十世紀のロボット時代になると、この傾向はなおさらになる。個人の持つ最大エネルギーの七五・八〇パーセントを消費するのがエアロビックス、五〇パーセント以下がエアロビックス。この中間の五〇・七〇パーセントで体を動かすのがエアロビクス。勝ち負けを争つスポーツでは、競争心をおおって、瞬間的にも能力以上の力をだし、酸素を取り込む働きは弱い。それに相手もいるし、お天気でなければ、それに対しエアロビクスは一人でもできて、声をだせる限界を自覚にシエ一プアップ向き。二二・二一・四十分、週に二一四回。三月間で効果がある、そのこと。

特集 | 座右の「もの」



バットは牛骨で磨く

佐々木 次から次へとものを消費して発展して来たのが、最近の日本の姿ですね。こうした消費文明、使い捨て時代では、ものになじむというのは非常に難しい。宮本さんは何年生まれか知りませんが、私はちょうど戦中の、食物も本当に無い時代に育ちましたので、やはり、親からものを大事にするという習慣をつけられているんですが……。

宮本 私も十二年の暮れですから多少は判ります。

佐々木 ほぼ同世代と考えられますね。なら安心しました……。だから、今の自分の子供たちに、ものを大事にしろと教え込むのがすごく難しいテーマだね。大事にしないかってゴロゴロあるんですから。ま、ラジカセなんかには見事になじんでいます。一般的にはなじみにくくなっている。

宮本 子供たちには教えられないですね。でも、そう心配することも無いのかも知れませんよ。これは災害だから特別なんでしょうが、先日の長崎集中豪雨の報道番組で、どこかの奥さんが語ってましたが、子供たちはもの大切さ、食べ物大切さをピッと判ってくれたというんですね……。余裕の感覚というの

かな。本当はもの大切さを知っているんだが、とりあえずものあるうちはいいんじゃないのという気持ちがあるんじゃないですかね。

——僕らの子供のころは本当に無くて、遊び道具も手作りが多かったですね。山口の家の裏がすぐ海という環境に育ったので、よく泳ぎましたが、小学校上級になるとキンツリと称する今のパリモードか何かのトップファッシュン水着みたいな(笑い)、ふんどし型のやつ。ミンシは無いから自分で手で縫ったものを皆着用していた。

佐々木 三角で後ろはひもだけというやつだな(笑い)。

宮本 そうです(笑い)。小学校三年のころ

野球が流行ってききましたが、まずやったのはボールを縫うこと。グラブは難しいけど、ミットはポロ切れ集めて作りました。

佐々木 なるほどね。先日、作詞家の阿久悠さんと対談したんですが、あの人は淡路島で、やはり布のグローブをお母さんに作らせたそうです。しかし懐しいですね。あの頃はものを大事にし可愛がったですよ。バット、グローブなんていうのはもう宝物だね。私の場合作るまではいかなかったけど、高校時代は糸の切れたボールをよく繕いました。それも漢文とか国文法とかのつまらない授業中にやる(笑い)。放課後はすぐ練習ですから時間がない(笑い)。バットなんかは白木のを買った

て来てビール瓶でこすり、爪も立たないように木目を締めるんです。もつと昔の人は油のついた牛骨を買ってきてこすった。するともう何とも言えない艶を帯びてギュッと締まってくる。それを枕元に置いて寝るんです。それくらい大事にしたものですね。

馴まぬ靴底で大滑落

宮本 私は球技のたぐいはバチンコも含めて一切駄目(笑い)。一律に言っちゃうと語弊があるんですが、大体山好きというやつは、ほかに取柄がなくて歩くのだけは人並みという人が多いですよ(笑い)。——都立大で山岳部に入ったんですが、当時は登山靴もなかなかままならない。僕もアメ横で米軍放出の古い軍靴を買って底のゴムをナイフで削って型をつけて半年ほどはいてましたよ。でもやっぱり山に登るには登山靴が一番肝心みたいですので作ってもらいました。

佐々木 登山靴というのは重いほうがいいんですよ。

宮本 いや、結局は慣れだと思えます。それとどんな所をどんな風に登るかで違ってきますね。たとえば山歩きの猟師。彼らは山を歩く達人ですが絶対重いものははかない。ゴム長の短いとか地下足袋です。でも僕らがそ

特集 対談

もの 馴む



●宮本千晴●

佐々木信也

国際交流研究部会 || スポーツ・キャスター

宮本千晴

加藤秀俊部会 || 近畿日本ツーリスト(株) 日本観光文化研究所所員

れをはいて山歩いても駄目ですね。都会人は足の裏が鍛えられてないから、ちよつと荷が重かったり、石ころ道だったりすると足の裏が参ってしまう。重い靴というのは、いわば無器用な人の保護装置なんですね。

佐々木 そうですか。私は登山のこと知らないんですが、昔ゴルフを始めたとき、友人から、巧くなりましたかと思ったら重い靴をはけ、これは登山と同じなんだと言われましたね。そんなものかと、それ以来登山には重い靴がいものだと思いついていました。

宮本 重い靴で始めたら重い靴の身のこな

しがつくわけです。歩き方から歩幅、足場の選び方まで、全部靴に合わせて体の動作が決まってくるんです。

佐々木 安定感というのは重い靴のほうがあるんじゃないですか。

宮本 それはあります。重戦車みたいなもので多少の凹凸は押さえ込んでしまえる。それと、重い靴をまく、いちばん基本的な理由は雪ですね。雪深などの堅い雪面では、その重さと底の固さを利用して、靴を蹴込んで登るわけです。寒さから身を守るということも、冬山や高い山では大事ですし……。

佐々木 なるほど。登る山とその時のコンディションによって最適の靴があるわけですね。しかし、スポーツと靴というのは非常に密接な関係がありますね。滑れるうちに入らないんですが、スキーは何回かやったことがあるんです。それが最初に買った靴がきつくて痛くて……。あの靴をはいてゲレンデに出るのかと思っただけで滑るのがイヤになってしまう。テニスも一回だけやらされたことがある。靴も借り物で、親指がチョット痛いなと思いつながら夢中でやっていた、あとで両親の爪が死んでしまった。登山など、靴が足に合っていないと、これはもう悲劇ですね。

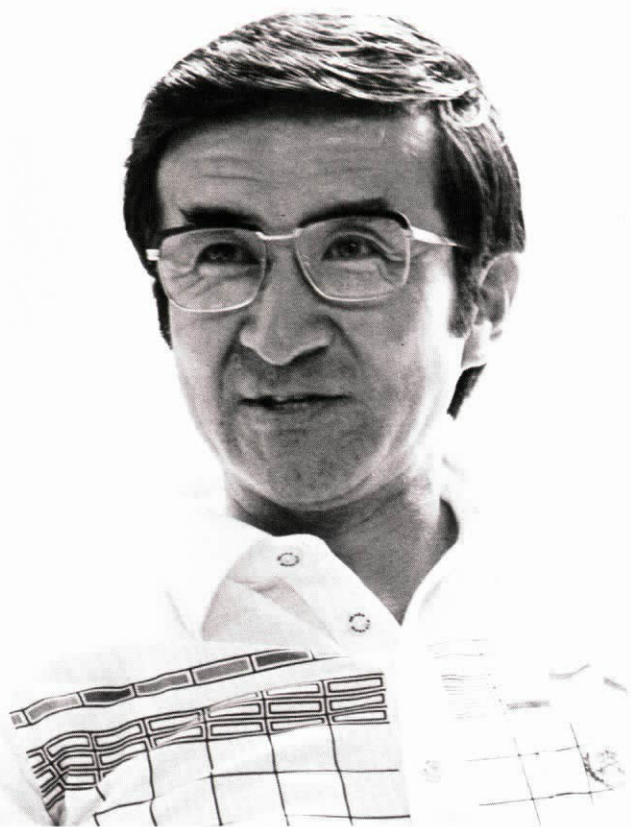
宮本 登山靴の場合、ほとんどビブラムというイタリア製のゴム底が使われているんですが、この底に慣れていると足場の摩擦の具合を全部それで覚えているんです。数年前ニューギニアの山中に遊びに行っただけですが、軽いのがいいと思って間に合わせにハイキングシューズを買っていった。これの底がちよつと系統の違うゴムでして摩擦が全然違う。十メートルほどの滑滝を見事にすべり落ちましたよ(笑)。ところで佐々木さん。最近の道具の傾向というのは、買った時が一番の高性能で、あとは時間とともに駄目になっていくというイメージが使われているような気がするんです。野球道具の場合などどうなんですか。

佐々木 確かにそれはあります。

道具の能力を引き出す

宮本 ま、現在でも、いわばならし運転の部分はあるんでしょうが、いわゆるものを大事にしている使い方の場合は、一生懸命手入れして次第に性能が上がって行って、高性能の期間がかなり続く。そしてだんだん駄目になっていく。駄目になった時はトコトン使えなくなってるんですね。

佐々木 そうですね。グローブの場合など、



たもの。靴下も同じ素材を使って作るんですが、こちらは毛をそいで短かめにしている。

それで毛皮の敷皮と靴下だけを乾かす方式なんです。これが一番よかったです。つまり戸外は零下三十度から四十度、足はいくら冷えても三十度ぐらいの体温を維持している。その中間にある靴のどこかに零度の点があり、そこに水気があれば霜になっちゃうわけですね。その結氷点をどこに持っていかかが高度のノウハウでして、それを靴の構造体の中に持たせていっちゃうとアウト。うまく調節できたらその外側は凍らせたままにしておく。毛皮のパーカーを皮側を合わせて三重に着ますが、あれも結氷点をその間におくんですね。そして室内には持ち込まない。凍らせたままなら湿けない。ところが羽毛服ですと羽毛の中に結氷点があるから、短期間ならいいが、長期だと中に霜がどんどんたまっていくんです。やはり本当に厳しい条件の所で生まれてくる道具というのは当てになりますね。もちろん、その性能を知って使えばのことですが。

何のために馴むのか

佐々木 僕もバットなどは、高校時代から工場へ行って目の前で作ってもらいましたよ。江戸川橋でしたか、玉沢という運動具屋さん

があるんです。そこへ行って「おじさん今日は三本お願いします」と、適当なバットの原材を持ってきて機械ではさんでガレットとノミで削ってくれる。私のバットのモデルがありましてね。同じ型、同じ目方になるように削っていくんです。出来上がったのを「佐々木さん、どうですか」「ちよつと先が重すぎる」なんてことで、また違う新しい原材を削る。本当に気に入ったバットを三本作るのに、七、八本の原材を駄目になっているわけです。そうして手に入れたものを先ほど述べたようにビール瓶で、一生懸命こすりたりしてなじませるわけです。今の選手はどうかと言うとね。そういうことをやる人は全くないんです。昔は僕だけじゃなく、大勢いたんです。今は運動具屋さん、このモデルで重さはどうでも十本なら十本注文すると、すぐいいのが来るそうです。電話一本で……。運動具屋さん毎日グラウンドに顔を出しますし、非常に簡単なわけですね。だからなじめないんです。どうなのかなあ、これは。それからもう一つ、バット代を球団で負担してくれる所もあるし、また運動具メーカーが有名選手と契約して、無料でどんなバットを提供することもある。これでは何本折ってもすぐに補充がきくからバットを大事にしない。なじまないということになるん

メーカーによっては新品がすぐ試合に使えるようなベストの状態のものがありますが、これは駄目です。少したつと駄目になっちゃう。やはり最初はちよつと硬くてとても使えないのを練習で慣らし込んで一ヶ月ぐらいでベストコンディションになるのがいい。最初から柔らかいのは一晩水に漬けてから乾かして、ほどほどの硬さにして使うやり方もあるんです。

宮本 やっぱり本当に体の延長として使う道具の類は、なじんでないとどうにもなりません。また靴の話になりますが、昔、

カナダの北極圏に遊びに行きましたね。その時作って持っていた靴は完全防水で中には羊の毛皮が入っている、言うことない立派なものだったんですが、これが肝心の冬になったら全く役に立たない。湿気が全部中にもつて、濡れると靴の中に氷がはる。でもテント暮しでは乾かしようがない。で、その立派な靴をあきらめて、エスキモーのおばさんに毛皮の靴を作ってもらって使いました。底はムースのなめし皮——本当はアザラシのなめしていない皮が最高だそうです。甲からはカリブーのすねの毛皮を四枚はぎ合わせ

ですね。

宮本 なじまなくても出来るんですね。

佐々木 出来るんですよ。だから具合悪いですね。

宮本 じゃ、何のためになじまなきゃならないのか(笑)。

佐々木 ただね、武士にとって大事にしている刀というのは命の次みたいな感じでしょう。刀の手入れをどうやるのかは知りませんが、私は、野球選手にとってバットというのはそれに近い存在だと思うんですよ。そのように心がつながってなかったら、本当のヒットは生まれません。いやないかという気がするんです。これが駄目なら、すぐ次のバットじゃね。本当のプロの技は生まれてこないんじゃないかと思う。簡単にいえば、貧しいほうがものを大切にします。これは当たり前です。だから豊かになりすぎたということをしみじみ感じますね。だからプロ野球のコーチ、監督連中がなげいてますよ。今の戦争を知らない若者たちに、ものを大事にしろとか、人の

気持を大事にしろとか、そうした基本的なことを教えるのはとても難しいと……。とくに『もの』になじむ」という今回のテーマのよなことはね。最近手作りブームとかいわれますが、あれになじんでいるのは中年以上じゃないですか。なにしろ子供がナイフを持って

ば、母親が危ないからおよしなさいという教育がほとんどでしょう。私たちの子供のころは竹トンボとか模型飛行機なんか自分で竹を削って作りましたがね。あのものへのなじみ方と今の子供のなじみ方は違う。質が違う気がします。

宮本 それに、無理に状況をつくってやるのはあまり意味がないようですね。

佐々木 考えようでは、もうなるようにしかならないと思う。

物を使いこなす文化

宮本 僕もそう思う。なるようにしかならない状態をまだかなりの期間続けたい、いい方法は見つかりそうもない。しかし、一度ものになじむことから離れると、ものを使いこなす文化というか、勘のようなものが失われてしまうんですね。先ほどのカナダへは若い学生が四人同行したんですが、一番まどろっこしかったのはその点です。どの道具がどういう点でどう優れているのか、使い方のポイントはどこに有るのかといった、道具の性能の見分け方、引き出し方が非常に鈍い。彼らも山登りするし、そうした勘は当然あってしかるべきなんです。その代わり、新しいものについての感覚は一方で持っている。

たとえはマイコンのたぐいでも、どんどんなじんでいくでしょう。

佐々木 今の子供たちがメカニックに強いのは、もう驚異的。とても親には判らないことをスイスイやってのける。学校の成績とか漢字はまるで駄目な子供がそれをやる。だから世の中、十年後、二十年後の変化というのは恐ろしいですね。ものに対してどうしたなじみ方をあの子供たちがこれからしていくか、ちょっと予測がつかない。ただ恵まれていれば、ものを大事にしない風潮はどんどん出てきますから、恐ろしいなと思っっているんです。

宮本 今はものをたくさん持たないと暮らせない時代なんですよ。ポイと与えられたものは、どうしても自分の期待値とのズレが大きいか次から次へと求めていくことになり。おまけに、次から次にもっといいものがあるよ、もっといいものがあるよ、と言われ続けているんです。それともう一つ、ものが作られていく過程を身近に見る機会がほとんどなくなっているでしょう。今は、ものは最初からあるんじゃないかと、作るものだってことさえ忘れちゃう。そこからは、とても昔のアイヌのように、使い終えた道具を神の

国へ送り返すというような感覚は生まれようがない。

物と人との信頼関係

佐々木 僕はね、ものと人間というのは一種の信頼関係だと思っんですよ。一例として私は飛行機が好きなんです。中でもボーイングの747が大好きなんです。あれに乗って外国へ行く時の気分なんかもう何ともいえない。国内旅行でも、時間よりも機種を調べたりしてDC8には乗らないようにスケジュールを作ったりする。あの747に対する愛着みたいなものが、もう何年も前からあるんです。もう見ただけでうれしくなっちゃう。ちょっと変わったなじみ方だと思うんですけど。

宮本 喫茶店なんかでも、気に入って落着ける店とそうでないのがありますね。僕なんか折角機があっても、机の上はゴミ溜めになってしまい、そこではどうしても字が書けないとかね(笑)。

佐々木 野球選手でいえば、好きな球場、嫌いな球場というのがあつて。私が現役時代は大阪球場が大好きでね、そこへ行くともう間違いない。何で好きかというと、まず第一に場内アナウンス嬢が二人いて、い

ずれも美声でしかもチャミング。「一番、セカンド佐々木」とアナウンスされてバッテリーボックスに入ると、もう打てそうな気がする(笑い)。それが福岡の平和台球場へ行くよね。こんなこというと怒られちゃうんだが、あの頃のアナウンスは「嬢」じゃないんだ、もうおばさんなんですよ(笑い)。声がしゃがれていて、打てないんです。もう、もつとも、当時の西鉄には好投手がたくさんいたこともありますけど(笑い)。喫茶店じゃないけど、ちよつとしたことから球場の好き嫌いが出てくる。あそこの球場の上がいいとかね。最近では人工芝だから様子はだいぶ違うけど、やはり球場の好き嫌いがあります。

必要なものはなにか

宮本 そうですね。ものと言っても道具類だけとは限らず、結局、人間はいろいろなものに囲まれて、それになじんで生きているわけですね。仲間が民具の調査などしているんですが、日本の平均的農家で六千点ぐらいのものがあるそうです。大きな家になると一万五千点はある。ところがニューギニア高地の家の中のも、ものがないんです。強いて探してやっと十点(笑い)。それでもちゃんと生活していける。面白いのは、何処へ行っ

てもみんな何か特定の道具にこだわることですね。僕らの田舎では農夫は鎌を手放さなかった。ニューギニア高地の男はみんなオノを腰に下げる。女達は頭からかける手編みの袋……いわばハンドバックです。エスキモーはナイフ、ネパール人ならククリと言うナタのたぐいをしょつちゅう腰に差している。さっきのバットⅡ日本刀じゃないけれど、ある特定のものを自分の生活と絡み合わせて、一種のライフスタイルを作り上げる傾向というのは、どこにもあるような気がしますね。

佐々木 自分の生活を支えてくれる道具と、それから自分の生命そのものを守ってくれる道具もある。たとえば、野球のキャッチャーや内野手はサポーターにポケットがついていて、男性の急所を守る三角形の防具を入れる。今はファイバーですが、私の頃は金具でした。イレギュラーした打球が当たるとポコッと大きな音がしてね。後で見ると凹こんだ跡がついている。これしてなかったら、オレはどうなっていたらと思うと愛着が増すわけ(笑い)。やはり、自分の命を守ってくれる道具とか生活を本当に根底から支えてくれる、命の綱のようなものに対する愛着は必要なんですよ。

宮本 現代はその統一基準が無い。みんな生活のスタイルが違い、仕事の内容が違って

しまった。そして癖だけが残って、愛玩的に高級なハンティングナイフに凝ってみたりすることになる。ところが、毎日ナイフを使うエスキモーの持っているのは安物で、ライフでも自分で照門や照星はすぐ好きなように削り直しちゃうけれど、あとは鎌とまったく同じ扱い。それにしても、ものに限らず本や情報といったものも多過ぎますね。多過ぎて本当に必要なものの区別がつかないし、自分にもどれだけ必要なのか判らなくなっている。

私の「座右のもの」

佐々木 私ね、最近、急激に親しくなっとなじんでいるものがありましたね。

宮本 何ですか？

佐々木 眼鏡なんです(笑い)。いや、人間というものは面白い。眼鏡なんていうものは私の人生には全く関係ないものと思っただんですが……。三年ほど前、右の首筋がえらく凝りましてね。検眼したらやはり目なんです。眼鏡作って、活字読む時だけ使ったんですが、嘘みたいに凝りが治った。それから手放せない。今やまさに親友です。ところがね。私毎日テレビに出るでしょう。眼鏡を掛けてない顔が私のトレードマークになっている。最近では原稿も読みづらいので、そろそろ

眼鏡の顔に切り替える必要があるんですが、どのようにやろうかと迷っている。これなんですよ。掛けるとこういう顔です。どうしたら視聴者に好感もたれるかといういろいろ研究してるんですが、最近一番なじんでいるのがこれなんです。

宮本 さすがに厳選されて、よくお似合いですね。イメージがあまり変わりませんよ。

佐々木 そうですか。そう言われると大変うれいんです。安心する(笑い)。

宮本 僕は、普段の生活ではわりにもなじまないほうなんです……。結果的にはなじんでしまう。この背広なぞ十七年前に作ったものをまだ着ている(笑い)。

佐々木 体型が変わってないということですね。それは素晴らしい。

宮本 ええ、ほとんど変わりません。長い間運動しないと肉が落ちたりするけど、数ヶ月走ったりすれば、また元に戻る。その意味では、走ろうと心掛けてるので、ジョギングシューズになじんできるかな(笑い)。あれなんか「座右のもの」というよりか、まさに「座右の銘」ですね。そこに在ることによって走らなければと言いつけておられるようなもの(笑い)。

鎌倉彫りの手鏡

加藤芳郎部会=歌手・俳優

ロミ山田

人々には、それぞれその人にとって、とても大切なものがあります。それは、大変高価な宝石であったり、絵画であったり、または祖先伝来のものであったり。でも高価なものほど、大切ではあっても、日常、その人と一緒に生活しているものではありません。

価値から言えば、大したものでもなくとも、その人にとって、大変に大事なものの、必要なもの、それが座右の「もの」だと思います。

私にとっての座右の「もの」は、母が彫った鎌倉彫りの手鏡です。

母は、たいへん手先の器用な人で、昔から刺繍や、ペンテックス、アップリケなどを、しょっちゅうしていました。私が物心ついて以来、枕カバーには、可愛い犬の刺繍がしてあり、手さげにも、そろばん袋にも、アップリケがしてあって、それは楽しいものでした。大工仕事も、母は女のくせに結構うまくやっていたのけました。

ずいぶんいろいろなものを出し、趣味と実益を兼ねて楽しんでいました。

その中でも、鎌倉彫りはなかなかのもので、菓子皿や、お盆、サラダボールとサラダ入れなど、たくさん作りしました。菓子皿などは、

外人の方にさし上げてとても喜ばれましたし、サラダボールは、ずっとわが家で愛用しています。

その中の一つに、手鏡があります。これは、十年以上も前に、母が私のために彫り、お誕生日にくれたものです。

それは、直径十二センチほどで、長い柄がついており、ボタンの花が彫られています。古風と言えはすこぶる古風で、私の化粧台の上に並んでいる、モダンな形の化粧水のビンや、香水のビン、それに最近とみにしやれた形になって来た数々の化粧品の入れものなどと、ちよつとそぐわない感じが、なきにしもあらずです。それでも、鏡が大きくてはつきりうつり、柄が長いのでとても持ちやすく、とても便利なのです。外へ仕事で出る時や、旅行の時は、別のプラスチックの軽いものを持って行きます。

私のように、芸能界で働いていますと、鏡は、普通の人以上に必需品なのです。

人に見られるのは、これまたなかなか大変なこと、舞台とかテレビとか、いったん仕事となれば、仕事と割り切って平気なのですが、そうでない時、例えばデパートとか、電車の中とかで、気づいた人にジロジロ見られるのは、つらいものです。鏡をのぞいてちゃんとしなければなりません。

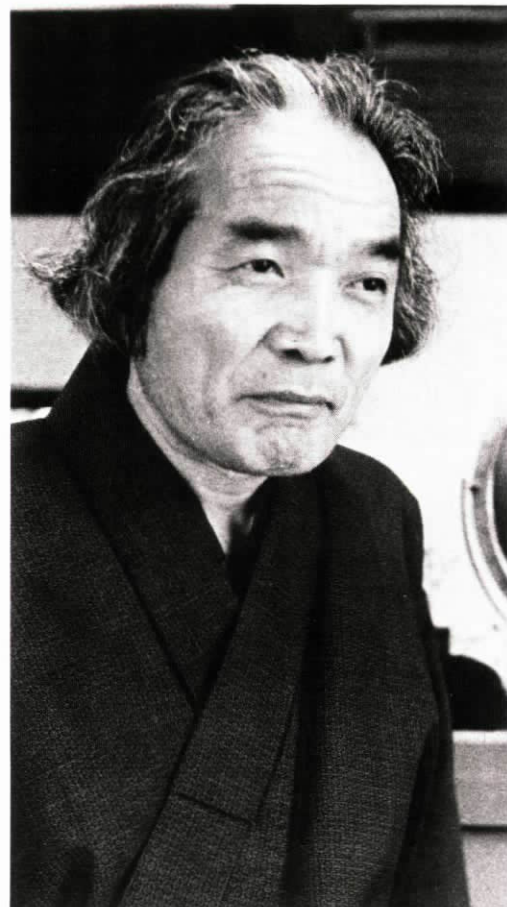
ついついお化粧が面倒で、近所だと、そのまま化粧もせず、髪もさつと一まとめにして、普段着で歩いてしまいます。そんな時、母がいつも、夢を売っている商売なのだから、普段の時もきちんとしていなければいけないと言います。面倒くさがり屋の私なので、母はこの鏡をくれたのかもわかりませんが、言っても、やはり商売から、日に何度となく鏡をのぞきます。

私が外出にこの鎌倉彫りの鏡を持って行かないのは、こわれては、と思う心があるからでしょう。十年以上も使って、よく落したりしてこわきなかつたと思います。見慣れてしまった手鏡ですが、時々なんとなく、しげしげと眺める時があります。そうすると、小刀で一生懸命木を彫っていた母の姿が目に見えます。

わりと物に執着しない私で、さつきと整理して捨ててしまうくせがありますが、この母のくれた鎌倉彫りの手鏡は、ずいぶん長く愛用しています。

これからも、私の生活の中で、私の座右のものとして、ずっと愛用していきたいと思えます。

掛硯と帳箱から



吉田光邦

京都大学人文科学研究所教授

わたしの家には三つの船簞笥がすわっている。尤もわたしはこの船簞笥という呼び方を好まない。これは昭和の新造語だからである。かつてはその形式や用途によって、掛硯、張箱、半櫃と呼ばれていた。今でもちゃんとした道具屋は、この名を用いて区別する。これらに関する詳細は、小泉和子氏の「船簞笥に関する研究」(海事史研究、三五)がよく説いている。

だがなぜこの新造語が、今日展示会のラベルなどにも堂々と記載され、誰もそれを怪しまぬようになってしまったのか。そこには名称と物の対応を、きわめてあいまいなままにしてゆく、ちかごろの思考の状況があるのではないか。

名称と物の対応を正確に調べてゆく、この学問を中国では名物学と称した。「名物」の語

は早く、中国の古典『周礼』にみえている。

『周礼』の成立は紀元前四一六世紀ごろとされる。そのなかに「其の名と物を弁ず」の語がある。唐の賈公彦はこの名物の語を疏して「名号物色」とした。つまり物には固有の形や色彩があり、それに応じて名称があるというのである。だから物の性質、形状を明らかにすることは、正確な名称を与えることであり、名を正すことはその物の本質を正確にとらえることになる。従って物と名の対応をゆるがせにすることは、「自ら欺き人を欺く」ことであり、清儒の一人は述べている。あいまいなままにしておくことは、自分自身を欺くばかりか、人をも欺く結果になると。わたしども研究者といわれる者も、よくこの過ちをおかしていないではあろうか。結論を適当に導くことで、いくぶんの疑義はありながら自分を

納得させてしまう。それは結果的にはその論によって人を欺くことになる。自戒せざるべからず、というところである。

中国では物の名はもちろん漢字でしめされる。ということは、文字の意義を正すことは、物の理解を正確にすることとなる。そこで訓詁の学が起った。訓詁の書の最初はふつう『爾雅』とされる。漢初の成立と考えられる。その篇目は十九、そのなかに積天、積地、積山や積魚、積鳥などがある。字のように天地や魚鳥に関連する語句をならべ、それにいちいち解釈を与える。

この態度がさらに物に集中したのが、後漢の末の劉熙の著『釈名』である。物の名を解釈するの意。全体は二七篇に分かれ、やはり積天、積地などから積疾病、積喪服などにも至っている。いずれもさまざまの物の名称について、その意義を明らかにする。しかもこの書はその序文で「物名に即して義を釈く」とその態度を述べる。これが名物をひとつの研究対象として、明確に意識した最初のものといわれる。

この物と名の対応を考える姿勢は、中国のひとつの伝統である。それはやがて単純な物と名義の解釈にとどまらず、さらにひろい分野に展開し、そこに記録と研究の態度を生むようになった。たとえば芸術面というならば、晩唐の人、張彦遠の『歴代名画記』がある。彼は唐の名門貴族の一人で、家には多くの法

書、名画を伝えていた。その内容は秘府、すなわち宮廷の秘庫とひとしかったという。

こうした環境のなかで書かれたこの書は、中国最初のもっとも優れた絵画史であり、同時に収蔵鑑識についても説いて、三七一一人の画家に対する評伝ともなる。この十巻に及ぶ論述のなかで、張彦遠は絵画の美の本質論にまで及んだ。それは形似(写実)をこえた骨気を理想とするものであった。それはついには、老荘の「忘我」を最高とするに至るのである。彦遠はいう、「物我ふたつながら忘る」と。絵画は明らかに現実の物であり存在である。しかしその最高は、自然に順応することである。自然の働きかけをそのまま受け入れることである。「天然に発す 述作によるに非ず」とも張彦遠はいう。

こうした風潮は絵画の面ばかりではない。器物についてもその歴史を考え、その本質を尋ねようとする態度は、これまた古くから中国では存在していた。格古の学である。その早いものには梁の陶弘景の『古今刀剣録』がある。陶弘景は道家の人、彼の名を冠した本草書は今も断片として伝えられ『本草綱目』と称する。本草はいうまでもなく、中国の薬物学として発達した。しかし自然のすべてを薬物として利用するという本草の態度は、しぜん本草として自然観察の学たらしめ、やがては近代博物学にも連接するものとなっている。

この本草にあっても、現実の自然物と、本草書にのせる呼称との対応を明らかにすることは、もちろん重要な作業である。ここにも名物研究の方法が、そのまま実行される。さらにはこの方法を用いて、張彦遠のように芸術的な存在について、それを明確に記録することがはじめられる。

陶弘景が刀剣を録したことは、道教にあつては刀剣は重要な礼器であつたためらしい。そして唐から宋の時代は、さらに古代の器、ことに礼楽に用いる各種の器物についての考証、研究はすこぶる盛んとなった。その結果、呂大臨の『考古図』、王黼の『宣和博古図』などが作られた。

これは唐から宋にかけて、しばしば古陵墓が発掘されて、古器を得ることが盛んだった理由にもよる。古陵墓からの発見品は、今日ではふつう殷周から春秋戦国期に用いられたとみられる、青銅器の類である。これらはいずれも祭祀用の銅器である。そこで古典にみられる祭祀の名と、発見された器物の関係が、貴族や知識人の間では問題となってきた。ここにも古代の名称と、物の関係の研究が始まったのである。その風はやがて中国の一伝統となった。清朝に至っても、乾隆帝による『西清古鑑』、『四清統鑑』と題する、古器物の一大図録が編集されている。

これはやがて張彦遠のように、古器物の鑑識、収蔵を論ずる書を生むようになった。最

も早く有名なものは、南宋の人、趙希鵬の『洞天清祿集』である。これはさらに明の文震亨の『長物志』など、多くの書を明清時代に生むようになっていく。

ところで中国は礼の社会である。そのため古典として『周礼』、『儀礼』、『礼記』の三礼が成立していた。しかし礼はすべて多様な衣服、器物また食品をとまなう。これらの物がすべて完備することで、はじめて礼は成立する。さきにもいった礼楽に対する器物の意味や名称の研究が重視されたのは、それによつてはじめて礼を正すことができるからである。礼は形を重んずる。形は物の属性である。そこで礼を説くには図解を必要とする。この要求に応じて、すでに後漢には、『三礼図』が作られ、以後もしばしば『三礼図』が書かれたことは、文献からも知られている。ただすべて佚して今日では伝わっていない。現在あるのは宋の聶崇義の『三礼図集註』である。図は粗であるが、形を推測するには足る。帝王、皇妃の衣服、兵器、旌旗、玉器、喪具など宮廷の礼の全般にわたる。

このように古器物を貴重視し、かつこれを愛玩したことは、『尚古薄今』の思想を生んだ。これは儒学の思想の基本でもある。孔子は自分のまだ生れていなかった、周の時代を理想の時代とみなし、彼の時代はすでに退廃の時代とみていた。そこで周をモデルとする政治と道徳の哲学をたてたのである。逆説的にい

えば、この儒学の思想的な基礎があったからこそ、古器物を尊重する態度も生れたとみることもできる。この尚古薄今の思想が尚今薄古に転ずるのは、十九世紀の末になって進化論が紹介されてからであった。進化論は過去を理想とせず、未来の発展を説くものであったから。生物学の一理論である進化論が、中国や日本では文明論として扱われ、進歩の思想の現実的基礎とされたことも、実は物と名の流れの上にあった思考ではなかったか。現実とその解釈という意味で。

この名物の意をはじめて日本語に適用したのは、源順の『倭名類聚抄』であろう。その成立は十世紀半だが、確たる年代は今も諸説があつて決し難い。その序によると醍醐天皇の第四皇女、勤子内親王が「漸く八体之字を辨へ豫め万物之名を訪ひたまふ」ことから、源順がこれを述したという。体例は漢語による物名をあげ、用例を中国の古典や仏經からしめし、それに和名を万葉仮名で与えてゆく。たとえば、「獸 文選注に云ふ 毛あるの群 獸と曰う 爾雅の注に曰う 四足にして毛あり 之を獸と謂ふ 音狩 和名介毛及」という如きである。全体は天、地、水、歳時など三二部に分ち、各部はさらに類に分かれる。類の総数は二四九に及んでいる。

なおこれより約五十年前には深根輔仁が『本草和名』を書いた。中国の本草書にみえる動植物や鉱物の中国名に対応する和名を考定

したものである。それによると草の名は二〇九、木の名は六九、鉱物名は二一である。この時輔仁が用いた本草書は、唐の『新修本草』であった。その記載によって日本のそれを固定したのである。これによって、当時の知識人には、約二〇〇の草の名が知られていたことがわかる。物に名を与え、それを先進中国の記述と比較考案したことは、名によって物の認識に至りつつあった時代を語るものといふことができる。物と名の関係はこうして定着してきたのである。

さてわたしの家の船箱のひとは帳箱である。そのけんどん形の蓋裏には、次のような墨書が読める。「能登国輪島町 住吉丸船頭 吉太郎持用」と。帳箱は船頭がつねに手もとに置き、書類や金子を入れる金庫であった。そのため頑丈な作りとなり、かくし箱などがよく仕込まれている。わたしのところのものは、あとのふたつは掛硯だが、いずれもかなり複雑なくし箱を具えている。

さらに帳箱の一部には寛政の文字が読める。物を所有者の名を記し、その入手した年月日を記すことは、古くから日本人の習わしであった。新調のものにその時を記すのは、物が人間の世界のひとつとして生かすはじめ、働きはじめた日を記念する方法であった。この時斯にこの帳箱は、船頭の人生の要素として誕生したのである。物にも人間と同じように

生と死がある。その生はまず職人の手で完成したときに現われる。そのとき職人たちはよく工房の名を記して、責任を明らかにした。それによって、物は世界のなかに、第一の誕生を記録する。

ついでその物はそれを使用する人の手に渡る。使用する人は、さきの船頭のように新調の日時と、自分の名を書き入れる。このときその物は、用の場で新しい第二の誕生をみせるのである。そしてこの物は、使用者の人生のなかで使用者とともに生きるものとなる。このときから帳箱の類は、船頭の生業を支える重要な機能をもつものとして、以後生きつづけてきたのであった。

時にはこの物に、新しく銘を与えることがある。茶の湯の道具にその例は著しい。それはそれらの道具が、使用する者の世界のなかで、新しい生の座標を獲得したための命名なのである。ちょうど生れた嬰兒が、名を与えられて、人間としての存在が確保されるのと同じように、茶の湯の道具は、銘を与えられることで、その世界で生きることを確実なものとする。

けれどもわたしの手もとにある帳箱や掛硯は、北国の荒波を乗りきりつづけた船頭と、その人生をともにすることはできなかった。日本海の舟運が衰えるとともに、それらは生きる場所を見失ったのであった。そしてさまざまな運命の曲折のなかで、今わたしの手も

とで、その美しい姿をみせている。

この三つの帳箱と掛硯のとってきた運命の流れを、ほとんどわたしは知っている。そしてその一部はわたしの個人的な歴史に重なりあっている。結びつく。と同時に、この三つにつながる人びとは、すべてこの世を去ってしまった。とすると、この帳箱も掛硯も、もはやその生命は失われてしまったのかもしれない。黒くにぶく光るその金具や、拭漆の沈んだ色調はすこしも変っていないけれど。

たまさかわたしはこの三つの重い蓋を開き、抽出しをあげてみる。小さなガンダーラの仏頭がいくつかが、抽出しのなかにいつもおだやかな表情で眠っている。わたしの青年時代、何度もの西アジアの調査の折に、もちかえったいくつかである。それらの地、わたしが汗を流していたそれらの地も、今は政治の激しい渦のなかに巻きこまれて、大きく変貌している。多くの遺跡はほろび、破壊された。多くのニュースもある。かつてこれらの仏頭で飾られていたスツーパーは、深い地中に埋れていた。そして今世紀になって、多くの人がびとがそれらをふたたび白日の光のなかのものとした。わたしもそのひとりであった。しかし今はふたたびそれらは土のなかに帰っている。そのわずかな日々の名残りのかけらにも似たものが、掛硯の具に眠っている。

あるいは三つのアストロラーベ。この中世

にひろく用いられた天文観測器を、わたしはイランの二、三の都市で求めたのだ。そのころの西アジアは平和な日々がつづいていた。たしかに大地主による土地支配はあったが、どこにも平和に安定した日があった。そのなかをわたしは長い旅をつづけていたのである。未知の世界をひたすらに。砂漠とオアシスの間を縫いながら。そんな日の思い出が、アストロラーベとともに、わたしのなかをかきめぐるのである。

月の鐔がたくさんつまった抽出しもある。これは亡くなった妻が好んで集めていたものである。江戸時代の柄鏡と鐔を集めるのは、妻の好みであった。しかしその収集もさほど実らぬうちに終ってしまったのだが。しかしこれらの鐔や柄鏡を、時にはなつかしくわたしは手中にしてみるのである。

だが抽出しにつまんでいるそれらは、考えてみるとすべてその現実的な意味を、とうのむかしに失ったものばかりである。はじめにいったように、名と物の対応を正しくすることは、中国の重要な伝統であった。そして物に対して生と死を与えるのは、日本の伝統であった。そしてわたしは、このふたつの伝統の重なりあいのなかに、わたしと物の関係をみようとしている。けれども今日、わたしの人生を投影している物は、すべてその本来的な存在の意味を失ったものばかりとなっている。

そしてわたしの日常は、大量の工業製品の

なかで過ぎてゆく。それらの名称や物は、いずれも長い生命を予期することなく、つねに地上から消えさることを、最初から目的として生れてきているように思われる。さまざまの工業製品の名が、なんと安直な意味しかもっていないことか。そのときわたしどもはもはやそれらの物に、人生とともに生きる物としての位置を発見し、かつ与えようとする意欲すら失ってしまうのである。そうした名と物の対応、物のなかにある生命すら発見しえぬ今日の人生は、不幸としかいえないだろう。

そしてわたしは、無名、有名を問わず個人の生の流れのなかで、明確に生れてきた物を、また手もとのなかで眺めている。だがそれらの人びとの仕事と、現実の日常とのあまりにも大きなギャップを埋めることは、きわめてむづかしいことにみえる。個性の匂いをつよく漂わせる物を、日常化することのむづかしさ。そのときある歴史を背後にもつ物がもつ、何ともないやさしさがわたしを打つ。たとえそれが今日的な世界では、もはやその存在の意味を失ってしまったものである。

座右への依存

大来佐武郎部会＝国立教育研究所所長

木田 宏

座右の銘、座右の書という言葉には、どことなく高尚なもの、そこから教えを乞うものという内容を思い浮べるが、そのようなものは、持ち合わせていない。それは決して、教えて貰う必要がないという、わが身の立派さを示すものではない。むしろ、何彼と頼らざるをえず、教えを乞うまでに自立していないのである。

そこで、身近に頼らなければならぬものということになれば、いろいろと思い当ることになる。

まず第一は辞書類である。もともと記憶力に弱い方と自認している上に、近年益々数少ない語彙や文字の記憶が危しくなってくるので、国語辞典、外国語辞典などは、文字通り座右に備えることになる。鞆の中にも、常に小さいものを持ち歩いている。

辞書の種類、銘柄に特別の注文があるわけではない。手軽で引き易ければ、殆どの場合、要求を充たしてくれることになる。注文の意味が知れているというわけである。ただ、寝ていても、手を伸ばせば、どれかに届くというのでないと、うまくない。要するに、横着にできているというのである。

辞書以上に欠かすことのできないものは、

毎日の予定などが書き込まれた手帳である。もう長年、能率手帳を愛用させて貰っているが、時間ごとの目盛りには書き込まれたこの手帳がないと、その日の行動に全く不自由を来すことになる。座右のもの、どころか、肌身離さずという代物で、毎朝出勤を見送る家内が、手帳は！と声をかけてくれる今日この頃である。

最近、この手帳に書き込むことで安心し、当の予定そのものが、全く記憶から失われていることも起こるようになった。面会や講演の依頼を受けておいて、他日依頼者から挨拶され、戸惑うという醜態を演ずるのである。

手帳を見直して、そうだったと記憶が戻ってくる。しかし考えてみれば、安心して放念しておくことができるというのは、手帳の大変な効用ではないであろうか。

この手帳には、その台帳とでもいうべきものが、秘書のところにある。多くのスケジュールは、まずこの台帳に記入され、そこから手帳に入ってくる。もちろん、その逆のことも少なくないので、折にふれて双方の調整を図るのであるが、最近では、ますます台帳の方に比重がかかるようになって来た。手帳が座右のもの、であるならば、それ以上に、この台帳がそうであると言うことになる。

考えてみれば、この場合、座右のもの、とし

て欠かすことのできないものは、物ではなくて情報である。手帳にも台帳にも、情報が記されている。その情報こそが座右のもの、なのである。そして、そこに記されているものは、数多くの情報の選択の結果に外ならない。

情報の最終的な選択は、本人が行うということではある。しかし、その収集整理、そして、その代理選択は、秘書によって行われる。旅行のタイム・スケジュールなどは、すべて秘書の手によって組み立てられ、訪問先なども予定されて、それに本人が運ばれて行くというのが、偽らざる実情である。

手帳が欠かせないのは、元をただせば、結局この秘書に対する依存に外ならない。この座右のひとに対する依存関係は、時とともに、仕事とともに深まって行く。気心を呑みこんだ秘書に助けられて、この座右のひと、なしては、日常の行動が不自由になるという半端ぶりが、年とともに高じていると言えそうである。

ここまでくると、もう一人、小児ぶりを発揮するのに欠かすことのできない座右のひとがいる。だが、幸いにも、紙数が尽きてしまった。

座右のもの

堀 淳一

エッセイスト

手もとにあって、日常よく使うものまたは見るもの——それは何だろう？ と考えた。

昭和二十二年現在の「地図「一覧図」というのがある。国土地理院がまだ地理調査所というっていた当時の、五万分一地形図の目録で、紙はすっかり茶色になり、折り目があちこち破れているシロモノだが、私はいまだにこれをしょっちゅう眺めているのである。格別の目的があるわけではないけれどもどこかヘッラリと旅に出たいときなど、とくにこれを見る。足をその中に踏み入れたことのある五万分一地形図の区画が、赤く塗ってあるのだ。その増えてゆくのがたのしみなので、特定の目的のないときは、その赤い部分の面積を増やす可能性をまず考えてみるわけである。

足を踏み入れる、というのは文字通りの意味で、乗り物で通ったのは、私は足を踏み入れたうちに入れていない。ただし、自転車は別である。そのかわり、五万分一のどれかの図面の中にちょっとでも自分の足跡を印しさえすれば、その図面は全体が赤く塗りつぶされるのだが。

行ってみるのによい場所、ぶらぶらと歩くのによい静かな道がないか、と探すのである。

と、いうまでもないことだが、一覧図の赤い面積を増やすことが、すべてに優先する目的ではない。そういう狭い目的へやみくもに突進することは、私は好きでない。一覧図は行ってみたいという気持をそえる場所を地図で探す、という行動をはじめ一つの手がかりにすぎないので、地図をあれこれ見はじめたら、あとは一覧図の白い部分に固執することなく、いろんな地図を眺めあさるのである。これもいうまでもなく、多少ともはつきりした目的のある場合には、はじめからその目的に関連する地形図類をひっぱり出して眺める。

だから結局、地図棚にぎっしりつまっている地勢図や地形図が、最もメインな私の「座右のもの」ということになるだろう。私にとっては地図は単なる道案内ではなく、知識・情報の豊庫であるから、地図棚はふつうの書齋と同じ意味をもっている。書籍棚に並んでいる書籍全部をひっくりかかして「座右のもの」とは通常言わないだろう——たくさんの本の中で、常に手近に置いておき、しょっちゅうひもとくものを特に座右の書と呼ぶのであろうから、地図棚全体を座右のものと言うのはちよっとおかしいかもしれないけれども、私は

地図棚におさめられている二万枚に近い地図のうちのごく特定のものだけを頻繁に見るのではなく、これらをほぼ満遍なく日常見ているのだから、そういつてもさして奇妙ではない、と思う。

ところで、一つや二つのものならば、それを適宜手もとに置いておきさえすればすむが、膨大な数の地図全部を「座右のもの」にしておくためには、整理がゆき届いていなければならない。目的の一枚をみつけ出すのに半日も一日もかかっていたのでは、「座右のもの」の用をなさないからだ。整理の仕方は、ごく単純である。私は地図を、最も標準的なやり方、すなわち縦に四つに屏風折りにし、それを横に二つ折りにする、という方式で折り畳んでいる。地図はできれば折らないほうがよいのだけれども、それでは持ち歩きにも取り扱いにも収蔵にも不便である。収蔵のためには畳まないまま地図を入れることのできる地図棚（地図販売店にある棚）があることはあるが、スペースをむやみと食う上に、埃がたまりやすく、出し入れも不自由であるばかりでなく、そのたびに地図がよごれたりいたんだりする欠点があるから、私は使わない。要するに、ひろげたままの地図はそれだけですでに「座右の」用をなしにくいので、私は折り目がいたみややすいという難点には眼をつ

ぶるわけである。その畳んだ地図を、密閉式のスチール書棚の中に、ハダカのままギッシリと並べる。並べ方は——二〇万分一地勢図の一図葉ごとにその図名を書いた見出しつき仕切り板を立て、次の仕切り板との間にまず該当の地勢図を、次にその中に含まれる五万分一地形図を番号順に並べ、それぞれの五万分一図のあとにそれに含まれる二万五千分一地形図をまた番号順に並べる。同じ地図が何枚もあるときは（何枚もあるのがふつうだが）、測量あるいは編集あるいは修正年の古いものから新しいものへの順に並べる。二〇万分一地勢図の並べ方は、番号順に並べると地域があちこちに飛んでかえって不便だから、ほぼ北から南へ向かって適当に配列してある。二〇万分一は全国で一二九面しかないから、その配列順ぐらいいは頭の中に入れておくことができるのである。

このように配列法が単純だから、目的の地図をひき出すのには、平均二十秒、長くても一分ぐらいいしかかからない。だから一枚一枚の地図がごとごとく「座右の用」に立ち得ることになる。逆に言えば、これだけの数の地図の一つ一つを「座右の地図」にするためには、整理の方式は単純でなくてはならないのだ。複雑な「整理」の仕方をする、目的の地図を手にするのに数分から十数分もかかっ

てしまつて、地図が座右のものとして役立たなくなつてしまふ。別の言い方をすれば、複雑な「整理」は整理ではないのだ。

地形図・地勢図以外の、種類もサイズも材質もそれぞれ複雑多端な地図や、これもサイズも紙質もまちまちな外国の地形図類は、整理が桁ちがいにむずかしい。大きっぱに地域別に分け、地域名を記したラベルの貼られた整理箱（ポールトレ）に入れるというのが、今のところ関の山である。そのため、必要な地図を取り出すのにいささか手間がかかる。しかし、幸いなことに取り出さなければなら

ない頻度が地理院の地形図・地勢図に比べて小さいから、目下はそれで間に合っている。つまりこれらは「座右のもの」というよりむしろ、ふつうの書棚にあるふつうの本と同じ性格をもつわけである。

話が整理法にそれてしまつたが、前記の「座右の地図」たちが、私の頭に旅のイメージーションを生いきいきと浮かばせ、私を実際に旅へさそい出し、道案内をし、その中でいっそうそのイメージーションをふくらませてくれるのである。そして、旅が終われば、それらは旅の記憶の貯蔵庫の役割を果たしてくれ、数カ月、数年、あるいは十数年たったあとでも旅の印象をまざまざとよみがえらせ、記憶を呼び戻すのに呻吟することなしに比較的な

めらかに旅についての筆を走らせることを可能にしてくれる。いや、単によみがえらせてくれるだけではない。不思議なことに、地図を眺め返していると、実際に旅をしているときには感じなかったことまで感じさせてくれさえする。そうして、旅の間に私が一心つくりあげていたイメージの世界をひときわゆたかにし、それを一つの文章として定着させる作業を大いに助けてくれるのである。

実際に旅に出かけなくても、地図は、旅についての想念はいうまでもなく、町や村の成り立ちやそこの暮らしについての想いをさそってくれたり、地球の変化の壮大な歴史に関する好奇心をかきたててくれたり、

自然保護や公害問題への関心を引き起こしてくれたりする。また、これは「座右の地図」からはちよつとはみ出た話になるが、地図そのものの美しさが、美術品・工芸品を鑑賞するときと同じたのしさと興奮を呼びましたり、その美しさの淵源についての考案をめぐらさせてくれたりすることもしばしばある。こうして私の興味の対象は、文化現象のあらゆる分野へとひろがってゆく。地図以外に私の仕事を埋めつくしている書物は、ほとんどすべて地図に触発された私の好奇心・探索欲にこたえるために集められたものに他ならない。



さて、地図のほかに、私の座右にあるもので、多少とも人様のそれとちがったものは何だろう？

一つは時刻表であろうか。これも地図と同様、いや、暇さえあればひねりまわしているという点ではあるいは地図以上の、座右の存在だ。地図の上で見当をつけた場所へ行くのにどんな交通の便があるのか、あるいはないのか、日帰りで行けるのか宿泊が必要なのか、などをしらべるほか、特急や急行にできるだけ乗らずにゆっくりと旅をたのしむ手だては？ 見たところ接続していないように見える列車が実は接続しているのではないか？ 時間にゆとりがある場合、どこでどういう道草が食えるか？ などなどを考えるのが、実在のたのしい。まあしかし、時刻表のたのしみについては他にベテランがおられるから、くわしいことはその方々におまかせしよう。

そのほかには？ そうそう、色名事典というのがあった。

文章を書きはじめてころ、一番困ったのは、色の名前であった。紀行文を書くと思うと、風景の中にあるさまざまな色彩を描写することが、ほとんど必須となる。単に緑とか青とか赤ではあまりにも芸がないだけでなく、風景を描くの欠かすことのできない微妙な色の取り合せや移り変わりが、とうてい表現で

きない。また、地図に関する論評を書くさいにも、地図の生命の一つである色のデザインを正確に記述・説明する必要にせまられる。そこで、幸い書店をぶらついていたときにふと眼についた日本色彩研究所の色名事典を、とびつのように買い求めてきたのであった。以来十年以上も、この事典は私の座右の友であり続けている。

色の名前はなかなか覚えにくい。いや、名前が覚えにくいという前に、色そのものが甚だつかみにくい属性である。名前を覚えても、その名前の色がどんな色だったかが、容易に頭の中に定着してくれない、といったほうが正確であろう。たとえばくちなし色とか、シャルトルーズグリーンとかいう名前は覚えていても、いざそれを使おうというときに、果たしてこの色はくちなし色でよかったのか、シャルトルーズグリーンでよかったのか、といつも自信がなくなる。だから、色の名前の数はさして莫大なものではないのにもかかわらず、いつまでたっても手もとに事典がいるわけなのである。さらに、たとえ名前がわかっても、とくに紀行文などの場合には、その字づらや音のひびきが、文章の音調やリズム、ないしそれによって表現しようとする情感に、ピタリとマッチしないことがしばしばある。そんなときには、実際の色とやや異なる色の

名前ではあるけれども文章ないしそれに表現させたい情感にはよりピタリとする名前、つまり坐りのよい名前を使わなければならない。そのような折にも、色名事典はまことに有用なのだ。

これと似たような意味で大変ありがたい座右の友が、最近角川書店から出版された類語新辞典だ。もっともこれは私独自のものではなく、文章を書く人の多くに愛用されているであろうが。以前物理学をやっていたときには、英和・和英・英々辞典とやらんで、英語のシソーラスを座右に置いていた。英文で論文を書くさいに実に重宝だったからである。そして、これと同じような辞典が日本語に対してもあったらなあ、と何度思ったかわからない。その渴望を満たしてくれたのがこの類語新辞典であった。ある単語が思い浮んだけれども、どうもその場にピタリとあてはまらないとき、あるいはすぐ前に同じ単語を使っただばかりで同じ言いまわしの繰り返し返しを避けたいとき、これは非常に便利である。いや、便利というに止まらず、地図が知的探究の世界をふくらませてくれるように、文章づくりのたのしみを数層倍にもしてくれるのである。

玩物 創志物

国立民族学博物館長

加藤秀俊部会 国立民族学博物館教授

梅棹忠夫

佐々木高明

物の集合体相手では

は玩物にならない

佐々木 「座右の銘」というのは、割合お持ちの人が多くですが、「座右のもの」というのはお持ちの人が少ないのじゃないですか。梅棹さん、ありますか。

梅棹 いっぱいあるな。身のまわりにたくさん並んでいる。しかし、特定のものを愛玩するということはない。座右の銘というものも、私は感覚的にわからん、わが人生を象徴する、あるいは一言で言い表わすような文句というのはいもつかん。そういう精神構造になつたらんのです。ものについても、玩物ということがはじめからない。

佐々木 特定のものにシンボリックな意味を持たせず、身の回りのもの全てが座右のものということですね。梅棹さんという人はそういう人なんだ。それでいて大変なコレクション

癖がある。あのコレクション癖と玩物ということがないと言うのはどうなるのでしょうか……。

梅棹 ものについての愛着はあります。ものは大好きです。しかし玩物とは違う。座右のものを徹底的にいじくり回すのが玩物でしょう。それはないんやな。

佐々木 それにしても、忙しいのに、切手を水でがして並べてうれしそうにやっている。玩物とどうして結びつかないのですか。一見似てるように見えますけれどね。

梅棹 私は常にものを相手にしているけど、それは、いつでもものの集合体を相手にしているのだということです。特定の少数のものに対する執着とか愛情はほんまにない。だから玩物にならない。たとえば絵は大好きですが、特定の絵を買い込んで掛けておこうという気はない。やるんだったらコレクターになっていくでしょう。

佐々木 まだよく判らない。コレクターと

いうのは、結局は一つ一つに対するある種の執着がないといかんわけでしょう。

梅棹 執着はある。しかし、それは常に集合です。相手が常にシステムなのです。私はさっき、座右のものはいっぱいあると言ったのは、全体が私の精神生活を支えるシステムになっているということだ。しかし、その精神生活を抽出して一語で言えと言われたら、何も出てこない。システムと自分が対決して

いるわけです。その意味で非常にものに対する執着は強いのですよ。私は理論は嫌いじゃなく、かなり理論志向があるけれど、同時に即物志向が歴然とある。だからこういう商売が務まる。しかしわが博物館の十数万点のコレクションの中で一番好きなものを言えといわれたって言えるものじゃない。全部がシステムになっているんやから。

佐々木 なるほど、全体がシステムとして存在すると……。しかし、世の中に玩物志向の人はようけいますな。それから、他の人に

とっては何でもない小さなものを、私は「これだけは」と大切にしている人がずいぶんいますね。

人間精神の深淵に かかわる暗い情熱

梅棹 そう、それはいつも不思議に思っていることです。ごく少数の器をいつくしんで持っているとか、非常に質はいいが、ほんの小さなコレクションを持って楽しんでる人が割にいるんだ。私は全然違う。

佐々木 ちょっと面白いんだけど、世の中の人はかなり、玩物志向と博物館におけるコレクションをゴチャゴチャにしている部分があるんじゃないでしょうか。博物館というのは玩物志向では成立せんものですね。

梅棹 玩物をやったら一番具合の悪い場所です。特殊なものに対する強い執着があったら、博物館の志は立たんわ。われわれは玩物

をやらんことによつて志が立っているところがある。

佐々木 話は戻りますが、こういうのはどうですか。三枚揃いの切手があって、二枚は持っている……。残りの一枚を揃えたくありません。

梅棹 それならんのか。先日家内と切手整理用具を買いに行つてね。たまたま私のコレクションに無い切手があった。家内は買えといったが、私は買わなかった。抜けていたら抜けていたでええやないか、というのが私の考えです。不完全なシステムは、それはそれでいい。自然に入ってくれば完結する。

佐々木 梅棹さんの場合、自然に入ってくるというインプットのシステムがあるわけですね。

梅棹 博物館についても、大体同じプリンシプルを持っているのや。無理して買う必要は無いということです。あれば買えばいい。持ってきたら買えばいい。しかし、特定のものに対する執着はコレクションをつくる上にむしろマイナスだと私は考えている。執着したらあかん。美術のコレクションやるのとはちよつと違う。

佐々木 なかなか「玩物創志」にはなりませんな。

梅棹 特定のものに対する特殊なる執着でないというところまで玩物の意味を広げたらいい。ものに対する興味はものすごくあるの

ですから。

佐々木 ところで、システムとしてもものを愛するというタイプの人は、世界的にどうかは知りませんが、日本では少ないみたいですね。

梅棹 よく判らんけど、切手集めを例にとると、今圧倒的に多いのは、SLならSL、蝶なら蝶ばかりを集めるトピカルという集め方です。それに対してジェネラルという古典的な集め方がある。何でもいい。世界中の切手全部を相手にする、当然のことながら、完集ということは無いのよ。私のはジェネラルです。数万種を全部発行主体別、年代別に整理してらんです。極めてシステムティックなんだが、偶然舞い込んでくるものだけを相手にしているから穴だらけです。

佐々木 だからこそ玩物じゃないわけですね。トピカルになると、SL、蝶といったトピックを設定することで玩物趣味が出る。そしてこの一枚がどうしても欲しいんだと必死になり、身を持ち崩していく。これまでも、某大先生がコレクションのために身分を失うところまで行って……といった話が世の中にあるわけだから。

梅棹 あれは玩物の極致なんです。そうなる泥棒してでも、人をだましてでも欲しくなる。自分の神聖なる情熱のもとでは、すべての反社会的行為も許されるといふ心理状態になる。これが喪志だ。

佐々木 しかし、「玩物喪志」というのは、人間のかなり深いところにかかわっているよな気がするんです。いい悪いは別に、志を失うほどの玩物というのは、人間精神の動きのもつともドロドロしたものにかかわる側面ですね。人間精神の深いところにかかわっている。

梅棹 私もそう思う。玩物というのは、やや暗いけれども、人間性の非常に深いところにかかわってくる極めて強い情熱……。

政治的社会から離脱して物に賭ける

佐々木 それに対して、梅棹さんのシステムティックにもものを愛するというのは、極めてクールですね。

梅棹 うん。まあ、それはおいといて……。玩物とはものの内面に自分が入り込むことですね。喪志とは、おそらく政治的人間でなくなることである……。

佐々木 政治的を広く解釈して毀譽褒貶とか地位とか名誉までを含めましょう。

梅棹 うん。社会において名を成すとか、人間を牛耳るとか……。ものに対する執着はそういうことに対してネガティブなんです。

あつたらあかん。明治の革命のときの志士は玩物やっていたらあかんのや。つまり、玩物喪志は一種の逃避なんです。政治的世界から

離脱して、ものに賭けていくという側面がある。

佐々木 それは歴史をみてもようわかりますなあ。ところで日本におけるシステムティックコレクションの系譜はどうなんでしょうか。

梅棹 江戸中期ぐらいから本当のコレクションが初まる。たとえばちよつと時代は遅いが木村兼葎堂……。これは完全な科学的コレクションです。そのちよつと前に例の平賀源内がいるが、彼の場合は、玩コレクションによつて志を削り出したところもみられる。

佐々木 だから最終的成功までいかず、どこかで挫折せざるを得ないわけだ。木村兼葎堂は大町人だから、それで志を立てる必要はない。……システムティックなものは志とは関係ないというのはよう判りますなあ。シーボルトなんかもそうでしょう。

梅棹 そう。大体自然科学者はシステムティックコレクションをやることによつて、逆に政治的欲望を切つて捨てるわけ。両方成立するのは希有の例だと思ふ。分類学の根本になったのは貴族のお遊びです。遊びがなければそういうコレクションはでけんのか。日本においても、動物分類学は、貴族がやっている例がたいへん多い。

佐々木 なるほど、なるほど。

梅棹 道徳的に良いことであれ悪いことであれ、何か社会的野心というものが「志」なんでしょう。世のために尽しましようというの

も、その意味で社会的野心なんだということ
です。それには、玩物をやっていたらあかん
ものをシステムに置き換えてもこれは同じで
す。玩物はやはり遊びの世界です。

佐々木 そうですね。僕はやっぱり、もの
を集めるというのはそれがシステムであれな
んであれ、かなり遊びの世界にかかわって
いると思う。ですから仮に、遊びの世界と遊び
でない世界とがあって、その二つの世界の間
で相互交流が行なわれることによって、ある
種の創造的な何かを生み出す動機になるかも
しれないが、しょせん、ものを集めるという
のは遊びの世界の問題じゃないかと思うんで
す。

精神と物との緊密な関係の大構築物

梅棹 ちょっと別の角度から考えると私に
はこうも思える。玩物―座右のものとして、
ごく少数に限るということは、遊びの要素を
限定して志をある程度立てようということに
なるかもしれない。

佐々木 なります。しかし、物に対する愛
着というものが深くなればなるほど、物の数
は減るんじゃないですか。

梅棹 減るかもしれん。だが、多数のもの
のコレクションの成立というのは、なかなか



面白い現象やと思う。自分を取り巻く外なる
世界をシステムとして自分と対決させるわけ
だ、これがだんだんと大きくなっていくと、
物に対する愛着も、恐しく精神の強度を必要
とします。多様性に対して耐えられるだけの
強さがないとあかん。

佐々木 確かにコレクションが発展してい
ったらそうですが、その前に、一体コレクシ
ョンという行為は何ですかね。世の中にはコ
レクターが一杯いて、第三者にとってはしよ
うもないこととするわけですね。

梅棹 隠居のおじさんみたいな人が多いか
らな。

佐々木 いや、いまの有名考古学者はみん
な元をただせば考古学少年で何やら土器のか
けら集めた人ですよ。必ずしもオッサンとは
限らない。――子供たちの心の中にまで深く
根ざしているコレクション精神とは何やる。

梅棹 うん、私も子供のころは昆虫少年だ
った。――ちょっと判るような気がする。子
供までじゃなく、子供と老人がコレクション
をやるんだ。中年は志の世代。違うか。

佐々木 それは面白い定義やなあ。いずれ
にしても「玩物」は志に相反する。……「玩
物で志を創る」というのはどうなるんだろう。

梅棹 どうして創れるのかも一つよう判
らん。しかし、こういうことも言える。つま
り、精神の強度を高めるためには、玩物とい
うことは大変いい方法である。多様な状況、

あるいは多様な外界の条件に対して、敏感に
反応できるかどうか……、これが精神の強度
なんだが、多様なコレクションに耐え得るに
もこれが必要なんだな。

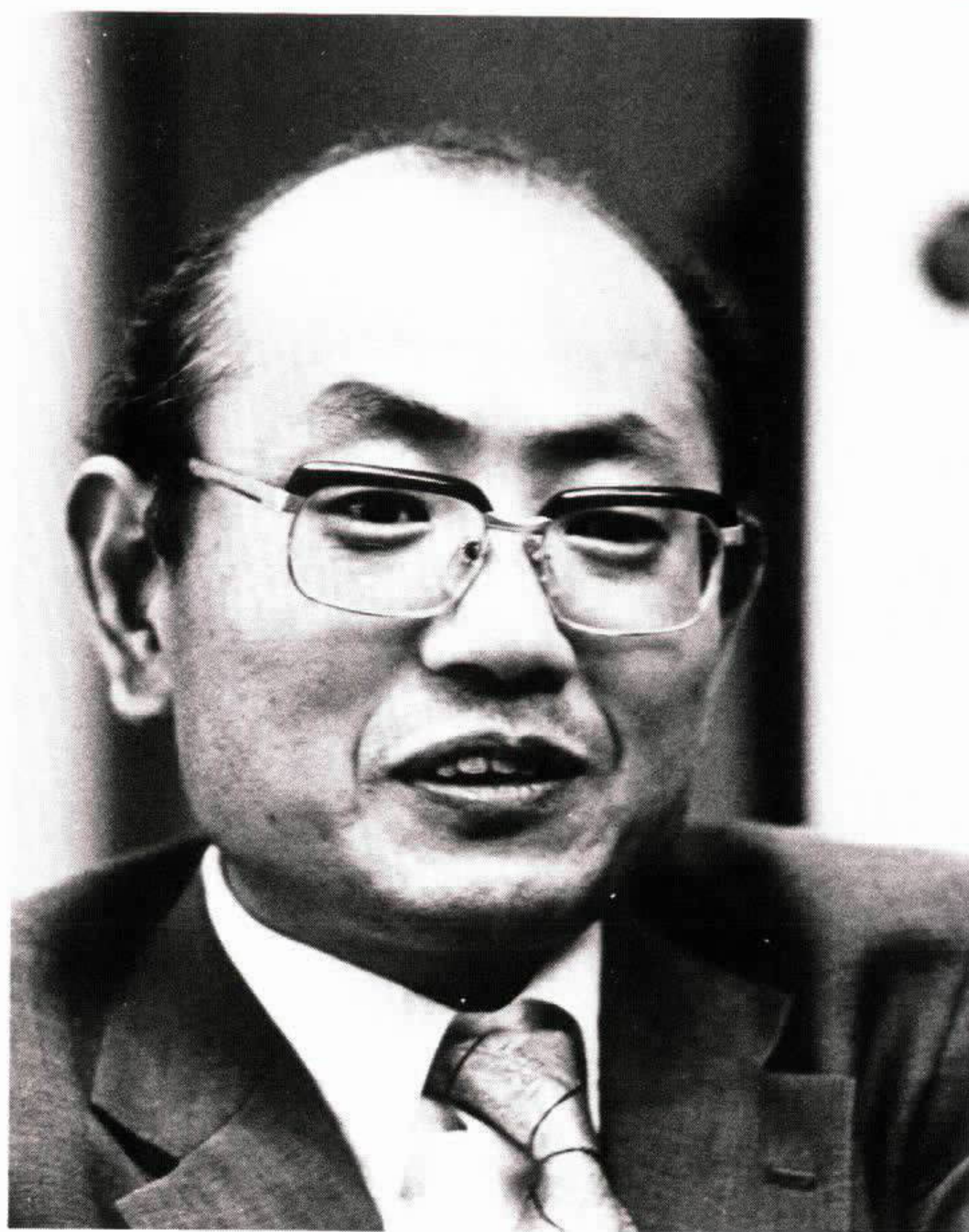
佐々木 梅棹さんがコレクションというも
のをしたから言える話ですね。しかし一般に
は判りにくい。物を集めればコレクションに
なると思っている人もいる。

梅棹 違います。コレクションは格闘です。
百貨店で昆虫標本買ってもコレクションには
ならん。一匹一匹の昆虫にも個性がある。そ
の個性と自己の精神との格闘なんです。一匹
一匹の昆虫の習性をじつとにらんで、どうし
たらバツと捕虫網で一発で捕れるかと……。
コレクションというのは自分と個々の物との
間に結ばれた緊張関係の束で築かれた大構築
物なんです。だからコレクションは物の集合
体ではない。あれは精神の集合体です。だか
ら、精神の強度を高めるためにはコレクシ
ョンをやりなさい……。

自然科学者と収集家の精神の相似性

佐々木 精神は強まるけれど、その精神を
乗り越えてそのコレクションに没入したら……。

梅棹 それはあかん。精神の強度という概
念は、要するに事物の多様性に対する許容度
ということ。一般にはシンプルな世界に



住みたいという願望が強い。ものがゴチャゴチャあるのは嫌なんだ。私は、こういうのは弱い精神だと思う。

佐々木 たしかにわれわれ博物館屋としては、一点集中的に、何か己を没入させるようなコレクションをしていたら仕事成り立たないわけですね。非常に美術的価値がある物も、何か折れ箸のような物も、学術的資料としては同じ一点という意味になる。これが博物館の基本的立場で、一点集中主義にはなれんのですな。

梅棹 コレクションにもいろいろあるが、私らの物事の考え方はやはり集合論的世界だな。つまり、限定された特定少数のもの世

界ではなくて、無限を前提にしている。番号をつけていったら、少なくとも自然数と同じだけ次から次に出てくるはずだという世界に住んでいる。

佐々木 特に梅棹忠夫という人はそうですね。私と比べたら、よりシステムティックで、より自然的なんですよ。僕にはまだ何処かに玩物志向みたいなものが残っている。古い博物館などでは、むしろ玩物志向的な人がおって、なでさするが如く幾つかの物を整理している状況があったわけだ。

梅棹 心づかいということもあるんですよ。ま、自然科学の基礎にある認識の態度というのは、そういうコレクターと非常に近

いんです。自然における多様性を一つ一つ確認しつつ自分の精神と関係を結んでいく。その繰り返しであり、十束一からげを一切しないで、ものは全部違うという前提に立ち、それを全体としてシステムに組み上げていく。これはリンネの精神なんだ。システム・ナトゥラエ。だからコレクションを抱えるという意味で玩物という言葉解釈すれば、これで立つ志は自然科学、あるいは科学の志です。社会的、政治的なものではなく、自然認識のうえにおける志だといえる。

佐々木 それをもうちょっと煮つめたら、生態学はそういう認識のうえに立つとということですか。

梅棹 立つと。だから私は生態学をやるならまず分類学をやつとけと言います。分類学をきちんとやらん生態学というのは、全く信用できない。

佐々木 それをやや現代的に言い直せば、最近いろいろ自然の問題が言われるが、自然というのは切り離され、切り取られてはもう自然じゃなくなる。自然という全体系を全体系として認識しようというのが生態学であり、その生態学の基礎であり自然認識の基礎になるのが、システムティックなものの考え方であるということになるんだと思う。

世界の多様性を無視する精神の貧困

梅棹 話は飛びますが、旅行してその土地のお土産を買うという精神が私には理解できない。土産というのは非常にシンボリックなもので、旅行の思い出のよすがにしたり、自分の旅行体験を他の人に分かち与える。やはり玩物精神やな。全体からパージと切れて一つのものが出てくる。私が土産を買う人やつたら、その店全部を買い占めることになる。そんなことはできないから、土産は買わない。

佐々木 梅棹さんは、そうした関係の認識において、日本人としてはかなり極端なんですよ。分析的というか自然科学的認識がきっかけに価値観にまで透徹している。その、もう一方の端に物と一対一で没入するというすごい玩物志向の人がいるわけね。その間に、物と人間の認識の仕方のさまざまなバリエーションがある。ひょっとすると各自の持つ物認識というのは自然認識の仕方と同じように全部違うのかもしれない。

梅棹 そういうことになる。先年家内とチロルに行った時、彼女はエーデルワイスを摘んで今でも持っている。しかし私は、アルプスのお花畑の多様さからエーデルワイスだけを取り出すのはきわめて危険だと思うわけだ。他にたくさん植物がある中で、なぜ一つの

草とだけ関係を結ばねばならんのかね。

佐々木 それは認識としてはよく判りますよ。でも一般的には梅棹夫人的な人が多い。僕にしたってエーデルワイスがあってもええなと思うし、人によっては非科学的だが、チロルとエーデルワイスが何かシンボリックに結び合わさっているわけですね。

梅棹 非科学的だからって非難するわけじゃないが、あの多様性が判らないのは、精神の貧弱さを証明しているのではないか。たとえば宮本武蔵ね。この道ひとつ、孤剣を頼みに世の中を渡っていくというのは、私のもっとも嫌悪する精神や、これだけ世界に満ち溢れた多様な現象、事物と関係を結ばずに、たった一本の剣というふうなものもと心中するなんて、アホやないか。何という貧しい心かと私は感ずるわけや。「この道一筋」というのは、何かたいへん気もちがわるい。

佐々木 「座右の銘」とか「座右のもの」とかをよしとする精神には、何かさういう、独り剣を愛するものへの愛着、憧憬みたいなものがやっぱりあると思いますよ。民族学でも、日本民族のエトスを考えるというのは、かなり一点集中主義ですよ。日本民族文化の核になるものが「甘え」であるとか「恥」であるとか……。しかし、そんなもので全てが解決できるものではない。もの見方の違いにすぎない。

矛盾を平然と見つめ得る精神の強度

梅棹 私は多様性に対するトレランシー(耐性)と同じで、矛盾に対するトレランシーというものが精神の強度を測るひとつの尺度だと思ふ。矛盾を平然と見ていられるかどうか一

矛盾があるのが現実なんであって、その矛盾をどうでも無くしてしまいたいというのは、やはり弱い精神だと思うわけです。さっきの切手と同じで、欠落があればあったでいいじゃないですか。

佐々木 それは、ありのままの世界をありのままに認識しようとするのと、何か理想型(アイディアル・タイプ)を作って、それによって認識しようとする、認識体系の違いかもしれない。アイディアルタイプで認識する立場に立って、さらにそれが価値観にまで及んでくると、すべてのものを無理矢理に何らかのアイディアルタイプに属させるとか、変えてしまわないと気がすまなくなる、大変無理のある思考になるのかもしれない。

梅棹 イデオロギー的思考というのはそういうものです。矛盾に耐えられん。だから一定の観念体系で世界全体を見ようとする。

佐々木 あるいはその矛盾を強引に一定の秩序に変えるとか、そのイデオロギーに属さないものは悪であるとか……。僕らは

出来るだけ、あるものはそのままワーツと全部見たいという精神がある。

梅棹 秩序は部分的には論理化できる。ちよつとずつグルーピングして、システム化できるんです。しかし全体として筋道の通った解釈なんて、できるものじゃない。世界というのは、しよせん支離滅裂のものなんです。

佐々木 世界にあるものを一旦は全部をシステムとしてすべて認識しようという自然認識。これはきわめて体験的、経験的な基盤の上に立っていると思うんです。その認識が物に對したときには、きわめて個別的になるんですね。経験的だから、すべてのものがすべて個性を持つところに行く。

梅棹 八百万の神々の世界や。——ちよつと私の発言を補足しますが、私は客観的であれということを行っているのでは決していない。色にたとえれば黄なら黄色だけに執着するのは、この多彩な百花リョウランの世界にあって、何という狭い精神か。人間精神の豊かさを、どうしてもっと自分で開発しないのか。やっぱり、いろいろな価値の中を自由に遊行することやね、これは。

佐々木 と、梅棹さんは思っているわけ。ところが僕は、少し貧しいかもしれないが、わたしはこれが好きで好きでかなわんのやという人間はそれはそれでええのやないかと思う。その辺が梅棹さんの考え方と微妙に違う。

梅棹 例えば私は旅行が好きで、世界中

ろんな所へ行き、それぞれに面白い。旅行は一切しないで静かに家にいるのが好きだという人もいるが、これも精神の強度の問題ではないか。生まれつきやらなんやらで身心ともに強度の弱い人がいて、それには同情はしましけれど、逆にあちこち歩く人の存在も認めて欲しいんだ。

佐々木 確かに旅行する人の精神の強度は認める。しかし、家にいたほうが安心立命だという人の弱度もまた認める、という世界が成立せんことにはあかん。どちらかが一方を否定したのでは人間世界は成立せんと思いませんね。

梅棹 それは客観的判断だが、私には私の主観的な判断がある。たしかに虚弱体質の人がいて、それは保障しなければならんし、その人たちの生き方も認めねばならん。しかし虚弱体質にはちがいない。やはり人間は強健なほうがいい。

佐々木 そこが微妙に違う。家におる人は違う所で精神の強度があるのと違いますが、コツコツ仕事したりね。トータルしたらどちらが強いか判らない。僕はその辺を相互に認めた方がいいやないかと思う点がありますよ。
梅棹 今日の対談は、人間精神のかなり深い所にさわってきたな(笑)。

座右のスタイル

加藤秀俊部会＝山形大学教授

舛田忠雄

改めて座右の『もの』と問われて、さてと考えた。あたりまえのいい方からすれば、座右の『もの』の『もの』とは、『書』であり、『銘』であることに相場はほほきまってる。

あるときは、その一冊の『書』によって自分の生き方を決定したり、またそれゆえに、文字どおり常に座右に置き、何度か読み返すなかで、自分の生き方を確認したりする『もの』であろうし、あるいは、朝に夕に仰ぎみて人生の指針とする先人の訓戒といった類の『もの』をそれはさすのであろう。

そういった意味での座右の『もの』が、将来あるいは私の前にあらわれてくるかもしれない。が、しかし少なくとも現在の時点では、私の周囲からそうした『もの』を捜し出すことは、はなはだむづかしい。

私のまわりにはいろいろな『もの』がある。職業から、書籍の類は少しく買い込み、いろいろな意味で感銘を受けた本も少なくないし、何度か読み返した本も多い。しかし、それも多くは私の仕事のうえで必要に迫られた結果であって、座右の『書』といったものではない。また変ったところでは部屋の傍に「カメ山・駒田酒店」と筆太に書かれた底の抜けた素焼の五合トックリがある。私が漁村の研究を続けていることを聞いた先輩が、私にプレゼントしてくれた『もの』であるが、和歌

山あたりでかつて使われていた「たこ壺」だという、酒トックリをたこ壺に利用した漁民に愉快さを感じながら、時折手にとって眺めたりもしているが、これとて座右の『もの』とするにはほど遠い。

とすると、私の今日までの生き方に影響を与え、また将来にわたって影響を与え続けていくであろう『もの』は、どうやら『物』ではなく『人』になりそうである。

人を『もの』に置きかえるご無礼にお許しを乞わなければならないが、いい意味で私に常に心理的な刺激を加え、それゆえに、私自身、常にその『人』を意識しながら仕事をせざるをえないとするならば、それは、通常われわれが座右の『書』や『銘』というところの『もの』と、ある意味では等しいといつてもよからうと思う。

さてその『人』とは、すでに大学を定年退職され、今は悠々自適の生活を送られているT先生である。徹底した実証研究者であり、先生の調査は職人芸の域に達していた。私がムラ研究のイ・ロ・ハを教えられたのはT先生からであったが、先生は大学での講義や演習の時間にムラの話をする以外では、われわれ学生の「手をとり足をとって」の教え方はめったにしなかった。フィールドに出たとき、先生の傍について史料の収集の仕方やインタ

ビューの方法等を盗みとる以外に、具体的な調査技術を学ぶ術はなかった。それはまさに名匠の許に弟子入りした小童のごときあり様であった。

あるとき、先生と二人で県の差し廻しの自動車をつかって、とある山村の調査に出かけた。村役場での資料収集と地元の数人の農民へのインタビューに一日を費やしたが、先生が農民に向かって発する質問の意味するところが、私にはさっぱり理解できないまま、その日を過ごした。帰りの車中では、先生は軽いイビキをたてて眼を閉じられていた。せめてこの車中で先生に教えを乞おうと考えていた私は、情けなさ口惜しさとみじめさとの複雑な気持ちで先生の横顔を見つめていたことを今も記憶している。そして数日後、先生

の書いた報告書を読ませていただき、さらにその感を強くしたものだ。 「同じテーマを二十年間追いつづける、何とかわかるようになる」というのが先生の口ぐせでもあった。古い言葉でもあるが、何とか研究生生活を続けている若いわれわれにもいい当たる言葉でもあるように思う。 ともかく、T先生の研究に対する姿勢と生き方は、私にとって座右の『もの』とすべきものであると思っている。

座右の「もの」



坪内ミキ子さん

俳優／加藤芳郎部会

- ① いつも即答出来ないご設問で、困っちゃいます。多分「はい」です。
- ② 本当は、私の手足の一部のような、また、めい想の場でもあり、最も使いこなしている「車」を挙げたいのですが、どうも座右というにはふさわしくない気がしますので、時計、鏡、カレンダーを申告します。
- ③ 旅をして、ホテルなり旅館なりに落ち着いたらとします。

部屋が広かろうが狭かろうが、洋間だろうが和室だろうが、枕が固かろうが柔かろうが余り気になりません。ただ目の届くところに時計と、鏡と、カレンダーがないとどうも落ち着かないのです。鏡はたいがいあります。時

計もこの頃はホテルですとついている所が多くなって来ました。ただ、カレンダーはまさかかかっている部屋はないので、最後まで落着かないのです。時と時間に追われる現代社会に芯からスホイルされてしまったようで情けないのですが、今現在の自分を自分で把握していないと落着かないのだからと、自己分析しています。我家では、カレンダーはスケジュール表でもあります。鏡は、商売柄というより、兄妹がなかった私は小さい時から、小鳥が鏡の前で仲間がいるようにうたっているのと同じで、もう一人の私と相対して寂しさをしのいでいたなごりなのと、よく眼にまっげが入るので必要だからでもあります。時計に至っては、この間数えてみましたら、何と狭い我家で、現在動いている時計が腕時計は除いて十五個ありました。一番お世話になっているのは、ラジオ付目覚まし時計です。

④ 座右の銘からの印象のせいでしょうか、どうしても教訓的なイメージを含んだものがあるべきだと思いが強いのですが……。

それで今回の返答に困りました。たとえば聖書であるとか、辞典であるとか名画であるとか——にすべきかと。座右という言葉は、抽象的イメージだと思うので

すが、それに具体的なものがつきますと私の理解力をこえてしまいました。



加藤秀俊さん

学習院大学法学部教授／加藤秀俊部会

- ① はい。
- ② わたしの場合、結局のところ、もろもろの文房具類ということになりそうです。
- ③ 肌身はなきず、という大げさですが、いつでも身近において、しょっちゅう使っています。
- ④ わたしには、どういうわけか、ここ二十年以上使いつづけてきた一本の万年筆があります。それは、わたしにとって、物言わぬ友人のようなもので、したがって、この場合「座右のもの」は、わたしにとっての精神的な仲間、ということになるでしょう。

- ① 「座右の「もの」をお持ちですか？」
- ② それはどのような「もの」ですか？」
- ③ どのようなときに、お使いになつていますか？」
- ④ 「座右の「もの」から、どのようなイメージをお持ちになりますか？」



伏見康治さん

名古屋大学・大阪大学名誉教授 日本学術会議会長／茅誠司部会

- ① です。
- ② 石の卵。中国旅行で、石の卵を買ってきた（以前はなかった。恐らくヨーロッパのイースターの卵を、石で作ったものなのねであろう）。西遊記によるソングクは石の卵から生れたことになっているから、中国の卵を持っていたらそのうち、猿猴が中から生れるかもしれない。
- ③ 物を考えようとする、石の卵を机上で廻します。
- ④ 元々は、なせ卵が立ち上がって廻るかを研究観察している間に、廻すくせがついたようです。

そもそも「逆立ちごま」に興味を持ったことに始まり、その後あらゆるものが逆立ちすることを知った。ゆで卵もたくさん廻して食べた。木製の卵を、先日東北に旅行した時、こけし作家に造ってもらった(家内の知恵)。



高見沢 宏さん

ダーク・ダックス 歌手/国際交流研究部会

- ① あります。
- ② 座右というより枕頭というべきかもしれませんが、三十数冊の本です。通して読むことのできないものや、辞典、図鑑類です。英・伊・仏・露の辞書、「KLEIN」の語源学辞典、原色陶器大辞典、単位の辞典、牧野植物図鑑等々、種々雑多。
- ③ もちろん、ベッドに入ってから眠くなるまで。
- ④ 持ち物、道具類にこだわる方ではないし、最近の道具は簡単すぎるか複雑すぎるかの両極端で、いつもそばに置きたいという愛着を感じるものがない。本もまた、道具にはちがいないかもしれないが、少くとも取り扱った書を読まなくてもすぐ使える。私にとって座右の『もの』即、座右の『書』ということになっってしまう。



尾関通允さん

著述業 自由学園講師/茅誠司部会

- ① 私流の解釈に従ってよければ、あります。
- ② 手帳。仕事に必要な情報を書き込んでいます。特に経済関係の出来事やデータなど。万年筆。ラジオ。仕事部屋、居間、寝室、どれか一つをつけっぱなし。ニュースを中心に。
- ③ 原稿を書くとき。話をするとき。自分自身でニュース感覚を失わぬようにするため。
- ④ 着実な生活。



村田 浩さん

日本原子力研究所顧問/茅誠司部会

- ① いくつか持っています。
- ② 古い万年筆(日本パイロット製) 木製の定規(ニュージーランド製) 紙切りバサミ(西独ゾーリンゲン製) いずれも日頃使い馴れたものですが、万年

筆は戦後間もなく購入した古いもので、これまでに何へんかパイロット本社に持って行って修理したものの、今ではインクの吸収がきかず、つけペン状態ですが、ペン先の具合が非常によくていまだに手離せません。

- ① 定規は長さ十二インチ、幅一・五インチ。センチ刻みでないため不便ですが、定規の部厚い腹のところ、ニュージーランドに産する樹木二十一種類のサンプルがはめ込まれていて、なかなかよい感じ。紙切りバサミは何の変哲もない双子印のものですが、二十何年前にボンで買ったもので、他にいくつもあるのにやはりこれを使うことになるのです。
- ③ 以上三つともライティング・ビューローの小棚に置いてあり、書きものをするときか、必要なスクラップを作るときなどに使います。
- ④ 使い馴れた文房具は自分の手によく馴染んでいて何よりも安心感があります。原稿を書くときなど、他の万年筆を使っている、どうもうまく書けないようなとき、この古い万年筆で書き直し始めると、何となくうまくまとまってしまう感じがあります。一種の自己暗示でしょうか。

また木製定規にはめ込まれたRIMUとかKAHIKATEAとかREWARERAとかいう樹木名を眺めていると、自然に恵まれた美しい国の深い森林のたたずまいが想い浮かべられます。

切れ味のよい紙切りバサミについては多言を要しないでしょう。他に何本か同じ双子印のハサミがあるのですが、どういうわけかこの古い少し錆びてきたハサミの味わいに勝るものはありません。



山城祥二さん

山城組組頭 筑波大学講師/国際交流研究部会

- ① はい。
- ② 白いシャープペンシル、消しゴム付(百五十円)と、四色ボールペン。
- ③ 普段、使っています。
- ④ これなら、いつなくなってもいい。



宮本千晴さん

近畿日本ツーリスト株日本観光文化研究所員/加藤秀俊部会

- ① はい、いくつか。
- ② 現在のところ、
① かなりくたびれたジョギングシューズ。
② 錠前を三個つけてもらって、入る量の調節幅をうんと大きくした、シオルダー兼手さげカバン。

③ オリジナルO M 2を中心とした撮影システムと、モノクロームの現象、プリント、超簡易製版システム。

④ タバコをはきむ切れこみのあるタイプの灰皿（うっかりしていても火が自動的に消えて安全）。

③ ① ジョギングシューズは、軽くて洗いやすいので、走るとき以外にも多用。むしろ、世間様に流されて陥りがちの、夜も昼もなく追いまくられる生活から、自主性のある生活を回復する意志を忘れるなという、自分のための銘。いってみれば指に糸を結んでおくようなもの。

② カバンは、やらねばならない仕事や、読まねばならない本をずらすと持ち歩く装置。「やるべし」という心掛けと、「いやだ」という本音の、合理的計画的な解決が得られない場合に用い、状況を歴史にゆだねる働きを持つ。それなりに有効。

③ 撮影・プリントシステムは、本づくりを進めていく上で、納得のいく質を維持したいときや、若いカメラマンを教育するとき、体制からあふれたフィールド・サイエンティストの基礎訓練のとき、あるいは自費出版などに用いる。しばしば、世間の仕事のシステムが粗っぽすぎて生ずる隙間を自分のリスクでノウハウを見つけ、埋めたくする必要上できあがったもの。

④ 安定した内容とリズムを持った日常。まだ人間がもの主である世界。たとえば少し極端だけれど次のような情景——身につけただけの、しかも確実に身を守ってくれる衣類。体温で乾かすために湿った靴下をふとところに抱かえてもぐりこんでいる寝袋。雪温を完全に遮断してくれる一枚の毛皮。青い安定した

炎を吐き出し続けている小さなガソリンストーブと、湯気をあげているたった一つの鍋。コーヒーの入ったホーローのコップ。それに一枚の地図。

ここにはものへの信頼とコントロールがあり、人は満足の限界をこころえています。しかし、すでにそこに無いものへの、もっと良いものへの終らない渴望の芽があります。

恐いのは、ものにせよ、経済や制度にせよ、文化にせよ、ちょうど寄生生物のように独自の価値基準と進化の論理を持っていることで、すでに「座右のもの」というイメージも幻想に近くなっています。人間が自ら作り出したそれらとの生態系のバランスやコントロールの方法を見つけるには、まだまだ膨大な試行錯誤が必要なのでしょう。自らの生存そのものをおびやかされながら。



木元教子さん

放送キャスター／茅誠司部会

- ① はい。持っております。
- ② ① 漢和辞典
- ② 現代用語の基礎知識
- ③ 模範六法
- ③ ① は、字を忘れたり、確信がなかったり、不安な時。② は、わからない言葉にぶつかった時。③ は、現在、法学部の学生です。

何かと……。

④ 私のナレッジ・バンク。助っ人。やっぱり必需品ですね。座右にないと困りますから。



中村 貢さん

朝日イブニングニュース社代表取締役社長／茅誠司部会 大来佐武郎部会

- ① あります。
- ② 二冊の本です。ひとつは加瀬俊一著「世界と日本」、もうひとつはJ・H・ジャクソン著「戦後の世界」。

前者は、戦後まもなく加瀬さんが母校一橋大学でなさった講義を追補して角川新書に入られたもの。戦中から戦後の冷戦にいたる国際関係を総合的に叙述したものとしては、まことに珍しく、私が国連軍記者として朝鮮戦争に従軍して以来、座右に離せぬ著となっています。

後者は、その後のワシントン特派員の時代に、ニューヨーク・タイムスのレストン記者からすすめられたもので、これも戦後世界の原点を分析した啓蒙書です。原書はだれかに持っていかれたので、いまでは町野武、渡辺敏（いずれも友人です）のみです。版訳書を座右に置いています。

③ 日本人が最も知らなかった、知らされなかったのは、第二次大戦中と戦後初期の国際

情勢だったと思います。ヤルタ会談やポツダム会談での軽率な取り引きや、戦後秩序となった国連つくりあげにからむ米ソの醜いやりくち、国際通貨体制をねりあげるためのホワイト（米）とケインズ（英）のせめぎあいなど、われわれは毎日の新聞による生活実感としてではなく、このような書物で、それもずっと後になってからでなければ知らされなかったわけです。

したがって、戦後の日本人は国連を美化しすぎて幻滅を感じたり、社会主義圏を現実的に視る訓練に欠けていたと思います。国際問題を考えたり、話したり、書いたりせねばならぬとき、私はいつもボロボロになったこの二冊を、バラバラとめくることにしています。「国際問題との初体験」の、原点の書物だったからです。



稲葉秀二さん

財産業研究所理事長 経済評論家／茅誠司部会

- ① 持っています。
 - ② ① 今ここ。
 - ② なるようにしかならない。
- これは小生が亡き父から授かったものです。しかしこれを活用するようになったのは、三十五才以降です。

③ 自分が精神的に困った時、矛盾を感じたとき、行動をどうするかを感じたときよく使います。

④ これはよくいう「人事を尽くして天命を待つ」といったしかつめらしいものではありません。私自身「ここがかんばろうか」そして「忍耐してじっとしていようか」このようなときに使い分けています。



高平哲郎さん

フリーライター／国際交流研究部会

- ① ショルダー・バッグです。五年間、毎日使って傷んできたので、今年の三月から、また新しく同じバッグを買い求め、また四、五年は使用する予定でおります。
- ② 毎日の仕事、旅、とにかく外に出るときはいつも使っています。
- ③ 万年筆、ライター、パイプといった愛蔵品みたいなものを、まずイメージしてしまいます。それも、何点もでなく、これ一点といった感じの、その人の歴史を感じさせるものです。でも、ぼくにとっては、そうしたもので、ロング・ピースとウイスキーといった、常に近いところがないと不安になってしまうものの方が似合っている気がします。



村上兵衛さん

作家／松本重治部会 国際交流研究部会

- ① 持っている。
- ② 書見用のスタンド。灰皿。ペン、鉛筆、鉄などを突っ込んでおく筒。鉛筆削り（手動）。文鎮。手筐。スクラップをほうり込むボール箱。屑籠。
- ③ 仕事をしたり、本を読んだり、手紙を書いたりするときに、要するに日々の用に。
- ④ いつも使っているもの。手で絶えず触っているもの。馴染んでいるもの。それがないと不便で落ち着かないもの。



米山俊直さん

京都大学教養学部教授／加藤秀俊部会

- ① 机の上に、ニッケル・メッキをした古い蹄鉄があります。
- ② 馬術部の学生が、古いすりへった蹄鉄を

メッキしてもらってきたものです。少しカンパをしたおぼえがあります。十年ほど前でしうか。

③ 文鎮の役目を果しています。

④ すりへった、形の悪い蹄鉄ですが、かつて、馬の足に打たれて歩きつづけていたことを思います。



木田 宏さん

国立教育研究所所長／大来佐武部部会

- ① びったりしているかどうかは別として、いろいろ思いつきます。
- ② 各種の辞書。挨拶状の裏。日程表。秘書健康法。
- ③ それぞれご想像の通りです。挨拶状の裏というのはメモ用で、特に、講演するときの筋書きや心覚えにしています。
- ④ 「座右の銘」ではない「もの」では、なかなか、これというのが浮びません。



青空うれしさん

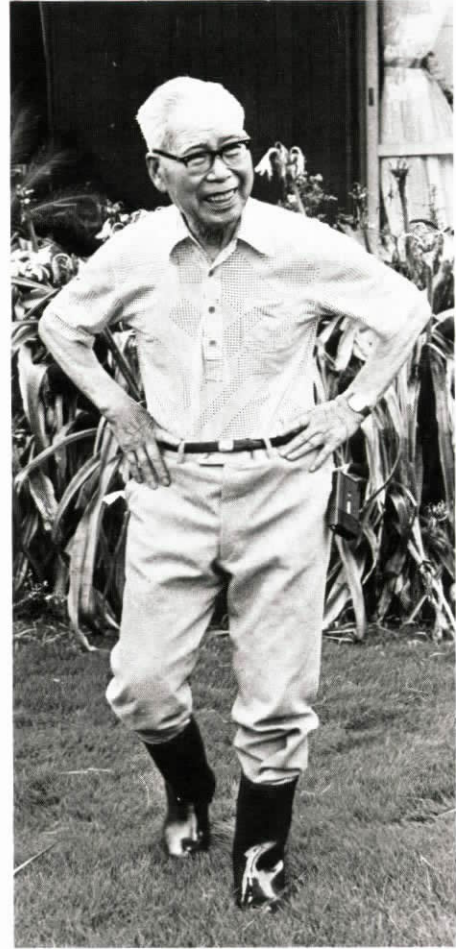
テレビタレント／加藤芳郎部会

- ① ハイ。
- ② 一メートル十五センチの木刀。馬庭念流二十六世樋口昇氏より貰い受けたもの。
- ③ 気分のすぐれぬ時、一振りするとスッキリします。
- ④ こんな木の刀を手にしただけで気分転換に？それにしても何か頼るといえるのは、人間で弱いものだなあと思っています。

おじやま
します

茅 誠司 さん

東京大学名誉教授・日本学士院会員 茅誠司 部会



辻堂の駅から車で十分ほどの丘の上に、茅誠司先生が週末を過ごしされるお宅があります。畑に囲まれた広い家、緑深い芝生の庭、トマトやナスの自家農園。夏のある日曜日、奥様やお孫さんと一緒にくつろがれる茅先生に楽しいお話を聞かせていただきました。

バラのためを考
えて選んだ家

——とてもすてきなお宅ですね。
茅 ここはさつまいも畑だったんですよ。十九年前、東大をやめる直前に秘書の紹介でここを見に来たとき、こいつはいい、と思った。牛糞のおいがしたからです。バラには牛糞がいつとういんですよ。今でも春と秋に、トラック一台分の牛糞を入れてやる。東京では乾いたものを売っていますが、ここで

はまだまだ自然のものが手に入りますからね。バラのためを考えて、ここを選んだようなもんだな。

そして、裏には故郷の厚木の山が見える。遠くには昔馴染の海が見える。あそこに大きな岩が見えるでしょう。烏帽子岩っていつて四キロくらい沖にあるんですが、小さい頃はあの岩まで遠泳をしたもんですよ。カップ泳ぎってやつですがね。

奥様 はじめは、お魚釣ができるから川のそばに住みたい、と言っておりましてんですよ。

弁当はいつも鮎
ばかり

——茅先生は、釣がたいへんお好きだとうかがいましたか。

茅 昔は、兄といっしょによく釣をしたも

のです。家のすぐ下を、相模川の支流の中津川が流れていたんですが、鮎がたくさんとれてね。中学校の頃は、弁当のおかずが鮎だった。父も魚を釣るのが非常に好きで、とつた鮎を乾かして甘露煮にして弁当に入れてくれるんですが、いつも鮎ばかり。何か他のおかずはないもんな、と言うと、ぜいたく言うなって。それほどあの辺はとれたんですね。戦後十年くらいは、私でも一日で二十から三十匹は必ずとれましたね。

奥様 それを竹くしに刺して、茅が焼いてくれるんですよ。火鉢に炭火をおこして、まわりを新聞紙でぐるっと囲ってね。私も、一度に七匹くらい食べましたわ。ですから鮎っていうお魚は、そのくらい食べるものだと思っ

孫には甘くてむ
ちやくちや

——夏休みや週末は、どのように過ごしていらつしやいますか。

茅 夏休みは、軽井沢の三男（整三氏、本田技研勤務）の別荘で過ごします。一週間くらいかな。週末は、この辻堂の家で庭の手入れをしたり孫と遊んだり……。

孫は全部で九人います。長女のところが男一人、次女は男二人、長男が女二人、次男が女二人、そして三男のところが男二人。それぞれは、男だけ、女だけと片寄っているんで

すが、みんなそろくと五人と四人でバランスがとれている。一番大きい孫が二十七才、一番小さい孫が六才です。

奥様 孫には甘くて、もう、むちやくちや(笑い)。

茅 東京では長男(陽一氏、東京大学工学部教授)と一緒に住んでいます。この辻堂の家には、次男(幸二氏、慶応大学理工学部教授)の一家が週末にそろってやってきて庭の芝を刈ってくれるんです。今日も、孫の洋子と明子を連れて、北鎌倉から訪ねてきてくれました。

庭の手入れは 自分の責任

——畑のほうはいかがですか。

茅 今年はいいかと思つたら、トマトがあまりよくないですね。

奥様 ここに来ると、いっとう最初にトマトにトマトンという薬をつけに行くんですよ。**茅** 実を必ずつけるように、花にかける薬なんです。トマトは五十本くらいあるので、なりはじめたらとても食べきれない。あまり畑仕事をやると体にひびくので、今年は何に植えてもらったところ、思うようにいきませんでした。昔は自分で一生懸命やったんですかね。

庭の花は、自分で手を入れなくてはだめなんです。ここ何十年は、庭の草を取るのも、

花を植えるのも、私の責任。バラも始終手入れをしてやらなくてはいけないんですが、ちよつとこれないでいたら黒点病にかかつてしまつて……。

奥様 バラは、誰にも触れさせなかつたんですよ。枝を切るのもかわいそうで、せんでいもできないんです。花のきれいなうちに切つて部屋に飾るなんてことは、考えてもいませんね。

茅 やっぱり、自然のままが一番幸せです。

巨人が負けると 寝心地が悪い

——一番楽しいのはどんな時でいらつしやいますか。

茅 寝ている時(笑い)。いっとういけないのは、ジャイアンツが負けている時。その後の寝ごちが悪くていけない。

奥様 このあいだ、明け方にムクツと起き上がつて、「医者に診てもらわなきゃ」つて言うんです。そうしたら夢だったの(笑い)。ちよつと、ジャイアンツが三連敗だか四連敗しているときでした。そのかわり、勝つとききげんなんですよ。

茅 原なんか打つところを見ると、あいつ、あんな球を見落として何を考えているんだつて……。(バットを振る真似)。

以前、コミッシヨナーになつてくれつて頼まれたことがあるんだけど、とんでもない

いざいざ
勝負は
私達よ



伊登子夫人と

つて断わつた。そのときは大浜信泉さんがなられて、僕は、コミッシヨナー顧問という名をつけられた。今でも、コミッシヨナーのところから招待券がくるんです。このごろはあまり見に行かなくなりましたけれども。

奥様 野球が始まつたら、テレビ占領、ラジオ占領(笑い)。お風呂まで持ち込むんですから、ほんとうに好きですね。

ジャイアンツの勝敗に一喜一憂、今年で八十三才とは思えないあいかわらず若若しい茅先生でした。さて、今年のベナントの行方は……。

〈松葉千恵美〉



●マンガ王国総理大臣●

鈴木義司さん

漫画家・漫画集団所属 加藤芳郎部会

昭和七年に横山隆一、杉浦幸雄、故近藤日出造さんらが漫画集団を結成して、今年で五十年になる。

現在、団員は九十八名となり、五十周年記念行事のひとつとして、信州白馬村に『マンガ王国』を建設した。

ところが王国の総理大臣を選ぶだんになつて『日本の総理が鈴木さんだから、マンガ王国も鈴木がいい。全員サンセイ』となつてしまった。

急に任命されたこのパロディ総理、王国の開国前から忙しいことヒイヒイである。

る。

新聞、ラジオ、テレビと取材攻勢。電話は一日中なりっぱなしの日が続いた。

七月二十二日、ついに開国。国鉄の臨時列車『マンガ王国号』に乗って、車内イベントやら、式典やらハレードやら。

それで八月十四日の開国までのあいだに、現地へ三回でかけた。

現地ではサイン会、マンガガカルチャー教室といったイベント。

ふだんでもぎっしりつまつたスケジュールで仕事をしているので、白馬へでか

ける前は超過密スケジュール。接着剤で机にくっついたような毎日。

そのあいだにも『24時間テレビ』の出演などあつてダウン寸前。寸前というより、夜中に医者を呼んだりしたんだからダウンのほうが正しいかもしれない。

白馬は大自然にかこまれて空気もきれいだけど、仕事でいってるとなると、どうしても夏休み気分にはなれない。

八月十四日マンガ王国のイベントが終つて、やれやれこれでホントの夏休みがとれるゾと喜んだ。

さてどこへ出かけようか、一週間ぐらいいゆっくりと静養して自分の時間を取りもどそうと考へた。そして出かける場所が決まつた。

一週間、虎の門病院の人間ドックである。



●トコトン動き回る…●

青空うれしさん

テレビタレント 加藤芳郎部会

この原稿が活字になる頃にはすでに終わつてしまふのだが、七月二十六日に国立演芸場でボクの二門の会がある。毎年八月の十一月で五回目行なうミニリサイタルとは別で、弟子のヒッチ・ハイク、

きんし・きんし、遊歩にゲストのすどう・かつみ、早野凡平、柳亭小痴楽らが出てワツと一晩騒ぐのだが、ボクは一寸ひねくれているので、いつもTV、ラジオ、新聞、雑誌等の関係者は一人も招待しな

いし、プロダクション関係の人も呼ばない。だから、一諸にこの目出る仲間以外は知らない。ホスターもパンフレットも刷つた事がないが、不思議にいつも客席は一杯で、ゲストの人が「何でこんなに入つてるの？」と呆れる。電話だけで、「いいよオレ百枚」ってな具合に、買ってくれる人が多いので、切符を売るのは楽だが、そのかわり、毎回来る人も半分以下だから、演し物をかえるのに大変。バ



●女房が皮肉る会長役●

伏見康治さん

名古屋大学・大阪大学名誉教授／日本学術会議会長 茅誠司部会

ントマイム、落語、浪曲、小唄と、次々に自分の持ち芸以外の物を披露して来たが、今回は時節柄、講談で四谷怪談のうち『お岩様誕生』という珍らしいものを口演する事にして、いま特訓中である。といって、別に命がけでやる程の事もないので、相変らず野球好きのボクは後楽園に西武球場に繁しく通っているし、自らも年を考えずに、未だ白球を追っ

る。駒大の後輩が、全国の社会人野球の代表となって七月末から後楽園で都市対抗に出て来ると、差し入れに、飲み食いに、フーフー言いながらつき合う。そして、その合間に有名人の墓を追いかけてカメラに収めているのだから、本職の仕事はいつしているのかと、自分でもときどき首をひねる時がある。ボクはいつも自分で忙がしくしてしまうので、チツ

トモ家に落着いていない。家は寝に帰るだけで、早起きのボクは早朝から飛び歩いてしまう。実際、こんな人の女房になったのが不幸と、ウチのは思っている事だろう。ボクの近況報告が、家で読書をしたり、女房と子供の事を語ったりというようになったら、いよいよ死期が近づいたと思っしてほしい。

日本学術会議の会長というものは大変

ある。

な高給を食んでいる、という誤解が世間にあるらしく、ときどき、「○○君を励ます会」とかに招待状が来て、会費二万円を求められたりする。秘書さんの役目の一つは、こういう押し売りを実に丁寧に断ることにある。会長は、役人側が正當な日本学術会議の用件で出勤したと認めただきだけ、日当を払ってくれるだけである。アルバイト学生のようなものである。にもかかわらず、規制ばかり強くて割りに合わない。たとえば、二週間以上にわたって外国旅行をする場合には、あらかじめ閣議了解を得る必要があるの

で、無職なのは貴方だけよと言う。稼いでこないことを暗に皮肉っているのだが、会員のほとんどが有職であり、何らかの意味で現役の科学者であることが、学術会議の一つの特長なのであるから、無職というのは規則違反であるかも知れない。そのサラリーをもらってない会長役が、むやみに忙しい。一つは冠婚葬祭、は少し言い過ぎだが、少なくとも葬祭がなかなか忙しいのである。最近の例を、手帳を繰ってみると（葬の方は遠慮して）

五月二十九日 高分子学会三十周年記念式
五月二十三日 国際皮膚科学会
五月二十日 日本小児歯科学会二十周年（これも代理）
五月十日 国際測地学会
エトセトラ。エトセトラ。
そして、その多くは祝辞を述べなければならぬ。大昔は八宗兼学の碩学もいたらしいけれども、これだけ専門分化が進んだらもうその学会で、何か気のきいたことを言わなければならないとすると、これはまあ大変な仕事なのである。

私の近況 私の近況 ●

●FORUMS●

FORUM

文化の翻訳

青木保／東京大学
出版会

本書の刊行は一九七八年六月で新刊ではない。東大出版会のUP選書の一冊であるので、今迄書店で何度も目にしている筈であるが、今年まで手にする機会がなく、一読して衝撃を受け再読、三読した。同じ著者のタイでの修道体験記である『タイの僧院にて』が中公文庫に入ったのを読み、興味深く思ったのが本書を買ったきっかけであるが、本書も文化人類学者である著者のタイでの体験を基礎に、異文化理解とは何であるかを単に理論としてでなく一人の人間の外界認識の問題として追求しようとする試みであり、およそ異文化との接触なしには済まされない日本の現在のわれわれに、深い自己検討を迫る著書である。日本は外来の文化に触発され続けて来たが、

二十一世紀の日本は受動的に本土で外国文化を吸収するのでは済まされない。日本の産物が外国で摩擦を起すのみではなく、鈴木孝夫氏の説くように、世界の日本化といえるような文化的インパクトを国外に与えつつある。日本の欧米文化の摂取法はそれなりに有効であって近代化に成功したことは国外でも認められつつあるが、今後の国際関係でわれわれの外国理解はこれではよいのかという反省が痛感されるのが、目下の貿易摩擦の齟齬す所である。

青木氏は一体異言語を翻訳することが可能であるかという点を通じて、異文化理解の問題を追求して行く。欧米文化の吸収に際しての先人の苦心と、外国語理解の困難を体験せ

ずに訳語を自国語として受取る人に得られぬ部分、歪みについては柳文章氏の一連の著作に教えられる所が多いが、本書は正に常に醒めたまま異文化に同化しなければ理解の途に入れぬという矛盾の問題を、マリノウスキーからエヴァンス・プリチャードに至る西欧学者の苦悩と共感しながら考えている。最近E・プリチャードの『ヌーア族の宗教』の邦訳が岩波書店から刊行されたが、本書はこの基本書の手引きとしても有効で、非常に啓示的であった。

松原秀一 慶応義塾大学文学部教授／国際交流研究部会

吉原幸子
全詩

吉原幸子／思潮社



吉原幸子さんに始めてお会いしたのは歷程のパーティーであった。

宴たけなわの頃、彼女は伴奏もなく一人でマイクをにぎり、かつて笠置シズ子に歌った「ジャンゲルウギ」をほげしく歌った。

青白い面長の、目のするどい彼女が細い身体をしながら歌う姿は、さながらジャンゲルの雌豹のようであった。

そのあと彼女の作品と接するようになった。一作、一作すべて珠玉であった。

「風吹いてゐる
木 立ってゐる
ああ こんなよる 立っているのね 木」
谷川俊太郎さんはこの詩に対して「立って

いるのね、という女言葉の優しさと痛切は、おそらく千万言を費しても言いかえのきくものではあるまい。他のものやひととの間のなくすことのできない距離、それが吉原さんの抒情の源ではないのか、どんなになまましい心理を歌ってもむしろ歌うことで作られる距離に吉原さんは救いを見出しているとも思える」と書かれている。

私は何曲か吉原さんの歌を歌った。「日没」「祈り」「うらみうた」皆深く心に喰いこんでくる歌である。

世の中の人々のようにごまかしてその日その日を送るといふ事は彼女にはできないようだ。お酒を飲みはじめると食べものには手を

つけずますます青白く、目をすえて飲む。私はこの人の前でいつもたじろいでいた。最近、母上と兄上をつづけて亡された。あの詩の会で、

「母とわたしと幼ない二人と
うどんをたべてた 遠い秋
うすい煙よ 消えないでくれ
いつまでもあのときのぬれ縁に

背なかまるめて 日向ぼっこしておくれ
なつかしい人のかげ」(「疎開の秋」より)
うっすらと涙をうかべてこの詩を読まれたとき私は彼女の優しさに強く胸を打たれた。

石井好子 歌手／国際交流研究部会

第5回国際交流研究部会

昭和57年7月26日



部会報告

FORUMS FORUM

音と言葉、この二つの機能が左右の脳それぞれ一方に片寄っていることが、最近の研究で明らかになってきた。

今回は、『日本人の脳』『右脳と左脳』の著者である東京医科歯科大学難治疾患研究所教授、角田忠信氏に、「言葉と音——脳の機能と文化の異質性」と題して講演をしていただいた。

私たちの二つの脳は、音楽に秀でた右の音楽脳と、左の言語脳に分けることができる。そして西欧人と日本人では、この二つの脳の分担が異なっている。西欧人が言語脳で処理する音は言語音に限られ、音楽脳では、楽器

の音や自然界の音などを分担する。それに対して、日本人は、言語脳では言語音に加えて、邦楽器音、動物の鳴声、風や雨の音を優位に処理し、音楽脳優位の音は、西洋楽器音や無機質な音に限られる。そしてこの形は、十才までの言語環境によって左右される。

なお、今回の出席者は、ダーク・ダックス（遠山一、喜早哲、佐々木行、高見沢宏）、石井好子、佐賀和光、三村忠良、村上兵衛、（敬称略）でした。

第8回加藤秀俊部会

昭和57年6月11日



部会報告

FORUMS FORUM

「農家はネコの目のように変わる農政によって、農業にかける懸命な努力も情熱もないがしろにされ、新たな苦行を強いられている。ふるさと、というべき日本の農村は、そうやって破壊され始めている。」（『日本の米』より）

日本の村の将来を考えるうえで、一番重要なヒントである米について、『日本の米——産地からの報告』の著者である朝日新聞記者、降幡賢一氏を報告者に招き、「米について」と題して会を進めた。

一年半にわたって朝日新聞秋田支局に勤務し、昭和五十五年の冷害や大潟村の現実を見

てきた降幡氏は、多収穫で政府が高く買ってくれる米がどのような形で農村の中に広がっていくのか、市場操作と農政の問題が今の食糧制度の中でどの様に動いているかを報告する。そして、日本人の主食である米の多くを作り続けてきた東北の農民の実態を、消費者側、都市の側にも理解してほしいと訴えた。

なお今回の出席者は、加藤秀俊、神崎宣武、佐々木高明、舛田忠雄、宮田登、宮本千晴、（敬称略）でした。

米について

やや気障な言い方をすれば、僕は東北での一年半を、ある一枚の写真にこだわりの続けながら過ごして来たような気がする。花巻農学校付近の農場を、コートに身を包んで、ややうつむき加減に歩いている、宮沢賢治のあの有名なモノクロ写真である。

コートを着ているのだから、無論真夏の写真であろうはずはない。しかし、この農場での賢治の姿は、僕にとつてはどいうしても、「寒さの夏」は東北農民の哀しさを背中いっぱい負ってオロオロ歩く、あの有名な詩の中の賢治であり、どうにもならない過酷な現実にあえぎ続けて来たこの地域の人々の生きざまの象徴なのだ。それが僕の中では奇妙な合成写真になってしまった。

『日本の米——産地からの報告』というつたない本を書くために、東北の村々を歩いた日々、僕は何人かの「賢治」に会った。ある時は技術者であり、ある時は農民自身だった。僕はそこで、東北の過酷な条件を克服して米づくりに専念して来た農民たちが、今また新たな「寒さの季節」を、農政から、そして日本のこの社会全体から、強いられ続けていることを知った。所詮僕は農村の側にとつてみれば、都会の側から出張して行ったルポライターに過ぎぬ。しかし彼らは、その人生の重みの全部をかけて、常に僕の心

にズシンと響く言葉で語りかけてくれた。以下はその報告の要約である。

誤解を避けるために言っておかなければならないのは、冬期数メートルにもなる雪に閉ざされるこの地域の人たちこそ日本人の主食である米の多くを作り続けて来た人たちである、ということである。農民の努力は常に米づくりに向けられ、米づくり以外に、その過酷な自然条件からいって、そう簡単には切り替えがきかない農村地帯。それは、米だけでは決して、他の作目でも、かなりな成功が容易に望める日本の西南の農村社会とは、決定的に異っているということである。

東北農民が強いられる「寒さの季節」の第一は、言うまでもなく、四十五年ごろから始まった米の減反政策である。第二次大戦直後、日本全体が文字通り飢えた時代から、東北農民は日本人の食糧を「自立」させるといふ政府の方針に沿って米の増産を図った。無論それは農民自身の利益にもつながったから、農民も、技術者も、東北の農業にかかわる人々の最大の関心事は、与えられた狭い耕地と、厳しい自然条件の中で、いかに多くを生産し、いかに売れる米を作るかであった。しかしその努力は、米が逆に余り始めるという新たな条件の下で、大きな危機を迎える。

続けて来た農政が、ある日突然つくるなと言いつし、言う通りにしなければ、土地をとりあげるぞと農民を脅しにかかったのが減反政策だった。それは、この政策が始まって十数年を経た今も、農村の中に深い傷跡を残している。と言うより、農村はそれによって決定的なダメージを受けて、砂山がボロボロと崩れるように、少しずつ崩壊を始めているのだ。

その典型例を、僕は戦後、日本で第二の湖、八郎潟を干拓して出来上がった新しい村、秋田県大潟村にみる。食糧、その当時は当然米を増産する目的で、東京の山手線の外周より、ひと回り大きな耕地をもつて出来上がったこの村は、開村と同時にその減反政策の洗礼を受けた。全国各地から、米づくりの専門家を目指して集まって来た農家の後継者や、新しい農業のあり方に将来をかけた若者たちは、一戸当たり十五ヘクタールという、日本の農家の平均耕地面積をはるかに凌駕する広大な農地で米づくりを続けることが、従来日本の農家を根本から建て直すことになると信じ込まされて来た。農村の貧しさは、まず、その営農規模の小ささに起因する。大規模経営で、しかも機械化による省力化を進めれば、農家は過酷な労働条件からも解放され、都市生活者並みか、それ以上の余裕ある「文化的生活」が出来る。そのお手本になる

降幡賢一

朝日新聞記者

第8回加藤秀俊部会報告



のが、この国営の新しい村、大潟村の将来である、はずであった。

しかし、そうした甘い夢は、減反政策によって見事に裏切られてしまう。米づくりに全力をあげることは許されなくなってしまう。そればかりか、村の農民は最初から意にそわない畑作を強制された。「青刈り騒動」という、農政との確執が何年か続いた。しかし、農民の側の抵抗は、国権の前にあえなく崩れ、むしろ村は、減反政策に反抗するところいうことになる、という全国の農村への「みせしめ」に使われてしまった。

同時に国は、そうした農民の不満を抑えるために、例えば転作奨励金とか、土地改良事業とかいった名目で、農村に札束をばらまいて来た。金を農村にばらまく政治こそが、まるで農政であるかのようである。農民はその補助金の多寡によって、どんな作目を、どのくらい作るかを決める。そうではなくて、自分の創意工夫で好きな作目を作り続けていたら、結局損をして、生活が成り立たなくなってしまうだろう。農民の生活から、その動作のひとつひとつにまで、がっちり食い込んで来た農政に、農民はがんじがらめにされているのだ。そうした農政の失敗例を僕は新潟村に、そして米づくりを農業とその生活の基本に据えて来た東北農村全体に見る思いであった。

「寒さの季節」の第二は、農家の兼業化と機械化の問題だった。先日の米価審議会での農民との対話集会で、田沢農水相はこの問題に触れ、「ネクタイを締めながら片手間で出来る米づくりは、真面目に農業に取り組んでいる専業農民を愚弄するものだ」という主旨の発言で大見得を切った。農業所得だけで生計を立てている農家は、いま全国の農家の中でたった一割強である。こういう農家こそ今後育成していくべきであり、片手間で米を作っている兼業農家は、日本農業にとって、かつての不労地主と同じなのだ、という論理かも知れない。そうした論理を、国の農業政策をあずかる農水相が平気で、しかも農民を相手にして言い切るところに、実はいまの日本農政のどうにもならないところがある。そうではなくて、兼業農家というのは、一家総出で労働につくことでやつと生活を支えている、追いつめられた零細農家の形態なのだ、ということを僕は東北の農村で教えられた。端的に言えば、専業農家は東北農村のような米づくり地帯に行くほど低いという現実がそれを物語っている。それは最初、米収入では足りない部分を冬期の外働きて補おうとした「出稼ぎ」から始まった。次いで米づくりの大変な労苦から解放される手段として、米づくりが大幅に機械化されたことから、農民は逆に

その借金に追いまわられて兼業に追いやられた。農村でも就業の機会が増えたこともある。機械化によって確かに時間的余裕が出来たこともある。そしてその結果農家所得はこのところ急速に高まった。だが、もし農業だけでもう一度生活してみろというなら、米の値段がいまの何倍になっても足りないだろう。そして兼業農家が、他産業で働いて得る収入は、都市生活者が得る収入と比べれば、決して高くないのである。

いま、農家はあの減反政策をはじめとして、都会の側、農政担当者までを含む都市住民からの一斉攻撃を受け続けている。兼業が悪いとか、専業でなければ、「農家」ではないとか、「中核農家」でなければ農業の将来を荷い得ないとか。しかしそうした画一的で、無機質的な論理と、それを基本とする農政は、本当は日本の農業の根幹を支えている「兼業農家」をバツサリ切り捨ててしまっただけではなくて、穀物自給率三〇パーセントという日本のいまのおどましい現実を考えれば、国民全体を将来とんでもない「落日穴」に導く結果になりはしないかと僕は考える。農民は「寒さの夏」をオロオロと歩き続けているのである。

FORUMS

FORUM

21世紀フォーラム／部会メンバー

発起人

- 内田 忠夫 東京大学教養学部教授
- 加藤 秀俊 学習院大学法学部教授
- 加藤 芳郎 漫画家協会理事
- 茅 誠司 東京大学名誉教授 日本学士院会員
- 小松 左京 作家
- 東畑 精一 東京大学名誉教授 (財)政策科学研究所顧問
- 中山伊知郎 (故人)
- 松本 重治 (財)国際文化会館理事長
- 向坊 隆 原子力委員会委員長代理 前東京大学総長

加藤秀俊部会 テーマ日本の村の将来

- 加藤 秀俊 学習院大学法学部教授
- 川喜田二郎 筑波大学教授
- 神崎 宣武 近畿日本ツーリスト(株) 日本観光文化研究所事務局長
- 佐々木高明 国立民族学博物館教授
- 舛田 忠雄 山形大学教授
- 宮田 登 筑波大学助教授
- 宮本 千晴 近畿日本ツーリスト(株) 日本観光文化研究所所員
- 米山 俊直 京都大学教養学部教授

加藤芳郎部会 テーマ日本のサイバイバル

- 加藤 芳郎 漫画家 漫画家協会理事
- 青空うれし テレビタレント
- 青空はるお テレビタレント
- 天地 総子 歌手 タレント
- 大山のぶ代 俳優
- 大和田 獏 俳優

岡江久美子 俳優

- 加治 章 NHKアナウンサー
- 川野 一宇 NHKアナウンサー
- 久米 昭二 NHKディレクター
- 黒川 和哉 NHKディレクター
- 小島 功 漫画家
- 砂川 啓介 俳優
- 鈴木 義司 漫画家 漫画集団所属
- 植 ふみ 俳優
- 坪内ミキ子 俳優
- 富田 純孝 NHKディレクター
- 中田 喜子 俳優
- 暮目 良 俳優
- 松平 定知 NHKアナウンサー
- 水沢 アキ 俳優
- 三橋 達也 俳優
- ロミ 山田 歌手 俳優
- 渡辺 文雄 俳優

茅 誠司部会 テーマ明日のエネルギー

- 茅 誠司 東京大学名誉教授 日本学士院会員
- 有澤 廣巳 東京大学名誉教授 (社)日本原子力産業会議会長 日本学士院院長
- 生田 豊朗 (財)日本エネルギー経済研究所所長
- 稲葉 秀三 (財)産業研究所理事長 経済評論家
- 内田 忠夫 東京大学教養学部教授
- 大島 恵一 (財)工業開発研究所所長
- 岡村 和夫 NHK解説委員
- 尾関 通允 著述業 自由学園講師
- 金森 久雄 (社)日本経済研究センター理事長
- 木元 教子 放送キャスター

五代利矢子 評論家

- 斎藤 志郎 日本経済新聞社アジア総局長
- 三枝佐枝子 評論家 商品科学研究所所長
- 高原須美子 評論家
- 富舘 孝夫 (財)日本エネルギー経済研究所研究部長
- 中村 貢 朝日イブニングニューズ社代表取締役社長
- 永井陽之助 東京工業大学教授
- 橋口 收 公正取引委員会委員長
- 梁海 博明 慶応義塾大学経済学部教授
- 伏見 康治 名古屋大学・大阪大学名誉教授 日本学術会議会長
- 松根 宗一 大同特殊鋼相談役 (社)経済団体連合会常任理事
- 村田 浩 日本原子力研究所顧問

小松左京部会 テーマ大正文化研究

- 小松 左京 作家
- 河合 秀和 学習院大学法学部教授
- 中村 隆英 東京大学教養学部教授

大来佐武郎部会 テーマ世界の日本の

- 大来佐武郎 内外政策研究会会長 外務省顧問 国際大学学長
- 江藤 淳 評論家 東京工業大学工学部教授
- 河合 三良 (財)国際開発センター理事長
- 北原 秀雄 前駐仏大使 (株)西武百貨店顧問
- 木田 宏 国立教育研究所所長

小林陽太郎 富士ゼロックス(株)社長

- 篠原三代平 成蹊大学経済学部教授
- 滝田 実 アジア社会問題研究所理事長
- 堤 清二 (株)西武百貨店会長 (株)西友ストア社長
- 中根 千枝 東京大学教授 国際人類学民族学会副会長
- 中村 貢 朝日イブニングニューズ社代表取締役社長
- 林 雄二郎 (財)未来工学研究所副理事長
- 松山 幸雄 朝日新聞社論説委員
- ロベール・J・パロン 上智大学比較文化学科教授

松本重治部会 テーマ二十一世紀における日本人の生き方

- 松本 重治 (財)国際文化会館理事長
- 川喜田二郎 筑波大学教授
- 永井 道雄 朝日新聞社社員論説委員
- 中村 元 東方学院院長 東方大学名誉教授
- 本間 長世 東京大学教養学部教授
- 前田 陽一 (財)国際文化会館専務理事 東京大学名誉教授
- 横 文彦 東京大学工学部教授
- 武者小路公秀 国連大学プログラム担当学長
- 村上 兵衛 作家
- 柳瀬 睦男 上智大学学長

国際交流研究部会

- 遠山 一 ダーク・ダックス 歌手
- 喜早 哲 ダーク・ダックス 歌手

佐々木 行 ダーク・ダックス 歌手

- 高見沢 宏 ダーク・ダックス 歌手
- 石井 好子 歌手
- 小林 道夫 チェンパロ奏者
- 佐賀 和光 建築家
- 佐々木信也 スポーツ・キャスター
- 千 宗室 裏千家家元
- 高平 哲郎 フリーライター
- 堤 清二 (株)西武百貨店会長 (株)西友ストア社長
- 富田 勲 シンセサイザー作曲・演奏家
- 服部 克久 作・編曲家
- 松原 秀一 慶応義塾大学文学部教授
- 三村 忠良 日本国有鉄道資材局計画課長
- ミルトン・L・ラドミルビッチ アメリカ公立アメリカンスクールビジネスマネージャー
- 村上 兵衛 作家
- 山城 祥二 山城組組頭 筑波大学講師
- 吉川 光 NHK整理部担当部長

事務局

- 笠井 章弘 (財)政策科学研究所理事
- 生田 豊朗 (財)日本エネルギー経済研究所所長
- 依田 直 東京電力(株)取締役企画部長
- 山田 嗣 (財)政策科学研究所主任研究員
- 松葉千恵美 (株)二十一世紀企画
- 村野 京一 (株)二十一世紀企画

(各部会とも五十音順)



21世紀フォーラム 第十四号

発行 一九八三年九月二十日

発行人 等井章弘

発行所

21世紀フォーラム事務局

東京都千代田区永田町一丁目四十二

フレンドビル6階

(株)二十一世紀企画内

電話〇三・一五〇八一・二六二五

編集

21世紀フォーラム事務局

印刷

(株)東京印書館

